

42970

教科書文庫

54
210
41-1941
20000
89904

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

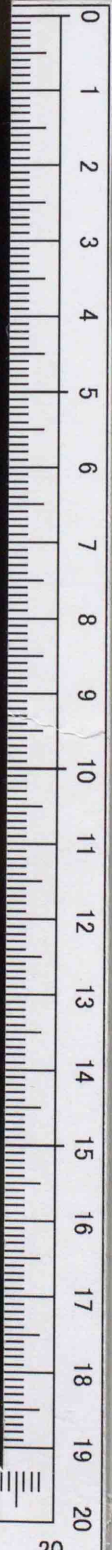
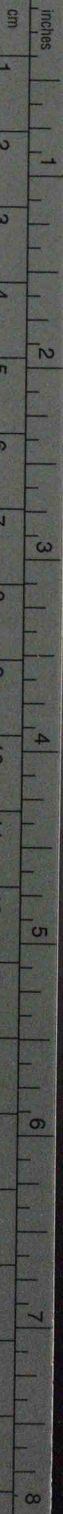


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文學博士西田直二郎著

中國史通記

初年級用



濟定檢省部文  
用科史歷校學中・日四月九年六十和昭

教科書文庫  
4  
210  
41-1941  
2000089904

資料室

4a  
210  
AB16

學 中  
記 通 史 國

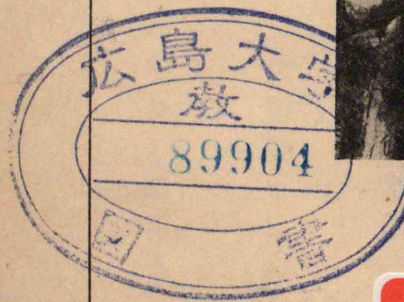
用 級 年 初

授教學大國帝都京

著 郎 二 直 田 西 士 博 學 文



像 子 太 德 聖



広島大学図書

2000089904



例言

一、本書は今回昭和十二年三月文部省制定の改正教授要目に準據し、新たに中學校第一學年並びにこれと同程度の國史の教科書として編纂したものである。

一、我が國に於ける古今の重要な歴史事象を知らしめるとともにその裡にあつて、國史を通觀することに意を用ひたため、名づけて國史通記とした。

一、本書の記述にあつては、特に左の四點に力を入れ、本書の綱領とした。

一、國體の淵源とその本義とを、歴史事實によつて知得せしめることにつとめたこと。

二、國民精神が一貫して歴史の諸事象に顯現せることに留意し、そ

の發揚を歴史に鑑みて會得せしめることを計つたこと。  
 三、國民文化が斷えざる進展をなし、外來文物を醇化しつゝ、連綿として發展せることの記述に意を用ひたこと。  
 四、郷土史が國民の歴史的情操に關聯すること深きを思ひつとめてその説述に便なるやう材料を取つたこと。

圖版・挿圖等に於て郷土史と國史一般との連繫を容易ならしめるやうにつとめ、且つこれが應用を期待し得るやうにしたこと。

一、本書挿入の圖版・挿圖は如上の目的の外出來得るかぎり、最近學界の新研究に副ふものを選び、以て一は斯界の進歩に由る清新の知識を與ふることと、一は本文記述の簡潔を裨補するを希うたのである。

昭和十二年十月

著者 しるす

中學

國史通記

初年級用 目次

序 說

古 代

第一篇 古代第一期 神代及び上代(肇國より大化改新まで) 三

第一章 肇國の宏遠 三

第二章 神武天皇 六

第三章 敬神崇祖 皇威の伸張 九

第四章 古代文化と國民生活 一六

第五章 文物の傳來 一九

第六章 聖德太子 二三

第二篇 古代第二期 大化改新と奈良時代(大化改新より平安奠都まで) 一

目 次

第七章 政治上の革新 ..... 二九

第八章 奈良奠都 ..... 三四

第九章 奈良時代の文化 ..... 三九

第三篇 古代第三期 平安時代(平安奠都より  
頼朝幕府設立まで)

第十章 平安奠都と政治の更新 ..... 四三

第十一章 延喜天曆の治 ..... 四七

第十二章 京都の貴族と地方武士 ..... 五一

第十三章 平安時代の文化 ..... 五二

第十四章 院政の創始 ..... 五八

第十五章 源平二氏の興起 ..... 六〇

第十六章 平氏の全盛とその滅亡 ..... 六五

中世

第四篇 中世第一期 鎌倉時代(源頼朝幕府設立より  
後醍醐天皇御即位まで)

第十七章 鎌倉幕府の創立 ..... 六九

第十八章 鎌倉幕府の越權 ..... 七二

第十九章 元寇 ..... 七六

第二十章 鎌倉時代の文化 ..... 八〇

第五篇 中世第二期 建武中興と吉野時代(後醍醐天皇御即位より  
後龜山天皇御還幸まで)

第二十一章 後醍醐天皇の御即位 中興政治の發現 ..... 八六

第二十二章 建武中興 ..... 九〇

第二十三章 吉野の朝廷 ..... 九四

第六篇 中世第三期 室町時代(後龜山天皇御還幸より  
信長入京まで)

第二十四章 室町幕府の創立 ..... 九九

第二十五章 室町幕府の衰運……………101

第二十六章 室町時代の外交……………104

第二十七章 室町時代の文化……………108

第二十八章 群雄の割據……………113

第七篇 中世第四期 安土桃山時代(信長入京より  
秀吉薨去まで)

第二十九章 織田豊臣二氏の統一……………110

第三十章 海外知識 秀吉の海外經營……………117

第三十一章 安土桃山時代の美術工藝……………120

近世

第八篇 近世第一期 江戸時代前期(秀吉薨去より  
吉宗の襲職まで)

第三十二章 徳川家康 江戸幕府……………123

第三十三章 海外諸國との交通 島原の亂……………129

第三十四章 徳川綱吉 元祿時代……………132

第三十五章 江戸時代前期の文化……………136

第九篇 近世第二期 江戸時代後期(吉宗の襲職より  
王政復古まで)

第三十六章 江戸幕府の中興……………139

第三十七章 江戸幕府の衰耗 對外關係……………147

第三十八章 勤皇思想の勃興……………149

第三十九章 大政奉還……………156

第四十章 江戸時代後期の文化……………157

最近世

第十篇 最近世第一期 明治時代(明治天皇御踐祚  
より御崩御まで)

第四十一章 明治時代……………157

第四十二章 明治時代の内治(一)……………一八〇

第四十三章 明治時代の内治(二)……………一八五

第四十四章 明治時代の外交 國威の伸張……………一八六

第四十五章 明治時代の文化……………一八四

第十一篇 最近世第二期 大正・昭和時代(大正天皇御踐祚以後)……………

第四十六章 大正時代……………一九九

第四十七章 現代の情勢……………二〇二

目次終

中國史通記

初年級用

文學博士 西田直二郎著

序 說

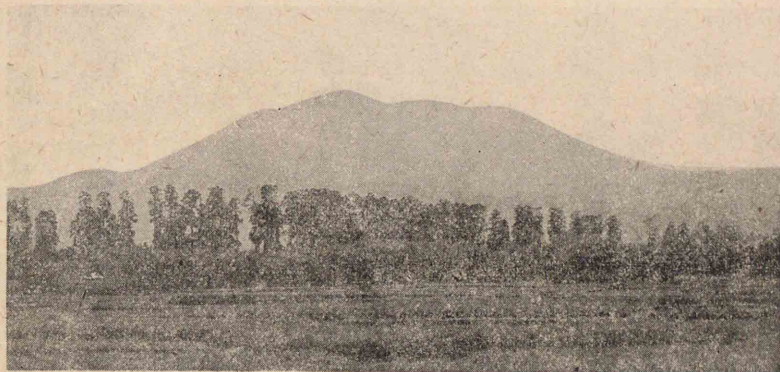
國史の學習 明治天皇は我が國の歴史については、つねに御心を寄せられ、御製のうちにも

いにしへのふみ見るたびに思ふかな  
おのが治むる國はいかにと

と詠み給うたのは、古へを稽カシヤへさせられ、今を思ひ給ひし畏き大御心と拜し奉るのである。我等國民歴史を學ぶものは古今の變遷のうちによく我が國體の尊嚴とその精華の發するところとを知り、またよく我等祖先の功業と人文興隆の績アズナとを見て、國民として今後ますます

【圖説】 狭野神社は霧島山の東麓宮崎縣西諸郡高原村にあり、神武天皇を祀り、宮崎神宮の別宮である。天皇の御名狭野尊によりて名づけられ、古來御降誕の所として傳へられてゐる。沿道老杉の並木鬱蒼として雲を摩し、幽寂、森嚴の神境を圖はこの杉並木と霧島山である。

\* 天平六年に海大養岡麻呂の詠んだ歌。(萬葉集卷六)



(原高の向日) 土郷の文化代古

ます皇運を扶翼し奉り、國家の隆昌と文化の發達とに貢獻すべきを思ひ、且つこれを實行せなければならぬ。

我が日本國は萬世一系の天皇これを治め給ひ、民よく忠にして、古よりこのかた君と臣とはその情父子のごとく、外には國威つねに揚り、いまだ嘗て外國の侮を受けたことがない。かゝる光輝ある歴史をもつてゐるものは他に見ることができない。

御民吾生ける驗あり 天地の榮ゆる時に 逢へらく思へば

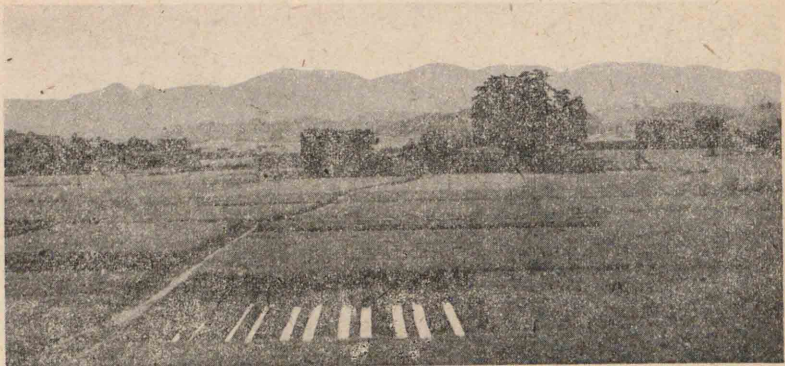
のこゝろは、我が國の歴史を知るものゝひとしく感ずるところである。

### 第一篇 古 代

#### 第一期 神代及び上代 (肇國新まで)

#### 第一章 肇國の宏遠

神代 皇極天皇四年 (三〇五)  
大八洲國  
【圖説】 圖は島根縣今市附近斐伊川(昔の簸川)流域地方の平野の村落の様で、この地方村落の特色として宅地には必ず東西・北の三面を繞る樹木があり北風を防いでゐる。古代の村落のさまが窺はれる。



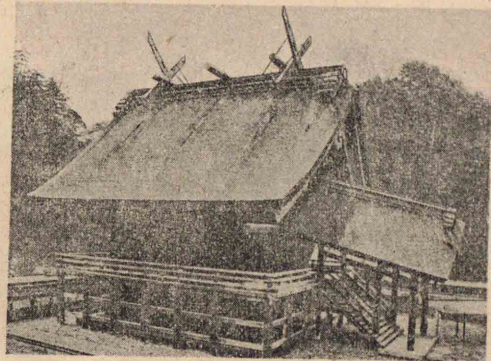
(野平の雲出) 土郷の文化代古

● 天照大神 天地の開けしはじめのとき、伊弉諾尊伊弉册尊の二神出でましてわれ等の住める大八洲の國を造り成し、山川草木を整へ給うて、こゝに天下の主として、天照大神を生ませ給うた。

大神は御光殊に明はしくましまし、その御徳は天地の内をあまねく照し徹らせ給うたので、二神はこゝろ喜びまし、尊くも高天原を以て永へに大神に授け給うた。



出雲大社は大國主命の退き給うた杵築宮の跡である。島根縣大社町にある。本殿は大社造と稱し、太古の住宅建築の様式を傳へたものと考へられる。



出雲大社本殿

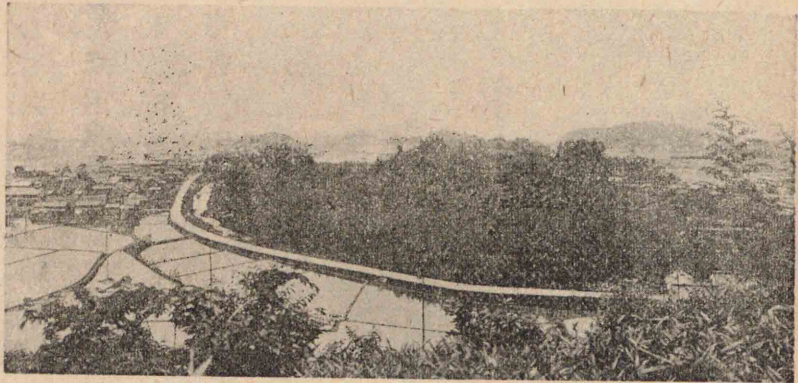
●出雲の國 二神はまた素戔嗚尊を生ませられたが、尊は御心猛く勇ましくして、出雲の國に下り給ひ、八岐大蛇を退治し、天叢雲劍を得てこれを天照大神に奉られた。また出雲にては素戔嗚尊の御子、大國主命は、海を渡り來られた小彥名命とともに、力を合せ心を一にして、土地を開き産業を起し、醫藥の法を授けるなど、民のために盡されたので國の内は安らかに治まつて來た。

こゝに於て天照大神は、御子孫をして大八洲國を永く治めしめよと思召され、經津主命と武甕槌命とを出雲に下して、大國主命にその國土を譲り奉るべきことを諭さしめられた。大國主命は仰せをかしこみて國土を奉り、自らは杵築宮に退かれた。

出雲大社 國讓

天孫降臨

奈良縣高市郡飛鳥村にある飛鳥の元興寺の附近豊浦の丘から北方の平野を臨む景で、遠く耳無山がのぞまれ、川は飛鳥川で中央の森は雷の丘である。



古文化の郷土 (大和の野)

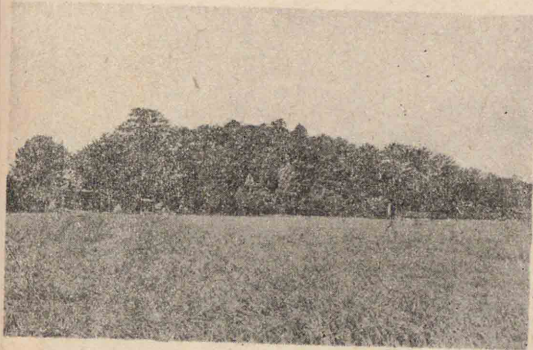
●天壤無窮の神勅 天照大神は葦原の中つ國のさまを御覽じて御孫の瓊瓊杵尊をこの國に降し給うた。この時にあたり、勅して 豊葦原の千五百秋の瑞穂國は、これ我が子孫の王たるべき地なり。汝皇孫ゆきて治めよ。實祚の隆えまさんこと、天壤と共に窮なかるべし。と宣ひ、また八咫鏡を賜ひて、「この鏡を見ることが、なほわれを見るごとくせよ。」と仰せられた。 萬世一系にして天壤と共に窮りない皇運は實にこの時にかたく基が定められた

三種の神器

④日向三代 瓊杵尊は八咫鏡・八坂瓊曲玉・天叢雲劍の三種の神器を捧持し、諸神を随へて日向に降臨せられた。瓊杵尊から御子の彦火火出見尊、御孫鸕鷀草葺不合尊の御三代の間は、日向の地に都せられた。天津日嗣の悠遠なことはこれまでをなほ神代と稱まつる。

第二章 神武天皇

五瀬命 御東征 神武天皇は鸕鷀草葺不合尊の皇子で、はじめは日向に坐したが、皇祖大神の國を肇め給ひし大御心をつがせられ、天下の政を広く聞しめすため、御兄五瀬命などとお議りになり、水軍を率ゐて大和に向はせられた。



五瀬命御墓

〔和名〕 日向山と申し和歌山縣海草郡名草山の北麓にあり、この地にまた尊を祀る窪田神社が鎮座する。

五瀬命



日向平野遠望

日向平野遠望

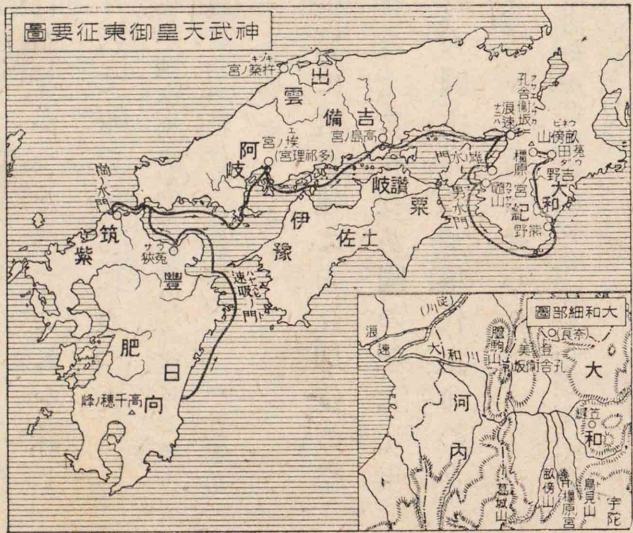
日向（宮崎縣）は天孫降臨の國で舊くより遺蹟の傳へられるものが多い。この圖は、宮崎市宮崎神宮の附近岡山公園内の丘陵の上より大淀川の平野を遠望した景で左方松の木に向ふに宮崎神宮並びに宮崎市街がある。宮崎神宮は霧島山麓の狹野神社とともに神武天皇を祀り奉り、其の起源については、神武天皇の皇子神八井耳命の御子健磐龍命が征西鎮守として筑紫に御下向の際に社殿を創建したのに創まると傳へられてゐる。

東征の順路

御東征の御道筋は日向から菟狹今の大分縣宇佐郡宇佐に進み給ひ、崗水門今の福岡縣遠賀郡蘆屋町、遠賀川の川口などを経て瀬戸内海に入り、安藝の埃宮又は多祁理宮今の廣島縣安藝郡府中町、廣島市東方舌備の高島宮今の岡山縣兒島郡甲浦村、高嶋岡山市の南方にも軍をとどめられ、後浪速今の大阪市の地に着き、東に進み、河内から山を越えて大和に入らうとせられた。

大和の平定  
長髓彦

大和には長髓彦がゐて勢つよく、皇軍を孔舎衛坂（河内から大和に越える道、生駒山の南、大阪府中河内郡孔舎衛村）にふせぎ、五瀬命は流矢に中り傷を蒙られた。天皇は道をかへ、海路から南を回つて紀伊に入られ、熊野を経て道臣命の先導により險しい山々を越え、諸所の賊を平げて、大和の宇陀に入らせられた。長髓彦が奉じてゐた饒速日命は、天つ神の御末であつて、長髓彦に



饒速日命の歸順

天皇に降伏することを勧めたが、竟に肯かなかつたのでこれを誅して歸順せられた。かくて大和の國はすべて平定するに至つた。

金鷄勳章の由來

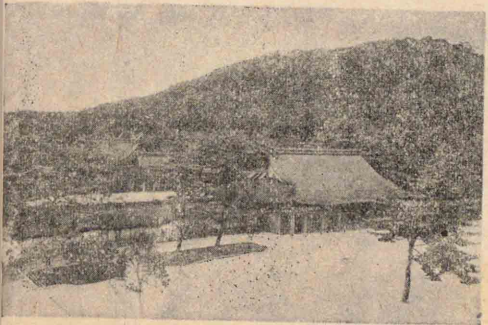
天皇の軍が熊野から大和に入らるるや、金色の鷄が飛び來て、天皇の御弓の弦にとまり燦然たる光を放つたので、皇軍は勇み進み、賊は眼眩み、勢挫けて逃げ散つた。今日軍功ある者に授けられる金鷄勳章はこの事蹟に因つて制定せられた。

●御即位 天皇は畝傍山の東南の橿原に宮を建てられ、即位の禮

紀元元年

五十鈴媛命

圖説 畝傍山の東南にある。古の橿原宮の地に立てられたもので、神武天皇及び同皇后を祀つた官幣大社である。



橿原神宮

を擧げさせられた。これ我が國の紀元元年である。この時、大國主命の子、事代主命の女五十鈴媛命を立て、皇后とせられた。

日本の國の號は、浦安國、虛空見日本國、細戈千足國、秋津島などの名があつた。

●敬神崇祖と政治 天皇はその後、大和の鳥

見の山中に靈時を立てられ、皇祖大神をお祀りになつた。また御政治の上にも神祇を祭

① 瓊瓊杵尊可愛山陵 瓊瓊杵尊は天照大神の神勅を受け給ひ、三種の神器を奉持して諸神を

隨へさせて日向の國高千穂の峯に降臨し給ひ、四方を經略せられ、國つ神の女木花開耶姫を妃とせられた。御陵は鹿児島縣薩摩郡東水引村大字宮内可愛山にある。

② 鵜戸神宮 神武天皇御父鸕鷀草葺不合尊を祭る御社で日向の國(宮崎縣)南那珂

郡鵜戸村に鎮坐して相殿には天照大神・天忍穗耳尊・瓊瓊杵尊・彥火火出見尊・神武天皇の五柱を合せ祀られてある。本神宮は南海に斗出し、滄海が岩の根をあらひ清淨森嚴の靈地で、主神御降誕の御地と傳ふ。

③ 神武天皇御發船の地 宮崎縣には天孫降臨や神武天皇に關する傳説が所々に傳はつてゐる

が、宮崎縣兒湯郡美々津港は古來神武天皇御發船の處と傳へられてゐる。港口には神武天皇を奉祀する郷社立磐神社が鎮坐し、陰曆八月朔日には「おきよく」といつて觸れ歩く行事があり、社頭には、天皇の御腰掛岩と傳ふるものもある。

④ 安藝・吉備の船路 神武天皇は九州より中國に到り給ひ、安藝の埃宮(又は多祁理宮)に

留り給ふことあり、それから吉備に入らせて高島宮にましまし、更に船路を浪速に進めた

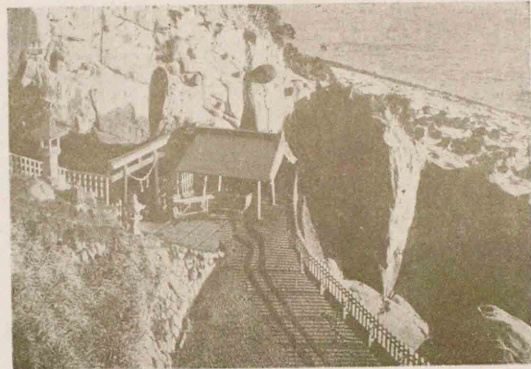
一 皇

基

皇 基 悠 遠



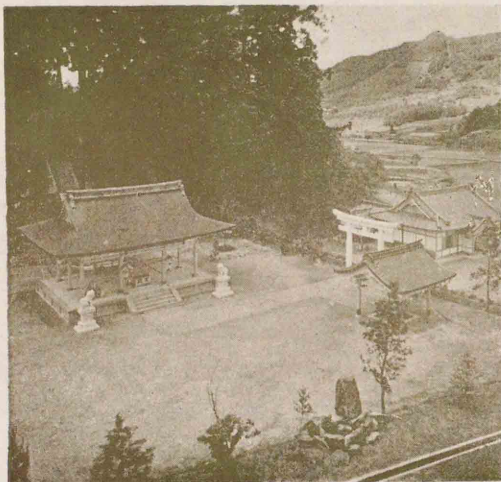
神武天皇日向御發船の地み津



鸕鷀戸神宮



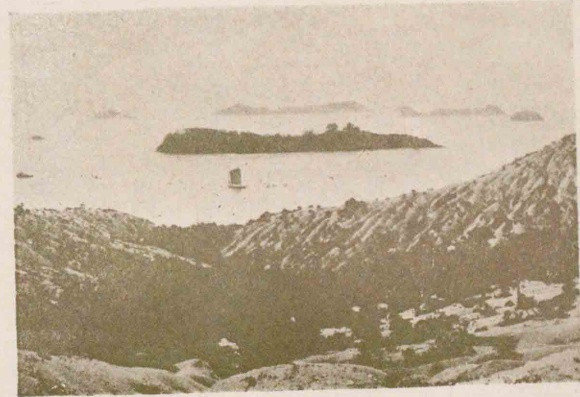
瓊杵尊可愛山陵



皇軍を導いた八咫鳥の神社



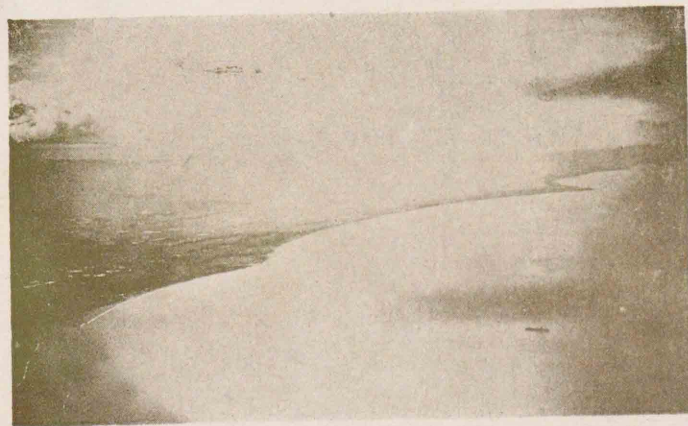
皇軍の難路 宇陀の山々



安藝・吉備の船路

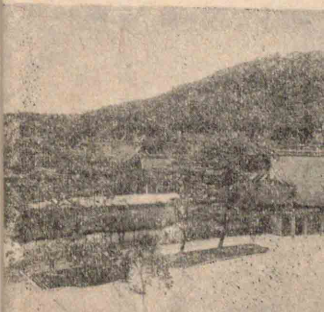


大和の國內



海速の浪

【圖説】  
 畝傍山の東南にある。古の橿原宮の址に立てられたもので、神武天皇及び同皇后を祀つた官幣大社である。



原神宮

五十鈴姫命を立て、皇后とせられた。日本の國の號は浦安國虛空見日本國、細戈千足國、秋津島などの名があつた。

●敬神崇祖と政治 天皇はその後、大和の鳥見の山中に靈時を立てられ、皇祖大神をお祀りになつた。また御政治の上にも神祇を祭

— 遠 悠 基 皇 —

① 瓊杵尊可愛山陵 瓊杵尊は天照大神の神勅を受け給ひ、三種の神器を奉持して諸神を隨へさせて日向の國高千穂の峯に降臨し給ひ、四方を經略せられ、國つ神の女木花開耶姫を妃とせられた。御陵は鹿兒島縣薩摩郡東水引村大字宮内可愛山にある。

② 鵜 戸 神 宮 神武天皇御父鷓鴣草葺不合尊を祭る御社で日向の國(宮崎縣)南那珂郡鵜戸村に鎮坐まして相殿には天照大神・天忍穗耳尊・瓊杵尊・彥火火出見尊・神武天皇の五柱を合せ祀られてある。本神宮は南海に斗出し、滄海が岩の根をあらひ清淨森嚴の靈地で主神御降誕の御地と傳ふ。

③ 神武天皇御發船の地 宮崎縣には天孫降臨や神武天皇に關する傳説が所々に傳はつてゐるが、宮崎縣兒湯郡美々津港は古來神武天皇御發船の處と傳へられてゐる。港口には神武天皇を奉祀する郷社立誓神社が鎮坐し、陰曆八月朔日には「おきよ〜」といつて觸れ歩く行事があり、社頭には、天皇の御腰掛岩と傳ふるものもある。

④ 安藝・吉備の船路 神武天皇は九州より中國に到り給ひ、安藝の埃宮(又は多祁理宮)に留り給ふことありそれから吉備に入らせて高島宮にましまし、更に船路を浪速に進めた。この圖は吉備の國(岡山縣)の南端から瀬戸内海を望んだところ安藝の海から大阪灣への航路を前にして向ふには四國の山が霞んで見える。

⑤ 浪 速 の 海 天皇の御軍は今の大阪灣から淀川の河口に入り給はんとせられたが浪が速くあつたので浪速の名がこれから出た。難波といふのも同じ語である。皇兄五瀬命は、孔舍衛坂で傷を蒙られ、この海で御血をすゝがれたので血沼の海(茅渟の海)の名がこれに因んで稱へられてゐる。

⑥ 宇 陀 の 山々 天皇は道をかへて紀伊の熊野から、大和の宇陀に出られ、峻しい山々を經られて、大和の平野に軍を進められた。この圖は大和(奈良縣)宇陀郡の山間の路である、高く聳えてゐるのは伊勢・大和の境に屹立する高見山である。

⑦ 八 咫 鳥 神 社 皇軍は道臣命が先導し奉つたが、また八咫鳥が御道を教へ奉る奇瑞があつた。今も大和にはこの功のあつた八咫鳥を祀る神祠がある。圖は宇陀郡伊那佐村高塚にある幽邃の神境である。

⑧ 大 和 の 國 内 峻岨な山岳地から天皇は大和の平野に入らせられ、こゝに平和の大宮居が營まれた。天津日嗣の尊さは、いよ／＼照り輝き、國の民には幸が満ち足らうてゐた。圖中の山は天香山である。

祭政一致

政治の組織

りたまふことを第一とせられ、祭政は一致してゐた。こゝに於て天種子命(中臣氏の祖)と天富命(齋部氏の祖)とは専ら祭祀を掌り、道臣命(大伴氏の祖)と饒速日命の子可美眞手命(物部氏の祖)とは宮殿を警衛し軍事にたづさはり天皇の御政を輔け奉つた。

國造・縣主

またこれらの氏族もそれぞれの氏神を篤く祀つてゐた。地方に

悠 遠

また、この區は吉備の國（岡山県）の南端から瀬戸内海を望み、この安藝の海から大阪灣への航路を前にして向ふには四國の山が霞んで見える。

⑤ 浪速の海 天皇の御軍は今の大阪灣から淀河の河口に入り給はんとせられたが浪が速くあつたので浪速の名がこれから出た。難波といふのも同じ語である。皇兄五瀬命は、孔舎衛坂で傷を蒙られ、この海で御血をすゝがれたので血沼の海（茅渟の海）の名がこれに因んで稱へられてゐる。

⑥ 宇陀の山々 天皇は道をかへて紀伊の熊野から、大和の宇陀に出られ、峻しい山々を経られて、大和の平野に軍を進められた。この圖は大和（奈良縣）宇陀郡の山間の路である、高く聳えてゐるのは伊勢・大和の境に屹立する高見山である。

⑦ 八咫鳥神社 皇軍は道臣命が先導し奉つたが、また八咫鳥が御道を教へ奉る奇瑞があつた。今も大和にはこの功のあつた八咫鳥を祀る神祠がある。圖は宇陀郡伊那佐村高塚にある幽邃の神境である。

⑧ 大和の國內 峻岨な山岳地から天皇は大和の平野に入らせられ、こゝに平和の大宮居が營まれた。天津日嗣の尊きは、いよ／＼照り輝き、國の民には幸が満ち足らうてゐた。圖中の山は天香山である。

祭政一致

政治の組織

りたまふことを第一とせられ、祭政は一致してゐた。こゝに於て天子命（中臣氏）と天富命（齋部氏）とは専ら祭祀を掌り、道臣命（大伴氏）と饒速日命の子可美眞手命（物部氏）とは宮殿を警衛し軍事にたづさはり天皇の御政を輔け奉つた。

またこれらの氏族もそれぞれの氏神を篤く祀つてゐた。地方には國造・縣主などを置いて神を崇め、民を治めさせられた。

國造・縣主

天兒屋根命……天種子命——中臣氏（政治・祭祀を掌る）

天太玉命……天富命——齋部氏（同）

天忍日命……道臣命——大伴氏（軍事を掌る）

饒速日命……可美眞手命——物部氏（同）

國造・縣主もその職を世々に傳へ、地方にあつて氏人を率ゐる神を崇敬してゐた。

第三章 敬神崇祖 皇威の伸張

● 崇神天皇 神武天皇の敬神崇祖の御政を承けられ、第十代の崇神

崇神天皇の敬神  
崇祖  
笠縫邑①

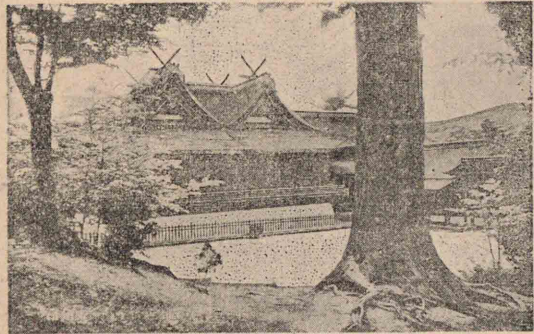
〔圖説〕  
狭山池は大阪府  
南河内郡にあ  
り、依網池と共  
に崇神天皇の掘  
らしめ給ふたも  
ので、日本最古  
の池である。東  
西四町・南北八  
町。

皇威の伸張

〔圖説〕  
岡山縣は古の吉  
備の國で吉備津  
彦命を祀つた吉  
備津神社があ  
る。  
吉備郡眞金町。

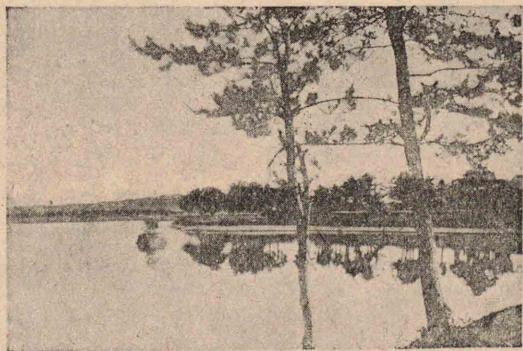
四道將軍の派遣

豊城入彦命



吉備津神社

天皇はまた皇祖を崇め、神祇を敬ひ給ふ御心  
があつく、國家の基を固め、民をよく治め給う  
た。即ちこの御代には、天照大神を崇め給  
ひ、その時まで天皇が大殿の内て祀られてゐ



狭山池

たのをおそれ多いと  
思召されて、豊鍬入姫  
命に託し、大和の笠縫  
邑にお祀りになつた。  
また、地方の民を治  
めることに御心を注がせられ、皇族を東海北  
陸・山陰・山陽の四道にお遣しになり、皇威に従  
はぬものをお伐ちになつた。これを四道將  
軍といふ。さらに皇子豊城入彦命を東國に

遣し、その地方を治めさせられた。かくて、國內が治まり、海外から

も徳を慕つて歸化するものもあつたから、  
人民の數を調べ、租税を定めて、男には弓弭  
の調、女には手末の調を課せられ、各地に  
池溝を掘つて、民の業を勧め、船を造つて交  
通の便をはかられた。

皇大神宮

四道將軍には、大彦命が北陸方面に、武渟川別命は東海  
地方に出でられ、吉備津彦命は山陽備前備後の地方に  
向はれ、また丹波道主命は山陰道の丹波丹後の地方に  
入られ、その地方をそれぞれ經略せられた。

●垂仁天皇 次の帝、垂仁天皇も篤く、神

を敬はれ、皇女倭姫命に仰せて天照大神を笠縫邑から伊勢の五十鈴  
川上の清地に遷し祀らしめられた。これ皇大神宮の起源である。

◎御心を民治にそゝがれ河内の茅渟池、大和の迹見池等多くの池を

租税②

勸業③

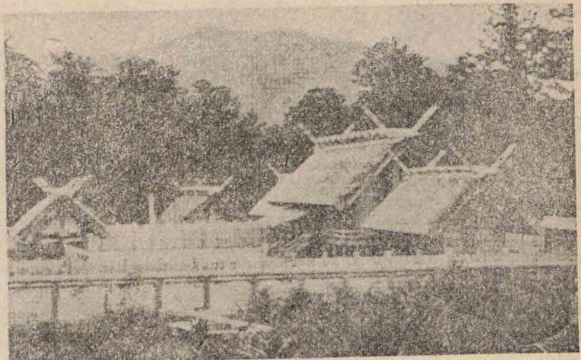
四道將軍

〔圖説〕  
皇大神宮  
三重縣宇治山田  
市。

垂仁天皇の敬神  
崇祖

皇大神宮起源④  
皇紀六五六年

勸業⑤





殉死の禁<sup>③</sup>

第一篇 古代 第二期 神代及び上代

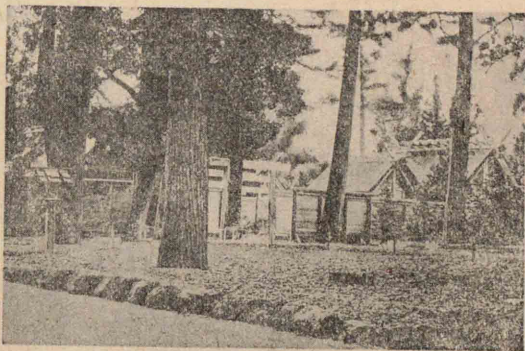
三

掘らしめ民の業を勧められた。また上古殉死の風があつたのを、この御代には禁止せられた。

皇大神宮(内宮)  
豊受大神宮(外宮)

式年遷宮

内宮を去る西北五十町の地にある。豊受大神は和久産巢日神の御子神で五穀の神として、もと丹波の國に祀られてゐた。



豊受大神宮

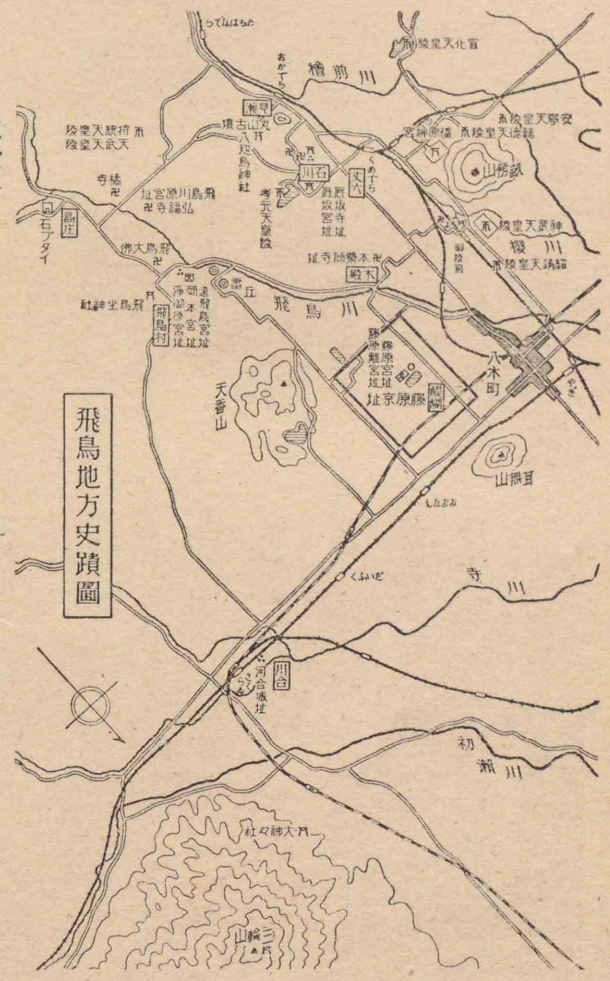
- (1) 皇大神宮は内宮とも稱しまつる。後雄略天皇の御代に豊受大神を丹波よりお遷しになつた。これ豊受大神宮で外宮とも申し上げる。内宮外宮兩社殿は天武天皇の御代その御造替の制が定められ二十年毎に新造し奉るきまりとなつた。室町時代の末に一時中絶したが正親町天皇の御代にこの制を再興せられ現今に及んだ。今の社殿は昭和四年の御造替である。
- (2) 垂仁天皇は野見宿禰の意見を用ひ、土で造つた人馬を以て殉死に代へしめられた。これを埴輪といひ、今も古墳の邊に發見せられる。埴輪や古墳の内の副葬品等によつて、

上古の風俗や工藝の一斑が知られる。

③ 垂仁天皇の御代田道間守は天皇の命により非時香木實(橘の類といふ)を求めて、常世國に行き、これを獲て歸つたが天皇崩御の後であつたので、劍を御墓の樹にかけ、天皇の



大和野遠高(不詳複製)



望遠野平和大

神武天皇の橿原宮カンハラノミヤ以來平城京に至るまでも御歴代の皇居は、ほとんど大和平野にあり、従つて大和は出雲・日向とともに上代日本文化の郷土といつてよい。この圖は大和平野の東方、三輪山の麓、桃花の開く麥島の間より遠く大和三山を望んで畫いたもので所々こんもりとした鎮守の杜モリの間には白く光る池が見える。中央の山は畝傍山、右端の山が耳無山、左端が天香山、この三山の間地の藤原宮の址がある。

御あとを追ひ奉つたといふ話がある。

景行天皇と皇威の伸張

熊襲

日本武尊

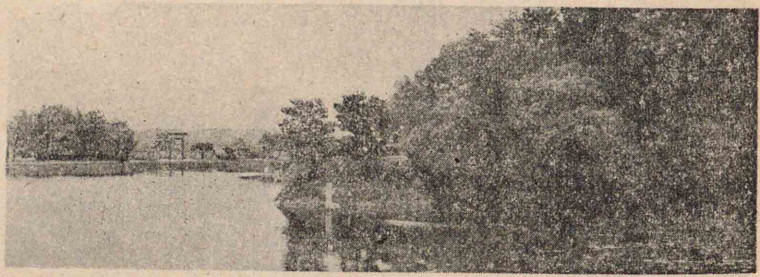
蝦夷

●景行天皇 當時なほ九州南部には熊襲クマソが住んでゐて叛くことがあつた。景行天皇は熊襲を親征せられ、また皇子日本武尊を遣はしてこれを平定せしめられた。東北地方では蝦夷エミがはびこり、皇威に従はなかつたから日本武尊はまた天皇の命を受けてこれを討伐せられた。この討伐にあつて、尊は伊勢の皇大神宮に詣まで、倭姫命から天叢雲劍を受け給ひ、駿河の野でこの劍を以て草を薙ぎ拂ひ賊軍を平げられた。これによつてこの神劍を草薙劍クサナギノツルギと申す。尊は進んで相模上總サマノカミから陸奥ムツに入られたが、凱旋ガイセンの道すがら、近江の伊吹山の賊を討ち給うた後、病の爲に伊勢の能褒野で薨ホぜられた。

奈良縣生駒郡都跡村ツルノにあり菅原伏見東陵といふ。池中に見える小墳は田道間守の墓と傳へられてゐる。

草薙劍

能褒野



陵皇天仁垂

熱田神宮  
成務天皇

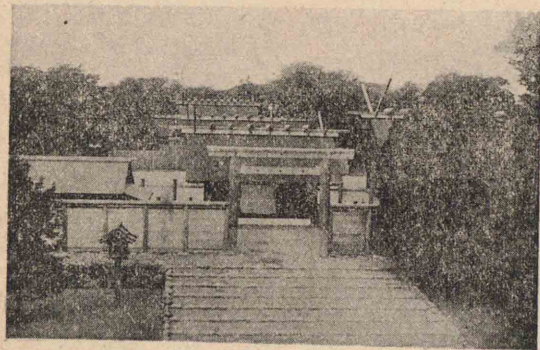
草薙劍は尾張の熱田神宮に祀られてある。次の成務天皇は國內統一と國外への發展とに努め給うた。

④ 仲哀天皇と神功皇后

朝鮮半島で

名古屋市南區にあり、草薙劍を祀る。建築様式は伊勢神宮と同じく唯一神門造である。

任那日本府



熱田神宮

は、古く馬韓辨韓辰韓の諸國があつたが、後には高麗新羅百濟伽羅(任那)が國を建てた。すでに崇神天皇の御代には、鹽乘津彦を遣はして、伽羅を援けしめられた。これ任那日本府の起源である。仲哀天皇の御時熊襲が新羅と通じて叛いたので、天皇は神功皇后と共に親征し給う



日本武尊東征順路圖

三韓征伐  
皇紀八六〇年

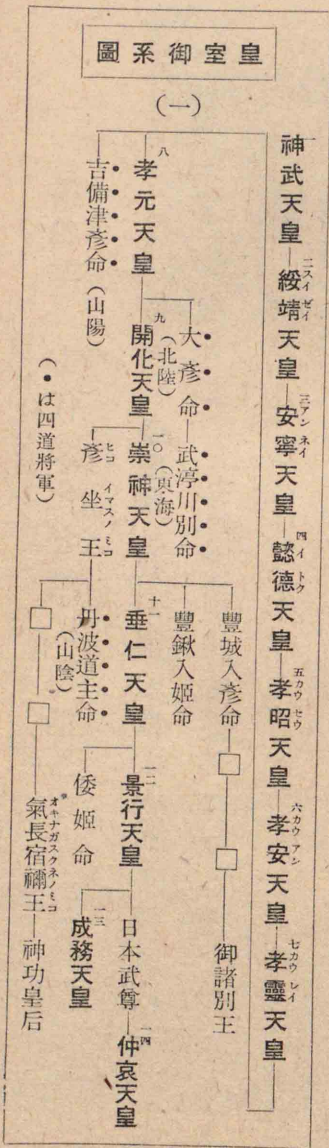
馬韓・辨韓・辰韓を三韓といつたが、我が國では新羅・百濟・高麗三國をも舊もいつた。

たが陣中に崩ぜられた。皇后は熊襲がかく叛くのは新羅の援がある爲であると思召され、武内宿禰と議り、御親ら軍を率ゐて新羅を討伐せられた。新羅王はすぐに降り、入貢を誓ひ、百濟高麗も遂に服し、熊襲も永く叛かぬやうになつた。かくて皇威はいよいよ振ひ、海外の文物がまた我が國に入り來ることもおひく／＼繁くなつた。



古代朝鮮要地圖

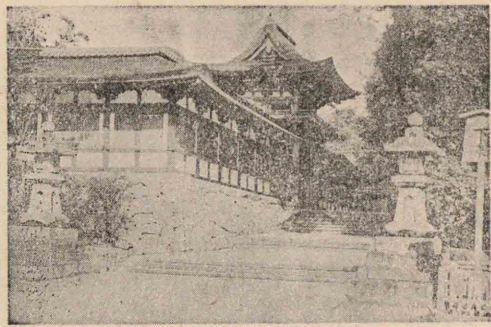
皇室御系圖



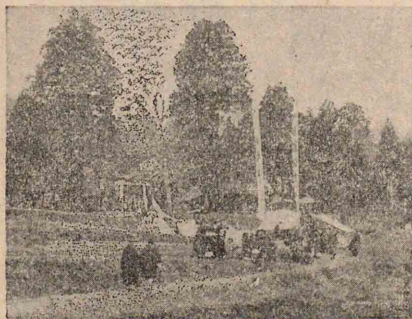
第四章 古代文化と國民生活

官幣大社石上神宮は奈良縣山邊郡にある。神武天皇大和平定の時の靈劍を祀る。太古から軍務を掌つてゐた物部氏が祀り、これに仕へてゐた。

京都府福知山市に近い八幡宮の祭禮のさまで、我が國の諸地方に見られる氏神の御祭の情景である。



●國家 我が國家は太古から祭政は一致してゐたので、國民も亦神に仕へるとひとしく石朝廷に仕へ奉つた。はじめ天孫降臨に隨ひ上まつた諸神の子孫や、神武天皇の御代の功神臣の子孫がその氏人等宮を率ゐて朝廷に仕へ奉り、祭祀軍事その他の職務を掌つてをり、地方でも國造縣主があつて氏人とともに、その地方を治めてゐた。東國地方の蝦夷や九州にゐた熊襲なども、次第に朝廷の御稜威に服し、皇化はあ



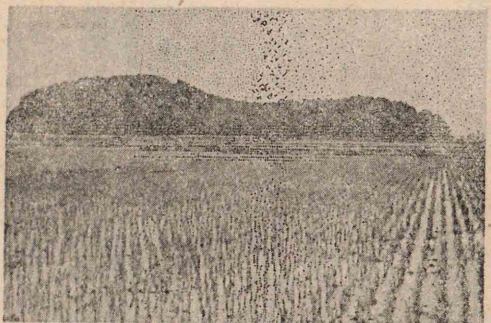
氏神の社

まねく大八洲に行きわたつた。その中に於ても、大和地方や出雲地方、九州地方は土地が早くひらけ文化もまた榮えた。

●宗教文藝 國民はよく神祇を敬ひ、祖先を崇め、清く明るい心を以て神々に仕へ、神の恵みに心から感謝する習はしがあつた。

今も各地に祀られてゐる古い神社や村々の鎮守の社の祭禮には上古の國民崇敬のありさまをしのばせるものがある。また祖先をあがめる心の厚かつたことは、壯大な墳墓を築いて葬る風のあつたことにも知られる。今諸地方に遺つてゐる古墳に對しては國民はこの古代の人々の心を想ひ、これに向ひよく自らを處ましくせねばならぬ。

文學としては神祇を祭る祝詞があり、また語部があつて古い傳へを語り傳へてゐた。その他節をつけてうたふ歌謠なども古くから發達してゐた。神武天皇、日本武尊の御歌



古墳の圖

●圖解 現今我が國地方にはこの圖に見るやうな前方後圓の古墳が多くある。

工藝

衣服

食物

農業

住居



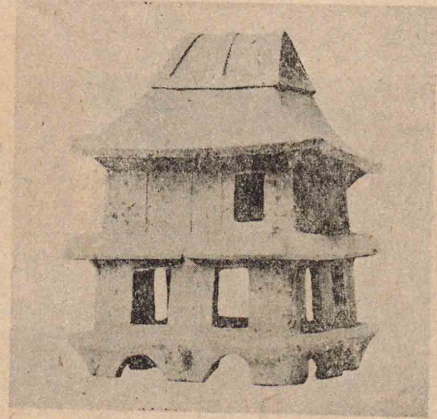
(子男) 輪 埴

なども今に傳へられてゐる。  
工藝も進み、刀、劍、鏡の製作、珠、玉、銅、鐵、  
陶土の製品に見るべきものが多くあ  
つた。

●衣食住

國民は性質潔白で簡素を愛したから衣食住にもよく

この好尚があらはれてゐた。衣服は楮  
麻から作つた袴、木綿が多く用ひられ、勾  
玉などを飾りとして用ひてゐた。食物  
は米、麥、粟などが早く見え、田には水田、陸  
田ともにひらけてゐた。ことに御歴代  
の天皇は農を勧め給うたので、國民の衣  
食の道は夙に豊かとなつた。この外狩  
獵、漁業も進み、山海の獲物もまた少くなかつた。



(形家) 輪 埴

住宅も簡素なもの



品土出び及飾装埴古

- 一、埼玉縣北足立郡桶川町から發掘した兜をかぶつてゐる武人の埴輪の頭部。
- 二、群馬縣前橋市天川町より發見の武人の埴輪の頭部。
- 三、大阪府泉南郡淡輪村の古墳から發掘せられた古代の鐵製の兜、全面に金を以て裝飾してある。

四、玉類の上列にある二つは、勾玉、次の列の三個は管玉、第三列右二個は切子玉、左の糸に繫いだものは小玉、いづれも裝身具として用ひられたもので、この外、丸玉、棗玉等がある。それ〴〵形状によつて名づけられたものである。

五、熊本縣益城郡六嘉村大字井寺にある古墳の内側の壁面に描かれてゐる彩色文様で、古墳壁の高さは二尺七八寸あり、壁面の上部より約二寸五分の所を、一尺五寸の幅で、帶のやうに、青・緑・朱・白の三色の模様が畫かれてある。

文様のうち車輪の形は恐らく鏡をあらはし、複雑な形をしてゐる直弧紋といふのは編物か、織物か、から來た意匠であらうといふ説がある。

が喜ばれ、柱には丸太を用ひ、屋根には茅などを葺き、すべて清純なものが愛せられた。

## 第五章 文物の傳來

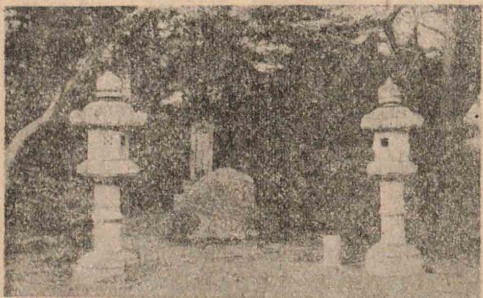
### 國民精神

#### ●國民精神と文物傳來

我が國の肇めは遠く久しく、固有の文化も早くから開け、國民は皇室を尊び、神を敬ひ、祖先を崇め、協同團結の精神がすぐれてゐる上に進取の氣が強かつた。また善い事はすぐに行ふ風が勝れてゐたから、外來の文物もよくとり入れられ、しかも固有の長所を失ふことなく、國運の隆盛を致したのである。

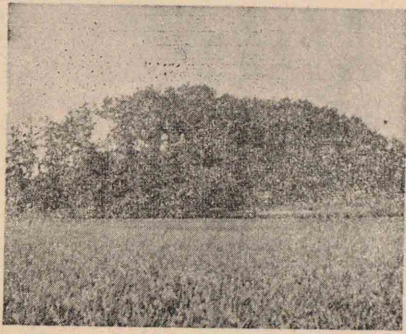
●漢學の傳來 朝鮮は支那と境を接し、且つ早くから交通をしてゐたので、その文化を多く傳

王仁の墓は今大阪府北河内郡菅原村の菅原神社の附近にある。



王仁の墓

京都府宇治にある。宇治は皇子が宮室を營んでをられた所で、古へ大和・難波・山陰・北陸との交通の要點であつた。



菟道稚郎子御墓

へてゐた。神功皇后の後、我が國と朝鮮との交通が大いに開けたので、支那の文物は朝鮮を経て我が國に傳はるやうになつた。應神天皇の御代百濟の阿直岐が來朝するや、皇子菟道稚郎子がこれについて漢學を學ばれ、後、博士王仁も召されて來り、論語千字文を獻じ、稚郎子はまた王仁を師として學問をせられた。その後支那の人阿知使主も歸化した。彼等は文筆を以て代々朝廷に仕へ記録の事を掌つた。王仁の子孫は河内に住み、西文氏といひ、阿知使主の子孫は大和にあつて東文氏と稱した。

●諸技藝の傳來 又この御代に、支那の秦の人の子孫といふ弓月君は養蠶・織物等に巧な多數の人々を率ゐて百濟から歸化した。その氏族を秦氏といふのは、機織の義によつたのである。また阿知使

漢氏

難波奠都  
外交  
歸化人

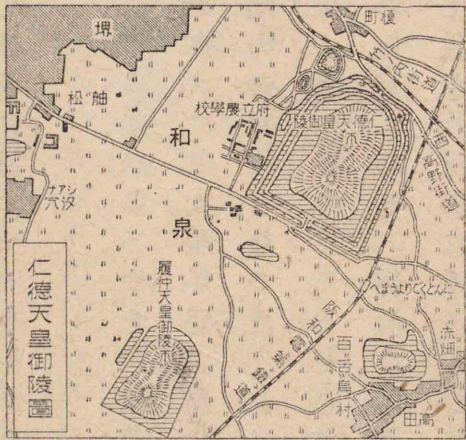
免税  
勸業

雄略天皇

主に従つて來た人々は綾織を傳へた。これは漢の人の後裔といふので漢氏といふた。新羅からはまた船工が來り、その他裁縫・鍛冶・酒造等の諸技術も次々に傳はつて、我が國の技藝の進歩を促した。

●仁德天皇の御代 仁德天皇は應神天皇の盛大な御代の後を承け、海外交通の便利な難波に都を奠められ、外は新羅・高麗の朝貢を促し、内には歸化人をよく用ひ、これを諸地方に配置して産業の發達に力を盡さしめられた。また國民の課税を免ぜられて民力を養ひ、池溝を掘り、産業をすゝめられたので國富み、民榮えて、その御仁政は永くたゞへられてゐる。

雄略天皇もまた殖産興業に御心を用ひられ、百濟から陶工・畫工等を召し或は



仁德天皇御陵

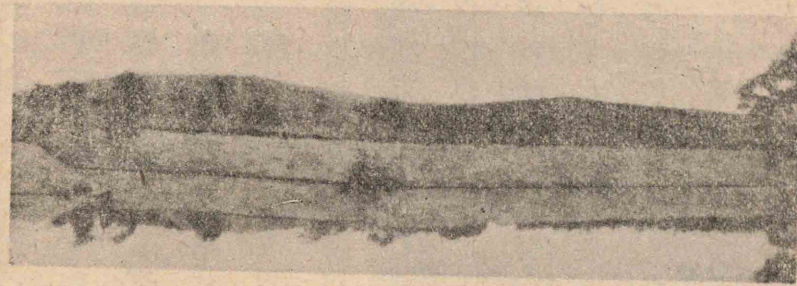
齋藏  
内藏  
大藏

圖 堺市の東方にある。大仙陵といひ、正しくは百舌鳥耳原中陵と稱し、御歴代の山陵中最大なるものである。

釋迦牟尼  
凡そ二千五百年前に出た。

支那  
後漢時代に傳はつたと云はれてゐる。

欽明天皇  
十三年  
皇紀一二二二年



仁德天皇御陵

南支那に使を遣して機織裁縫の工女を招かれた。

またこの時までには齋藏内藏があつたが、産業の發達につれてこの御代には大藏が建てられ、國庫も豊かになり、國力が盛んとなつた。

① 佛教の傳來 外來の諸文物のうち、また影響の大きいのは佛教の傳來である。佛教は印度の釋迦牟尼によつて説かれ、支那に入り、朝鮮にも傳はつてゐたが、欽明天皇の十三年に、百濟の聖明王が佛像、經文を献上し、別に表を上つてその功德を述べた。天皇は禮拜の可否を群臣にばかり給うたところ、蘇我氏は拜すべきを主張し、物部氏はこれに反對し、兩者の争は續いた。

やがて推古天皇の御代に、皇太子厩戸皇子(聖德太子)が攝政となり給ひ、篤く佛教を信仰せられたから、この教は次第に盛んになつた。

### 第六章 聖德太子

① 太子の御天性 聖德太子は厩戸皇子と申し奉り、用明天皇の第一の皇子にまします。御天性ことにすぐれられ、御仁德また高く、聰明

此の圖は唐本の御影と云つて舊くより法隆寺に傳はつたもので、今は帝室の御物となつてゐる。百濟の阿佐太子が太子を寫し奉つたとの傳がある。左右は皇子山背大兄王と厩戸王と云はれてゐる。



聖德太子及二王子

博學にあらせられ、一に豐聰耳皇子とも申し奉る。推古天皇の御時、太子は攝政となられ、天下の政治を覽られた。

② 太子の御事蹟 太子は博く海外の諸文物を採り用ひられたが、また神を敬うて政を行ひ給ひ、さらに我が日本國の尊いことを示さ



れた。

政治の上には、①冠位十二階を定めて人材登用の途を開かれ、②憲

法十七條を作つて國家の根本、人倫の

大道を明かに示された。また、③始め

て曆を、天下に頒ち給うた。④外國に

對しては支那と直接に國交を開かれ、

しかも自主的な態度を以て外交をつ

けられた。推古天皇の十五年小野

妹子を隋に遣はし、當時支那を一統し

て勢の頗る強い隋帝に對し、「日出處の

天子書を日没處の天子に致す」と記さ

れた國書を送られた。やがて隋使裴

世清は妹子を送つて來朝し、翌年この使者の歸國に際し再び妹子を

遣はされ、留學生高向玄理、僧旻なども伴はせて彼の地の制度、文物

を學ばしめられた。⑤また始めて我が國の歴史を撰ばしめられ、我

が國體を明かにし、國民の自覺を

進められた。⑥ことに神祇を敬

ふことを百官に示され、⑦佛教の

興隆にも力を盡させられた。攝

津の四天王寺大和の法隆寺など

の大寺は太子の建立にかゝるも

のである。御自ら經文を講ぜら

れ、またその註釋を施し、慈善救濟の事業をおこされた。⑧また美術

工藝の進歩にこゝろを用ひられる等のことがあつたので世の中が

よく治まり、國民ひとしく太子の御聖徳を仰ぎ奉つた。

①この時までの官職は、家柄によつて先祖以來定まつてゐたが、新らしく官位が定めら

人材登用 ①

冠位 ②

憲法 ③

曆法 ④

遣隋使 ⑤

小野妹子 皇紀二二六七年

法隆寺は奈良縣生駒郡法隆寺村にあり、聖徳太子が用明天皇の御遺願を奉じて建立された寺である。五重の塔の向つて左は中門、右は金堂、塔右端は講堂。塔と金堂と中門・廻廊(南半)は推古様式を持つ。木造建築として、は世界最古のものである。

國史 ⑥  
神祇 ⑦  
佛教 ⑧  
四天王寺 法隆寺

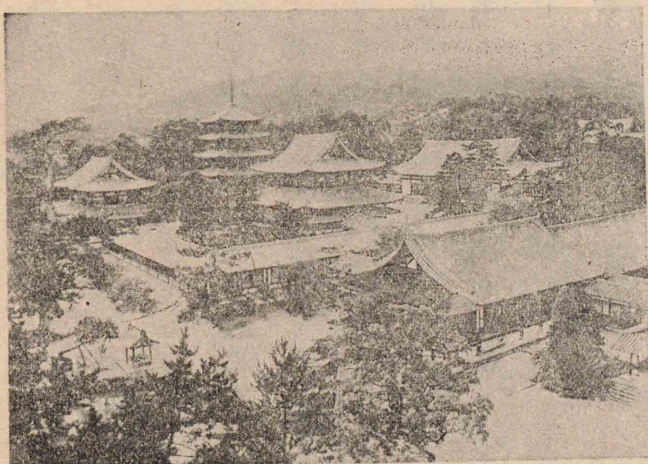
此の像は現在法隆寺金堂安置のもの、聖徳太子の御冥福のために、太子の御遺族が止利佛師をして作らせられた金銅佛である。その後背の銘によつて止利佛師の作であることが確實なものである。

美術・工藝 ⑧

冠位十二階



釋迦三尊佛



法隆寺

憲法

れ優れた人が用ひられるやうになり、やがて大化の改新に至る途が開けて来た。冠位には、大徳・小徳・大仁・小仁・大禮・小禮・大信・小信・大義・小義・大智・小智の十二があり、紫・青・赤・黄・白・黒の色の絶の冠で見分けられた。

② 十七條の憲法の中には「和を以て貴となす」「篤く三寶を敬へ」「詔を受けては必ず謹め」「各々掌る所をみだるな」等の箇條があつた。

③ 隋は間もなく亡び唐が起つたので我が國では舒明天皇の御代犬上御田鍬が使となつて支那に行つた。これが遣唐使の初めである。これより宇多天皇の御代廢止せられるまで遣唐使は前後十數回遣はされた。その航路は山東省に上陸する北路と南支那の寧波附近に上陸する南路の二があつた。

遣唐使

◎ 推古時代 かく佛寺を建て佛像をお造りになるにつれて美術・工



藝が著しく進み、佛工には有名な止利佛師(鞍作鳥)が出て、繪畫には高麗から僧曇徴が來り、その他畫工・寺工・瓦工などが渡來し、それぞれ技術はみな獎勵を受けて發達した。かくて推古天皇の御代には聖德太子

法隆寺金堂に安置する玉蟲厨子の扉繪で、蜜陀繪と言つて今日の油繪のごときものである。

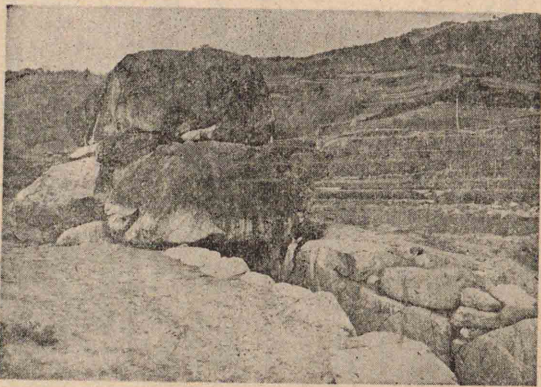
によつて佛教が盛んとなつたとともに、建築彫刻・繪畫・刺繡などの美術・工藝も大に興つたから、この時代を推古時代といふ。

◎ 革新の氣運

上古からの舊族、大伴氏や物部氏が衰へたとき、武内宿禰の子孫である蘇我氏は、馬子の時に勢が強くなつた。

馬子の子、蝦夷は、舒明天皇、皇極天皇の御代に權勢を擅にし、その子入鹿に至つては、惡逆甚だしく世の憤を被つた。

舒明天皇の御子、中大兄皇子は英邁にあらせられ、中臣鎌足と議り、つひに皇極天皇の四年、三韓から貢を進める日に、大極殿に於て入鹿を誅し給うた。ついで蝦夷もその家にあつて自殺した。かくて專横であつた豪族も滅び、政治の上に革新のときが來つゝあつた。



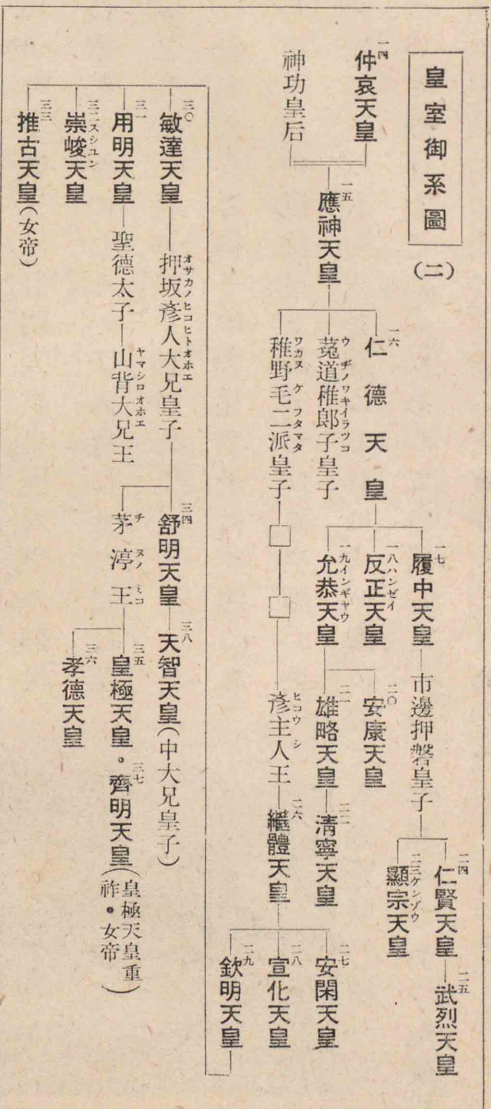
臺舞ノ石・庄ノ島

蘇我氏

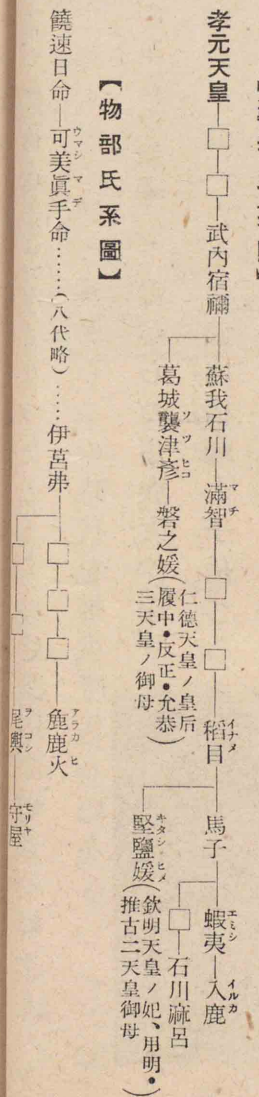
石ノ舞臺は奈良縣高市郡高市村宇島ノ庄にある。古墳の石室の露出せるものにして巨大なることより蘇我馬子の墓と傳へられてゐる。島は蘇我氏の居館のあつた所である。長約七十二尺

蘇我氏滅亡  
皇極天皇四年六月  
皇紀一三〇五年

皇室御系圖 (二)



【蘇我氏系圖】



【物部氏系圖】

大化元年(三二五) 延暦十三年(四四四)

第二篇 古代 第二期 大化改新と奈良時代 (大化改新より平安奠都まで)

第七章 政治上の革新

革新の必要

●大化改新の由来 聖德太子の政治革新の御理想は中大兄皇子がうけつぎ給ひ、やがて實現の時が到來した。皇子の蘇我氏討滅を機とし孝德天皇はこゝに政治上の大革新を企てられた。

改革の準備 大化元年六月 皇紀一三〇五年

天皇は即位せられると、大化の年號を建てられた。我が國年號の初めである。中大兄皇子は皇太子となられ、中臣鎌足は内臣に任ぜられ、さきに支那に留學して歸朝した高向玄理、僧旻を國博士として、改革の議に參與せしめられ、かくて都を難波(天阪市)に營まれ、大化二年正月には改新の大詔が發せられた。

公地・公民の制 班田收授の法

●新政の精神 従來皇族以下諸豪族が私有してゐた土地、人民を悉く朝廷に收めて公地・公民となし、戸籍を作り、班田收授の法を立

口分田  
税法③  
官制④  
中央  
地方

驛傳の制⑤

中央集権成る

租・庸・調

齊明天皇  
皇極天皇が再び  
御位に即かれ  
た。皇太子中大  
兄皇子の御母

て、人民に一定の口分田を班ち授け、死すればこれを官に收め、<sup>③</sup>税法を定めて租・庸・調の三種とし、<sup>④</sup>又官制を改め、朝廷には内臣、左右大臣以下の百官を置き、地方には國造、縣主などを廢して、新に國、郡、里の區分を定め、國司、郡司を置き、何れも從來の世襲の風を改め、家柄によらず個人の才能によつて官位を授けることとした。<sup>⑤</sup>又地方と都との交通の便をはかり、驛傳の制を設けられた。これ等の新制度は支那の制度を採用したのもあるが、これによつて舊來の弊風を除き、中央集権の組織が確立した。世にこれを大化の新政といふ。

班田收授の法とは、男女六歳になれば田を班ち授け、男には二段、女にはその三分の二、死すればこれを官に收めるの意である。租とは田租の意味で、田一段につき稻二束二把を納めること、調は家に課したもので、布帛、魚鹽等、他の土産を上り、庸とは人に對する課役で、男子が一定の日數公役に服すること、また事情によつては、布などでこれに代へることも出來た。

③ 革新の進展(一) 孝徳天皇は御在位久しからずして崩じ給ひ、齊明

阿倍比羅夫

渡島の蝦夷

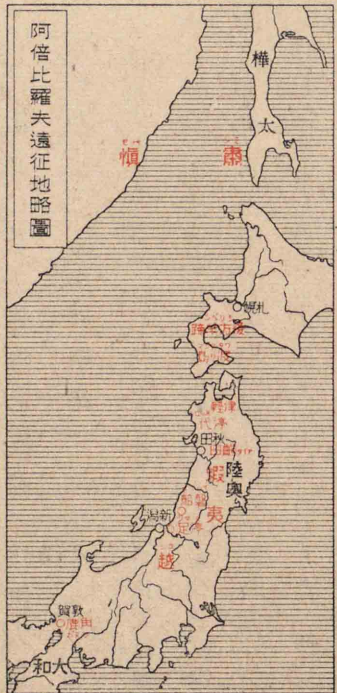
肅慎

新羅

征西軍

天皇がお立ちになり、中大兄皇子は皇太子としてとどまられ、大いに政をお輔けになつて、外に向つても新政の方針をお立てになつた。

即ち東北では、阿倍比羅夫をして蝦夷を平げしめ、秋田、津輕地方から進んで渡島の蝦夷を従へ、更に遠く肅慎をも伐つて皇威を伸張せしめ給ひ、西南では新羅とこれを援ける唐との壓迫に苦しんでゐた百濟を救はんと、齊



明天皇は皇太子と共に筑紫まで旆をお進めになつた。後天皇は行宮(朝倉)に崩ぜられ、百濟も亦滅んだから、皇太子は兵を戡め、後内治につとめ給ひ、唐の文化に對應して、我が國家の興隆に力を盡された。

④ 革新の進展(二) 孝徳天皇齊明天皇の改新政治をお輔けになつた

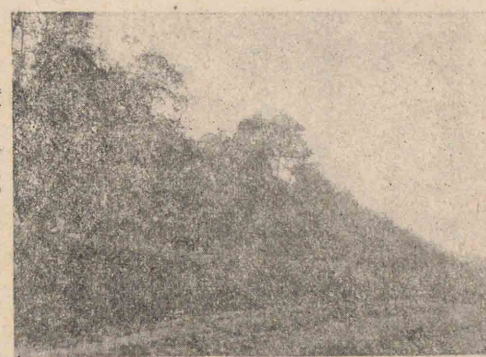
大津宮 ①  
天智天皇  
冠位 ②  
近江令 ④  
戸籍 ④

漏刻 ⑤  
\*漏刻は水を盛り  
その漏ることに  
よつて時を測る  
器。

天智天皇はまた  
國防を嚴にせら  
れ、筑紫に大堤  
を築いて水を貯  
へ名を水城と符  
せられた。今こ  
の水城の址が國  
のごとく福岡縣  
太宰府の附近に  
のこつてゐる。

皇太子中大兄皇子は、筑紫から歸つて、<sup>三十八代</sup>新に都を近江に奠められ、こ  
こで即位せられた。これ即ち天智天皇にして、都を大津宮又は滋賀  
都といふ。天皇は大化以來の新政を整へるために、<sup>三十九代</sup>冠位を制し、<sup>四十代</sup>諸般の法令を定められた。世に近江令とい

ふ。また<sup>四十代</sup>戸籍を改め、<sup>四十一代</sup>漏刻を置くことな  
ど、大いに改新の實を挙げられた。後世天皇  
を中興の英主とあがめ奉る。



水城の圖

中臣鎌足は、天智天皇の時その功により、最高の位、大織冠  
を賜はつた。天皇を輔けまつり、終始革新の政治と法令  
制度の撰修とに參與したその功勞は、甚だ大なるもので  
あつて、藤原の姓を賜はり、一族繁榮の基をなした。鎌足  
の家は京都の山科にあり、こゝに<sup>四十二代</sup>山階寺を建立してゐたが、これは後に大和の<sup>四十三代</sup>厩坂に移  
され、厩坂寺と呼ばれ、後更に奈良に移されて興福寺と稱せられ、藤原氏の氏寺となつた。  
奈良縣多武峯にある<sup>四十四代</sup>談山神社は、鎌足を祀つてある。

大寶律令  
大寶元年  
皇紀一三六一年

官制  
二官  
八省  
地方  
國司  
郡司  
官位  
兵制  
學制

律令の制定 天智天皇の御代の近江令は、後<sup>四十二代</sup>文武天皇の御代に改  
定せられ、新たに律をも定められた。次いで<sup>四十三代</sup>文武天皇の御時、更に補  
修せしめられ、これらは大寶元年に完成した。世にこれを大寶律令  
といふ。

この律令といふのは、律には刑罰を定め、令には官制を主として定  
めたものである。令の定めによれば、中央政府には神祇官と太政官  
との二つがあり、神祇官は祭祀を掌り、太政官には太政大臣、左大臣、右  
大臣等があつて、國務を統べ、其下に八省（<sup>中務・式部・治部・民部</sup>兵部・刑部・大藏・宮内）があつて政  
務を分ち掌つた。

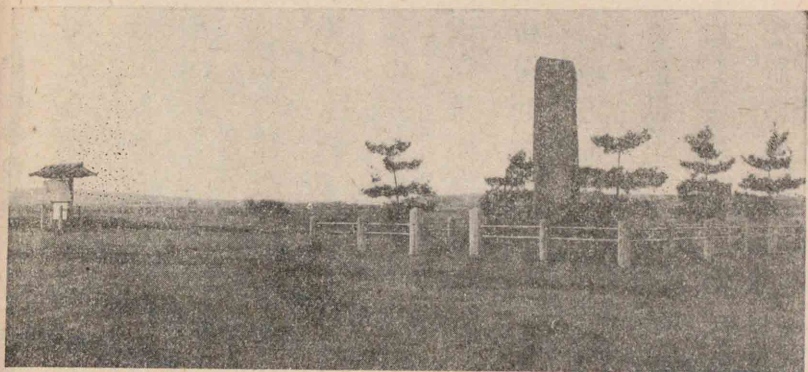
地方には國司、郡司を置き、特に九州には、太宰府を置いて、この地方  
の國防、外交、内治を掌らせた。また臣下には官位を授けて、尊卑を明  
にし、一般の壯丁から兵士を徴し、都には衛府を、地方には軍團や防人  
を置いて警備せしめ、都に大學、諸國に國學を設けて官吏を養成した。

奈良奠都以前の帝都

奠都の理由

奈良縣生駒郡にある。大内裏のあつたところは、大極殿を始め、その他の建物の遺址も大かた認められる。

平城奠都  
和銅三年  
皇紀一三七〇年



平城京址

律によれば答杖徒(懲役)・流死(斬絞)の五種の刑があり、皇室神祇に關する罪は特に重くせられた。

### 第八章 奈良奠都

●平城奠都 上古は皇居も簡素にましましたが、大化改新のときから政治の組織も複雑となり、さきには難波や大津などに都城が營まれたが、更に壮大な帝都が必要となつて、元明天皇は大和の北部、平野の中央に地をさだめて壯麗な都を造られ和銅三年ここにうつられた。これを平城京といふ。

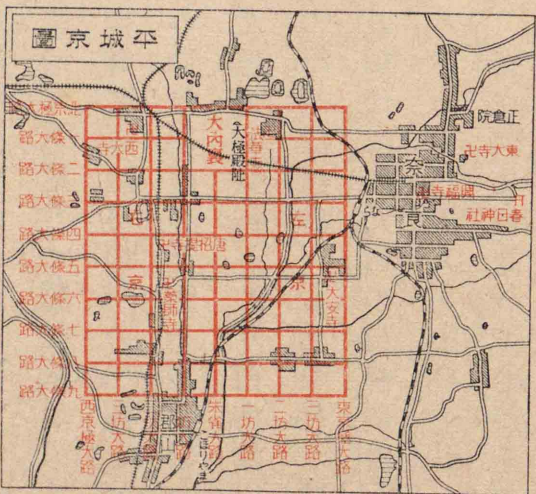
●御七代七十年の帝都 平城京は、それまでの帝都が年數の短かつたのと異つて元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・稱徳・光仁の、御七代凡そ七十年の間帝都としてつゞいた。これを奈良時代といふ。

平城京は東西約四十町、南北約四十五町あり、北部中央に大内裏宮城を設け、それより南へ朱雀大路を通じ、これによつて左右兩京を分ち、兩京各々東西に四坊を置き、南北には九條を分つて、碁盤の目のやうに正しい町なみをなしてゐた。この内には宮殿貴族の邸宅大寺院が並び立ち、さく花の如くに麗はしい都であつた。

あをによし寧樂の都は咲く花の、  
にほふがごとく今さかりなり

小野老萬葉集

聖武天皇の御代には、一時恭仁宮難波宮に移られたが、なからずして、もとの平城の京に歸られた。恭仁宮は京都府相樂郡瓶原村に遺跡がある。



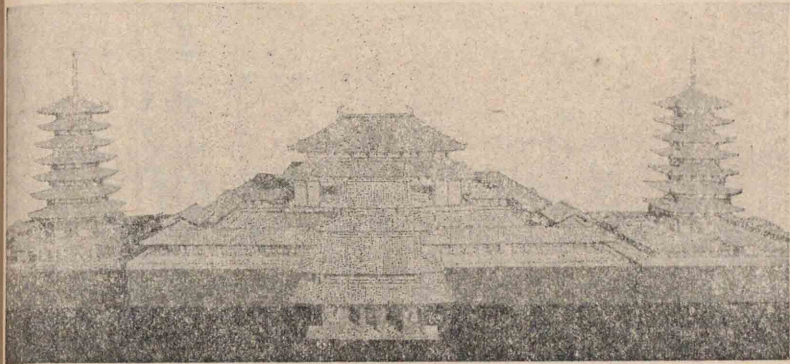
奈良時代  
平城京

帝都繁榮<sup>①</sup>  
地方拓開<sup>②</sup>  
東北の拓殖

西南諸島服屬

創立當時の東大寺の復原模型で南大門・中門・金堂が一直線に並び、左右の七重塔は廻廊の外に出てゐる。

大伴旅人  
國史・地誌<sup>③</sup>  
聖武天皇



東大寺理想像圖

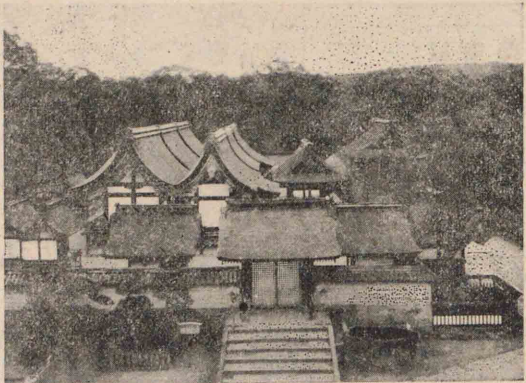
●奈良時代の事歴概要 この七十餘年の間には重要な事蹟もまた多くあつた。中央では帝都が年を逐うて榮え、地方では元明天皇の御代に、陸奥・出羽の二國を分け、元正天皇の御代には、陸奥國の多賀城を築くなど、東北地方の開拓が進み、西南地方は、元明天皇の時琉球諸島にまで皇化が及び、元正天皇の御代には九州の南部に居た倭人を治めるため大伴旅人を遣はされたことがある。又國史・地誌の撰修があつて日本の自覺が進み、聖武天皇の御代には佛教が隆盛となり、また天平十三年には諸國に國分寺が建てられ、ついで東大寺の

大佛造立<sup>④</sup>  
光明皇后  
慈善事業<sup>⑤</sup>

東大寺大佛

宇佐神宮は應神天皇・比賣神・神功皇后を祀り、三殿あり。古來皇室の御崇敬殊にあつて、和氣清麻呂は勅を奉じてこの神に神勅を乞ひ奉つた。大分縣宇佐郡宇佐町にある。圖は勅使門並びに神殿。

和氣清麻呂<sup>⑥</sup>



宇佐神宮

大佛が造立せられた。華麗な美術工藝もこの御代になつて大に興つた。光明皇后は佛教を信じ給ひ、慈悲の御心深く、貧しい老人・孤兒のため宿舎を造り、病人のためには病院を立て、藥を施させられた。

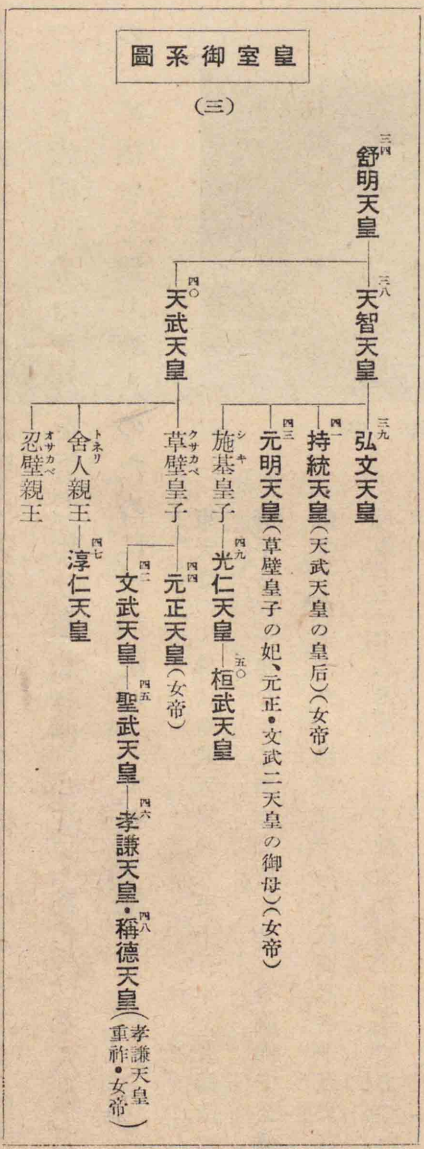
東大寺の大佛は聖武天皇の天平十五年より鑄造に着手され、十年を経て漸く完成した。金銅佛で全部鍍金してあつた。佛殿は十一間四面、高さ十五丈六尺四七二七二米に達する壯大な木造建築であつた。その後二回火災にかゝり、現在のものは寶永五年に落成したもので規模は創建の時より著しく縮小されてゐるが、なほ世界最大の木造建築である。

●稱徳天皇の御代には、僧道鏡が太政大臣・禪師となつて、天位を窺はんとしたのを、和氣清麻呂が宇佐八幡の神教を請けて、これを除いた。この時、清麻呂

廣蟲  
光仁天皇  
政治革新<sup>⑦</sup>

呂の姉廣蟲(法均尼)も心をあはせて、道鏡を斥けた。かくて佛教の弊害など生じたとき、<sup>④</sup>光仁天皇が立ち給うて積れる悪弊を除いて政治の革新を圖られた。

八幡神教「我が國開闢よりこのかた、君臣定まりぬ。臣を以て君となすこと未だこれあらざるなり。天つ日嗣は必ず皇儲を立てよ。無道の人宜しく早く掃除すべし」(續日本紀)



### 第九章 奈良時代の文化

●文化の概観 この時代を通じて観れば、<sup>①</sup>まづ國家としての諸種の施設が整ひ來り、經濟などの<sup>②</sup>實力も充ち、<sup>③</sup>我が國についての自覺も進み、<sup>④</sup>唐の文物をとり入れては、我が國によく調和せしめ、これを醇化せしめるやうになり、<sup>⑤</sup>文學藝術の上にも力強い精神が盛られて、文化はこゝに著しく進んで來た。

●國家生活の充實 元明天皇の御代に勅を奉じて、太安麻呂は稗田阿禮が暗誦してゐた傳へによつて古事記をつくり、元正天皇の御代には、舍人親王と太安麻呂が勅を奉じて日本書紀を撰んだ。また元明天皇の御時勅して、國毎に地勢・産物・古傳などを書き記し、上らしめられた。これを風土記といふ。

元明天皇の御代には和銅開珎といふ錢が鑄造せられた。これよ

國史地誌の撰修  
古事記  
日本書紀  
風土記  
經濟の發達

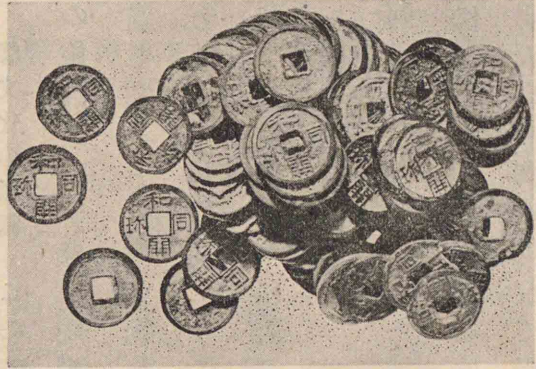


り貨幣が行はれるやうになつた。また聖武天皇の御代には、諸方  
土地の開墾がすゝんだ。その上この御代には東大寺の建立ととも  
に、諸國に國分寺が建てられたのでこれに  
よつて文化が地方にもひろがるやうにな  
つた。

**和銅開珎**  
和銅開珎の鑄造の遺蹟には山城の錢司(京都府相樂郡・長門の長府(山口縣長府)等がある。これは近頃京都府の錢司から發掘せられたものである。

地方の開發

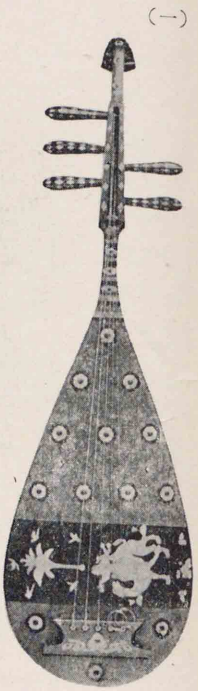
新宗派  
鑑眞  
行基



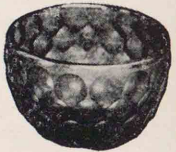
和銅開珎

かやうにして歴史や地誌によつて日本のことがわかり、經濟の方面も進み、地方も開けて、國家の實力が充ちてきた。

◎ **佛教と藝術** 佛教は奈良時代になつて、また新しい宗派が傳來し、唐僧鑑眞や行基などの名僧が出た。行基のときは、國國を巡り、民の間に布教し、諸種の慈善事業を興したので、信仰もしいに上下に行きわたるやうになつた。



(一)



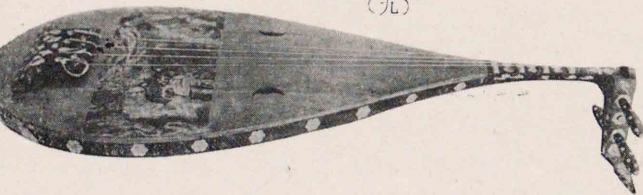
(二)



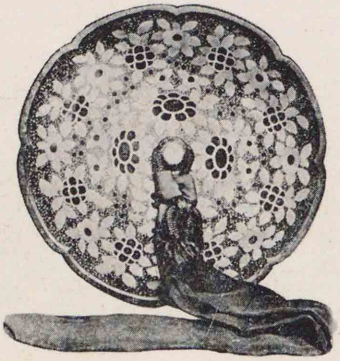
(三)



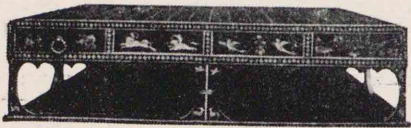
(四)



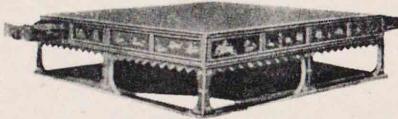
(九)



(五)



(七)



(八)



(六)

正倉院御物

- (一) 螺鈿紫檀五絃琵琶 (長三尺五寸八分、横徑一尺)
- (二) 白琉璃碗 (徑四寸、高二寸七分)
- (三) 紺琉璃盃 (口徑二寸八分五厘、高三寸七分)
- (四) 白琉璃瓶 (胴徑四寸六分、高九寸)
- (五) 八角鏡 (徑一尺)
- (六) 漆胡瓶 (受三升半)
- (七) 木畫紫檀基局 (方一尺六寸二分、高四寸一分)
- (八) 右全形
- (九) 楓蘇芳染螺鈿琵琶 (長三尺二寸一分、横徑一尺三寸四分)

天平時代

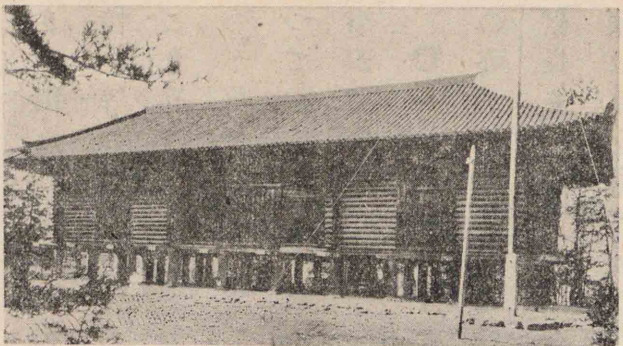
東大寺大佛殿の西北にある。南、中、北の三棟になつてゐる。北倉と南倉とは三稜の木材を横に積み重ねた所謂校倉式の建物である。

漢文學  
阿倍仲麻呂  
吉備眞備

石上宅嗣

和歌

聖武天皇の御代のころは、佛教が隆盛になり、寺院が多く建てられ、建築彫刻繪畫工藝が著しく進歩した。この時代を天平時代といふ。



正倉院

奈良にある正倉院は、主として聖武天皇の御遺物を納め申した御庫で、今もこゝには織物繪畫刺繡漆器鑄物硝子器屏風陶器武器の類凡そ三千餘點が、當時のままに保存せられ、天平時代の文化を目のあたり窺ひ得られる。

④學問文學 學問では唐に留學した阿倍仲麻呂・吉備眞備など名高く、仲麻呂はかの地で歿し、眞備は歸つて後學問を以て仕へ、右大臣にまで進んだ。また石上宅嗣は書籍を集めて芸亭と稱する圖書館のごときものを設け、學問をすすめた。和歌もまた

東大寺法華堂に安置する佛像にして、美しい彩色を施した痕跡が残つてゐる。衣服には天平時代貴族の服装を思はしめるものがある。

萬葉集

右衽  
元正天皇  
左衽の禁

漢字を用ひて國語を記す法が工夫され、ますます盛んとなつた。さきに出た柿本人麻呂について、この時代には山部赤人、大伴家持、山上憶良等の歌人があらはれた。これ等の人々の歌を集めたものが萬葉集であつて、これによつて當時の人情風俗をも知る事ができる。

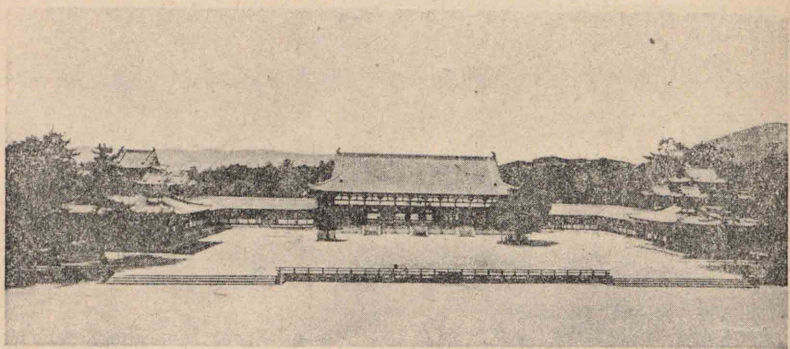


像薩善光月

⑤風俗 太平の御代がつゞき、都大路には、春は櫻かざす大宮人の姿が見られ、衣服には絹が用ひられるやうになつた。形は袖長く裾長く、衿は古くは左衽であつたのが、この頃からは右衽となつた。家は瓦を葺き、檣柱を赤く塗つた貴人の家が都では多く見られた。また民間には季節毎の祭禮年の始の祝、盂蘭盆會踏歌などが行はれてゐた。

延暦五年(四四七)  
治承四年(一一三二)

京都市岡崎公園北に在り、明治二十八年平安奠都千百年祭に際し創建された官幣大社で桓武天皇を祀る。社殿は丹柱碧瓦も美しく、棟の兩端に燦然たる金色の鸕尾舞ゆ。歩廊左右に延びて其端に蒼龍(東)白虎(西)の高樓が雙翼をなしてゐる。昭和十五年さらに孝明天皇を同神宮に合せ祀られた。



第十章 平安奠都と政治の更新

第三篇 古代

第三期 平安時代 (平安奠都より頼朝幕府設立まで)

第十章 平安奠都と政治の更新

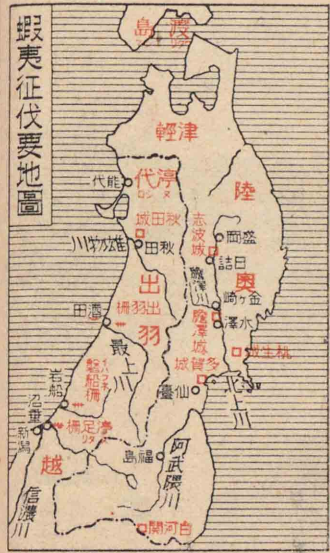
平安神宮  
●平安奠都 桓武天皇は政治の更新をはかり給ひ、山河襟帯して交通の便ある今の京都の地に都を奠め、延暦十三年にお遷りになつた。これを平安京といひ、これから凡そ四百年を平安時代といふ。

新都の地は當時山背國葛野郡であつたが、延暦十三年の詔に「此の國山河襟帯して自然に城を作す。斯の形勝に因り新號を制す可し。宜しく山背の國を改めて山城の國と爲すべし」とあつたので國の名は山城と

改められた。この都の地をさだめ給うたのは和氣清麻呂の上奏によるといふ。

平安京は平城京より規模大きく、東西四十二町、南北四十九町。北に大内裏があり、大極殿、應天門その他諸官衙並び建ち、中央には幅二十八丈の朱雀大路が南北に通じ、市街を左京右京に分ち、この大路の兩側には柳と櫻を交へ植ゑた。京都の平安神宮の社殿と門は、平安京の大極殿、應天門を模してその規模の二分の一を以て造られたものである。

●東北地方經營の更新 天皇はまた坂上田村麻呂を征夷大將軍に登用し、これまで屢叛いた蝦夷を討伐せしめられた。田村麻呂は陸奥に膽澤城・志波城を築いてその地方を服し、これより東北地方の經營は一時期を劃するに至つた。



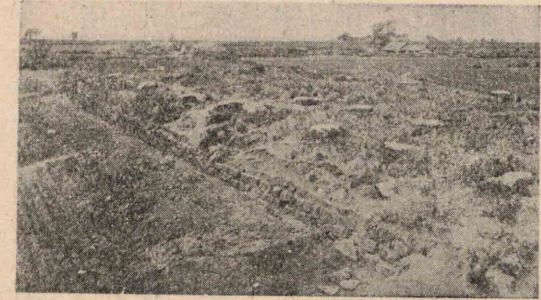
奈良時代には多賀城・秋田城が築かれたが、田村麻呂の功によつて邊境が靜かになり、ついで嵯峨天皇の御代、文室綿麻呂は膽澤城に鎮守府を置いて警備にあつた。

東北經營の更新

膽澤城  
志波城

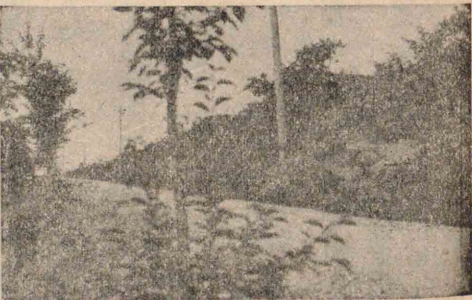
文室綿麻呂

●渤海との新關係 現今の滿洲國の東部一帯の地に起つた渤海國は、さきに我が國に入朝したが、桓武天皇の御代に及んで新に入貢の期を定められ、鴻臚館に於て交易の事を行ひ、我が國の文物をも採り入れるやうになつた。



渤海東都址

渤海國は聖武天皇の御代に初めて朝貢し、醍醐天皇の御代にその國が滅亡するまで彼我の交際はずづいた。鴻臚館は京都の内にあつて來朝使臣を接待した所である。我が文人は渤海の使臣等と會して詩文の贈答をするのが例で屢、その詩文は彼の使臣の驚嘆する所となつた。



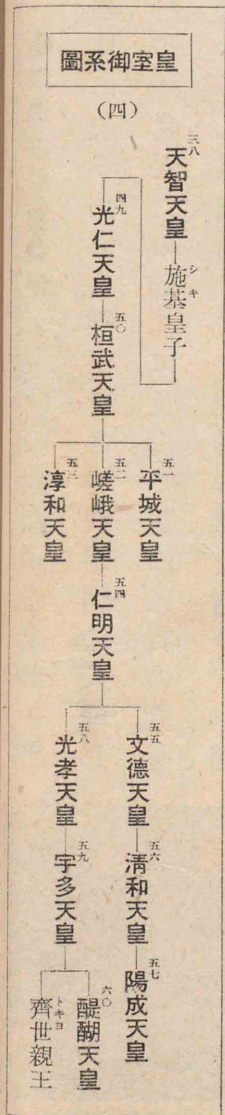
秋田城址並びに出土瓦



●鴻臚館 現今滿洲國吉林省寧安縣東京城にあつて、この圖は正殿の址である。近年我が國古代貨幣和銅開珎が、王宮の一部より發掘せられた。

勘解由使  
藏人所  
檢非違使  
令外の官

④内政の刷新 桓武天皇は内政の上には道路を修理せしめられ、關所を減廢し、交通の便をはかれ、地方の民政にも御心を用ひられ、新に勘解由使といふ役を置いて、地方に於ける國司の治績を監督せしめ給うた。この後、嵯峨天皇の御代になつて、宮中に藏人所を置き、機密の文書を掌らしめ、京都に檢非違使を置いて警察の事務に任じ給うたことがある。これ等新設の官はすべて令外の官と稱し、大寶令の定むる職制以外のものであつた。これらはすべて國內政治刷新のための御はからひであつて、宗教・學問等も亦この時代に興隆するに至つた。



### 第十一章 延喜天曆の治

冬嗣  
良房  
太政大臣  
攝政  
基經  
關白

●藤原氏の繁榮 藤原鎌足以來しだいに政治の上に重きをなしてきた藤原氏は、冬嗣が嵯峨天皇の御代に、藏人頭になり、後、左大臣に進み、その女は文德天皇を生み奉り、子良房は、文德天皇の時太政大臣に任ぜられた。人臣にして太政大臣に任ぜられたのは、これが始めてである。また良房は清和天皇の御代には攝政となり、良房の養子基經は宇多天皇がお立ちになつてから關白となつて政治にあづかり、人臣として最高のところにまで至つた。

●宇多天皇の改新政治 宇多天皇は藤原氏の擅權を抑へようとせられ、基經が薨じた後には關白を置かれず、儒家の出である菅原道眞をお用ひになつて政治の改新を行ひ給ふ御心があつた。ついで御位を醍醐天皇に譲り給ふたが、醍醐天皇も御年若くおはしましても

菅原道眞

時平

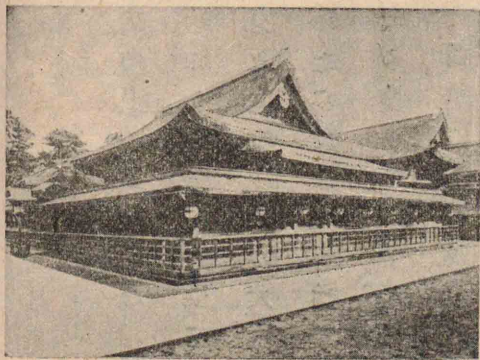
第三篇 古代 第三期 平安時代

亦攝政を置き給はず、基經の子、時平を左大臣とし、道眞を右大臣とせられた。しかるに道眞の聲望がしだいに高くなるにつけて、これを妬んで讒言するものがあつたため、道眞は太宰權帥に貶され、居ること三年で、その地に薨じた。

菅原氏は野見宿禰の後裔で、古くは土師氏を稱してゐたが、桓武天皇の頃から世にあらはれ、父是善に至つて儒學を以て、仁明文徳清和の三朝に仕へ、その門に多くの人材を出した。道眞は早くから詩文を好くし、菅家文章菅家後集類聚國史等の著がある。長くつゞいてゐた遣唐使を廢することを宇多天皇に上奏したのも道眞であつた。京都の北野神社を初めとして諸國の天満宮には道眞を祀つてある。

延喜天曆の御代 醍醐天皇は政治に勵み給ひ、人民の上に御心を注がせられ、御在

北野神社は村上天皇の天曆年中に祀られた。京都市上京區にあり、もとその地を北野といふた。現今の社殿は慶長年間豊臣秀頼の再建にかかるといふ。本殿で、八棟造といふ。



北野神社



菅公の詠居の圖

延喜の治

延喜式

天曆の治

藤原道長

法成寺  
御堂關白

これは京都北野神社に藏する、北野天神縁起と稱する菅公傳記の繪卷物の一部で、菅公が太宰府で恩賜の御衣を捧持して、去年の今夜清涼殿に侍したことを偲ぶところである。しのぶの生へた古い軒端・葛などのまつはる黒木の門など昔にかはる住居の佗しさを示してゐる。圖は、鎌倉時代の初めに藤原信實の畫くところと傳へられてゐる。



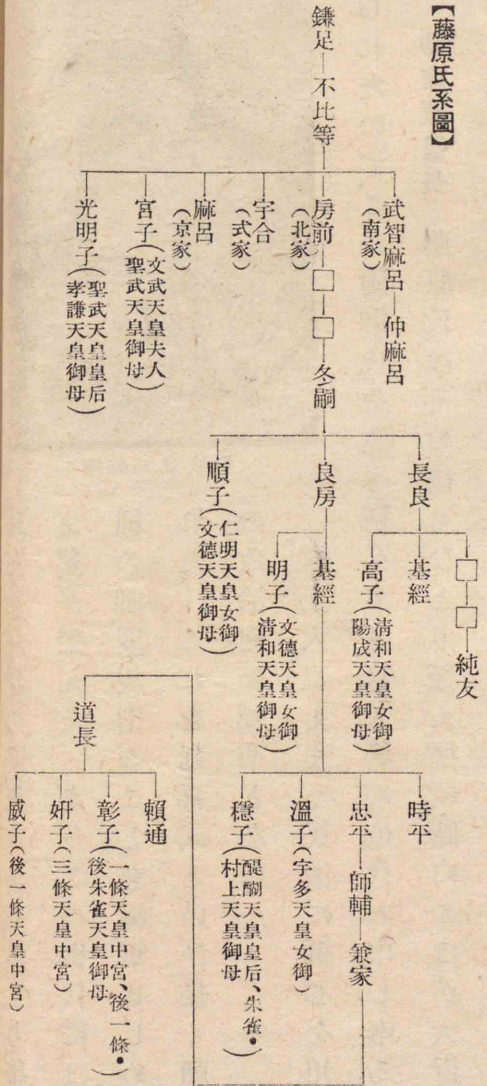
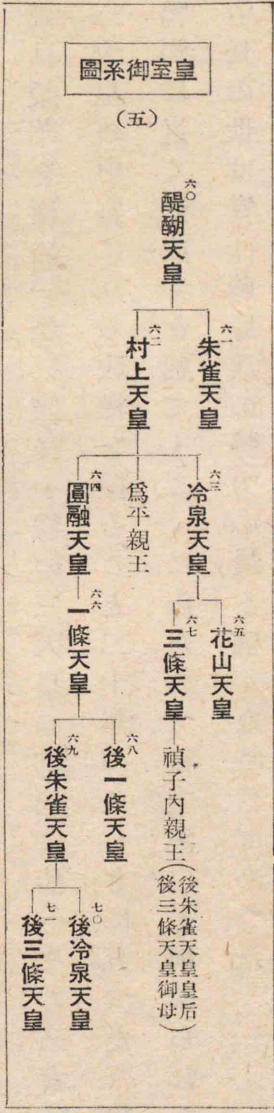
醍醐天皇宸影

位三十三年の間、天下よく治まり、學問、文藝が榮えた。またこの御代には諸種の制度、規則のことを編纂せしめられた。これを延喜式といひ、長く朝廷の政治向の標準となつた。

六十二代村上天皇もまた民治に御心を用ひ

られたので、この兩御代を並べ稱へて延喜天曆の聖代と申し奉る。

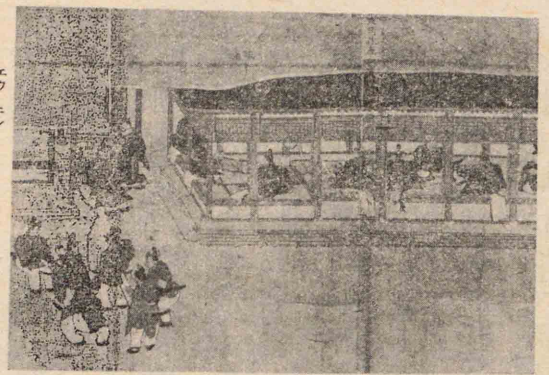
④藤原道長 藤原氏はその後もひとり榮え、攝政關白のほか大臣、大將も藤原氏でないものはない、ないさまであつた。そのうちにも藤原道長は榮華を極め、一條三條後一條の三天皇の御代に仕へ、その三女は三天皇の中宮に立ち、政權を握ること二十年の久しきに亘つた。後、鴨川に近く法成寺（フツシヤウジ）を建て、こゝにゐたので、御堂關白（ミドウクワンパク）と稱せられた。道長の世は實に藤原氏の勢力の最も盛んな時代であつた。



第十二章 京都の貴族と地方武士

● 京都の繁榮と貴族の生活 京都の地は花の都と榮えて、藤原氏が權勢を専らにした時代には壯麗な邸宅や別業がその内外に營まれ、貴族等は詩歌管絃の遊に日を送つてゐた。

【圖説】 官人等が近衛の陣の座に着座してゐる様を寫す。



貴族の生活

● 地方政治と武士の起源 地方でもまたいつのほどにか大化改新の制度が破れ、國司は私の利益をのみはかり、民には重税を課してかへりみないものがあり、そのうちに

は遷任といつて任地に赴かぬものさへあつた。それゆゑ班田收授

【註】 國司遷任 國司が赴任せずして京都に住し、たゞその利のみを得るものを遷任といふ。

第十二章 京都の貴族と地方の武士



莊園

武士の起源

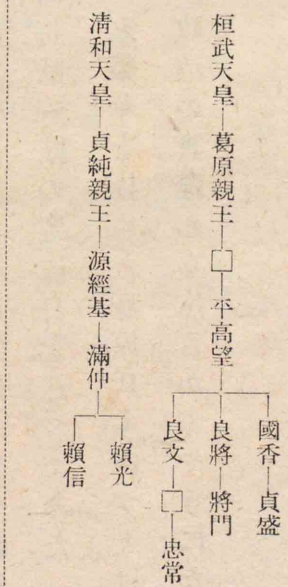
平氏

源氏

平將門

の法のごときは行はれなくなり、私有地である莊園がいたるところに出来て、人民は土地を離れて流浪するものが多く、群盗も横行するやうになつた。この間に貴族の子弟等は地方に土著し、家子や郎黨などを養つて弓馬の術を練つた。これ武士の起源である。地方豪族のうちには桓武天皇の御曾孫高望王は平の姓を賜はり、清和天皇の御孫經基王は源の姓を賜はつて武人として世にあらはれることとなつた。

【源平二氏系圖】



● 將門純友の亂 平高望の孫に將門があつて、朱雀天皇の承平天慶の頃下總の猿島に據つて亂を起した。また同じころ藤原冬嗣の曾

藤原純友

平貞盛

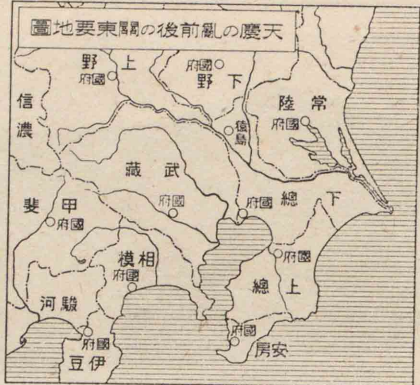
源經基

寛仁三年  
皇紀一六七九年

刀伊の賊

藤原隆家

菊池氏  
龍造寺氏



孫の純友は、伊豫に據つて海賊を率ゐて内海地方を荒しまはつた。朝廷は藤原忠文をして將門を伐たしめたがそのまへに平貞盛・藤原秀郷が將門を討ち、また源經基は純友を討伐した。かくて武人たちの勢力がしだいに強くなつてきた。

● 刀伊の來寇

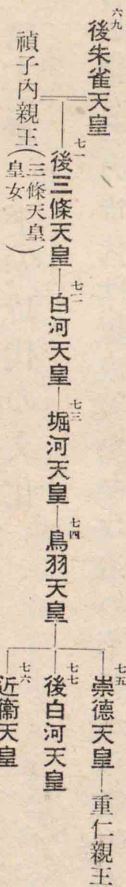
後一條天皇

の寛仁三年、朝鮮

の北邊にゐた刀伊の賊が對馬、壹岐を侵し更に筑前に迫つた。攝政藤原道隆の子隆家は太宰權帥として九州にあつたがよく防いでこれを撃退した。隆家の子孫はまた西邊に留まつて、後世の菊池氏・龍造寺氏となつた。

圖系御室皇

(六)



### 第十三章 平安時代の文化

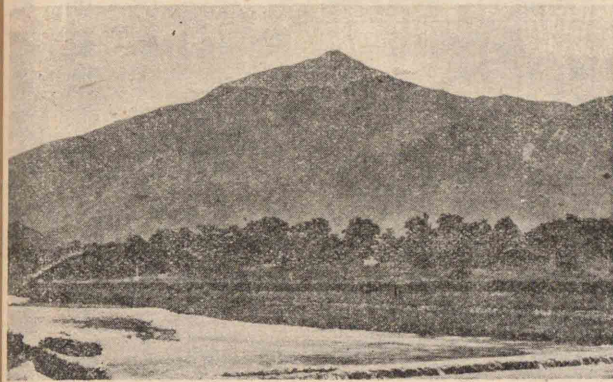
平安時代初期特色 ①

弘仁時代

平安時代中期の特色 ②

京都方面から望んだ比叡山

藤原時代の特色 ③



比叡山

●文化の概観 この時代は桓武天皇の政治の革新から嵯峨天皇の頃に至り文運が盛んで、その後は華麗優美の風がすゝみ、殊に大陸の文物を醇化し、日本風の文化が榮えた。

●政治 ①大寶令にない官職が新に設けられて、制度もしだいに政治の實際に適するやうになつたが、また ②宇多天皇の時、菅原道眞の上奏によつて遣唐使が廢せられてからは、いよゝゝ我が國の氣風に合ふ文化が發達した。 ③藤原氏の勢が盛んな時代には、優美をよろこぶ風

藤原時代

潮と共に政治にも弛みが生じた。この時代を藤原時代といふ。

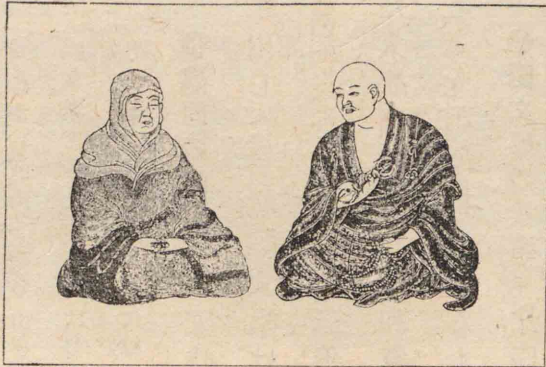
●經濟 經濟生活の方面も、土地の開墾が進み、莊園が増加し、神社寺院・貴族等が多く、土地を私有するに至り、また錢の鑄造も奈良時代からひきつゞいて、村上天皇の御代まで行はれて、商工業の發達をたすけてゐた。

●宗教 奈良時代の末には佛教興隆にとともにふ弊害も多かつたが、平安時代の初に、最澄・空海が出て信仰の革新をはかつた。最澄は比叡山に延暦寺を創め、勅を奉じて入唐し、我が國に天台宗を傳へた。空

平安時代初期新佛教

最澄  
空海  
延暦寺  
天台宗

眞言宗  
金剛峯寺



空海と最澄

海も最澄と共に入唐し、眞言宗を傳へて我が國に弘め、嵯峨天皇の御代には紀伊國高野山に金剛峯寺を開き、後更に天皇から京都の東寺

東寺

第三篇 古代 第三期 平安時代

五

を賜はつた。この二宗派は共に鎮護國家を旨とし社會の救濟事業にも力を致した。

これから叡山と高野山とは、教界に多くの人材を出し二宗とも大いに弘まつた。社會的事業としては、最澄は美濃信濃の山中に旅宿を造り空海は讃岐に萬農池を修め、また庶民教育のため京都に綜藝種智院を建てたことなどがある。

平安時代初期  
嵯峨天皇

弘文院  
勸學院  
學館院

假名

平安時代中期

古今集

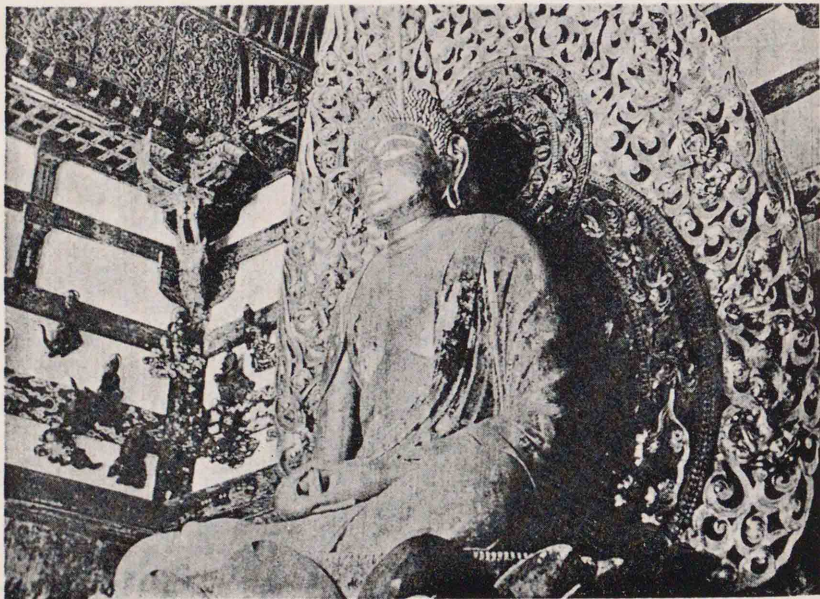
紀貫之、凡河内  
躬恒等が勅を奉

⑤ 學問の隆盛 平安時代の初期は學問が大いに重んぜられ、學者も輩出した。嵯峨天皇は詩文書道に秀でさせられた。學者には小野篁・都良香・菅原道眞・三善清行などがあり、學校も官によつて立てられた大學・國學の外に、和氣氏の弘文院・藤原氏の勸學院・橘氏の學館院など、私立の學校の起るものが多かつた。

⑥ 國文學の發達 片假名平假名を用ひることが行はれて國文學が著しく發達し、平安時代の中頃には漢文學にかはつて、隆盛となつた。醍醐天皇は勅して古今和歌集を撰ばしめられた。勅撰の和歌集の



鳳凰堂全景



鳳凰堂本尊阿彌陀來坐像

鳳凰堂は京都府久世郡宇治（京都市の南方）の平等院の境内にある。中央の堂の棟の上に銅製の鳳凰があるから鳳凰堂と呼ばれるともいひ、また堂の建築が左右に翼をひろげ、後に尾を引くやうな形をしてゐることが鳳凰の飛翔する姿に似てゐるからかく名づけられたともいふ。宇治川の清流を前にして風光明媚で、藤原道長の別業であつたのをその子頼通が後冷泉天皇の永承七年（皇紀一七二二年）に寺を起し、翌天喜元年阿彌陀堂を建立して中尊に丈六の阿彌陀如來の像を安置した。像は佛師定朝の作である。堂内、四周には、宅磨爲成の筆と謂はれる浄土の圖等があり、その上の壁には、天人が雲にのり供養する像を懸けてある。

じて撰者となつた。

土佐日記

源氏物語

枕草子

平安時代中期

巨勢金岡

宅磨爲成

定朝

平等院

平安時代初期

三筆

平安時代中期

三蹟

はじめである。紀貫之の土佐日記、紫式部の源氏物語、清少納言の枕草子はこの時代の文學として有名である。また宮女のうちにはこの外文才あるもの多く、和泉式部、赤染衛門などがあつた。

⑦美術工藝 繪畫には、延喜の頃、巨勢金岡が出て巨勢派を起し、後には宅磨爲成がはじめた宅磨派があつて、畫風がしだいに日本の趣味にあふやうになつた。彫刻には、定朝が出てからは優麗な作風がこの時代を支配するやうになつた。建築には、宇治の平等院の鳳凰堂に見られるやうな優美なものが發達し、工藝には、蒔繪、螺鈿などの技術が進み、意匠にも一たいに纖麗の趣が多かつた。

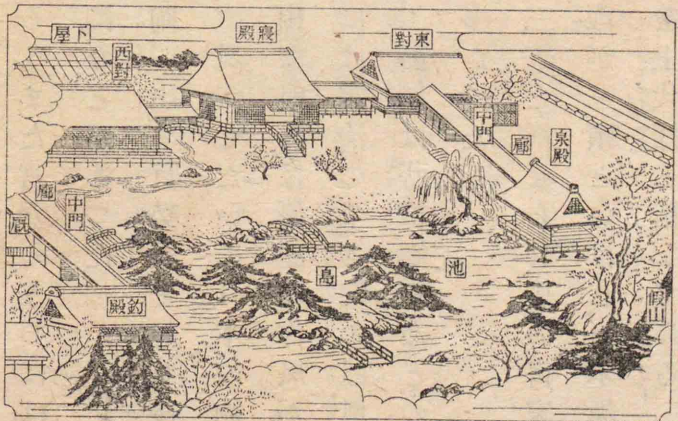
書道では初め嵯峨天皇、空海、橘逸勢が三筆と稱せられ、唐の書家にも勝り、後には小野道風、藤原行成、藤原佐理が三蹟といはれ、日本趣味の多い書風となつた。この優美な書風を上代様と稱してゐる。

⑧風俗 風俗にあつても平安時代の初期から中期にかけては、

漸次優美華麗となり、衣服には貴族男子の束帶直衣スベタイナホシや女子の十二單ヒトエの如き美麗なものが發達し、住居も寢殿造があり、庭園には水を引き、草木、花卉を植ゑる前栽ゼンザイなどが喜ばれた。

### 第十四章 院政の創始

●後三條天皇の政治 久しい間外戚である藤原氏が權勢を振つてゐたが、英明剛毅にましました後三條天皇七十二代が位につき給ふに及んで、親しく政治を聞きしめされ、いたく攝關家の權を抑へられた。また、新に莊園を置くことを禁じてその弊害を除き、記録所を設けてこれを調査せしめ、不正



寢殿造

記録所②

御親政①

後三條天皇即位

質素④

重任の禁③

院政の御遺旨⑤

白河天皇

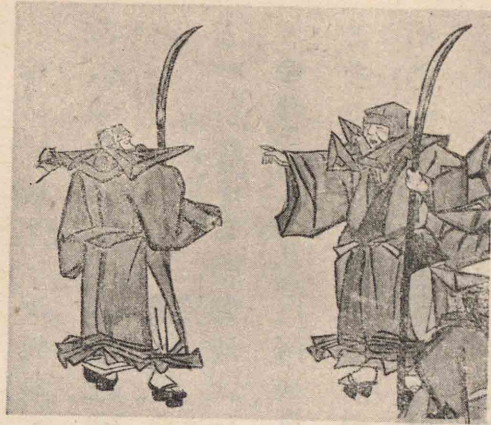
院政の始  
應德三年  
皇紀一七四六年  
院宣

南都  
北嶺

のものは取り上げられた。御自ら質素を守り給ひ、厳しく奢侈を誠められ、且つ國司の重任や、賣官の惡風を除かれたので、綱紀が大いに肅正せられた。なほ天皇は御在位五年で皇子白河天皇に御讓位になり、院中にあつて政を聴き、改革を進めようとし給うたが程なく崩ぜられた。

●院政 白河天皇も藤原氏を抑へられ、御讓位の後、堀河天皇七十三代、鳥羽天皇七十四代、崇徳天皇七十五代の御三代四十餘年の間、院中に於て政治を御覽ぜられた。これから攝政關白の權勢は大いに墜ちた。これを世に院政と呼び、院からの御沙汰を院宣と申した。

●僧兵の強暴 白河法皇は佛教を信じ給ひ、このころ佛教また盛んとなり、寺院は多くの莊園を有し、僧兵を養ふものがあつた。中にも南都南都(奈良の興福寺)、北嶺北嶺(比叡山の延暦寺)の僧兵は横暴を極め、屢、朝廷に強訴した。僧兵については白河法皇も、御心の儘ならぬものは賀茂川の水と雙六の骰子と山法師



僧兵の圖

と歎かれたと傳へられてゐるほどで、手には確刀を持ち、腹巻の上に素絹をつけ、頭を袈裟で包み、足駄をはくのが、その風であつた。興福寺の衆徒は春日社の神木を奉じ延暦寺のものは日吉社の神輿を昇ぎ、事があれば京都に亂入し、朝廷に訴へた。朝廷は源平二氏の武士に命じてこれを防ぐのほかに道なく、僧兵の跋扈とともに亦武士が次第に勢力を得るやうになり、やがて政權を握る基をなした。

第十五章 源平二氏の興起

東國の源氏  
經基 ①  
賴信 ②  
平忠常の叛

●東國に於ける源氏 東國では、源氏は ①經基が天慶の亂の時功があり、また武藏・上野などの國司に任ぜられ、②孫賴信は後一條天皇の御代に、上總・下總に據つて叛いた平忠常を伐つて武名を揚げた。

賴義 ③

前九年の役

ついで、後冷泉天皇の御代に、陸奥の豪族安倍賴時は、勢にまかせて國司を輕んじ、人民を劫掠したので、賴信の子、③賴義は、鎮守府將軍となつて子義家と共にこれを討伐し、賴時及びその子貞任を誅した。これを前九年の役といふ。



武人戰鬪の圖

義家 ④

後三年の役

出羽の豪族清原武則は前九年の役に源氏を援けた功によつて奥羽地方に勢を張つたが、その孫眞衡に至つて一族の武衡等と争ひ奥羽地方は再び亂れた。④源義家は弟義光と力を合はせ、また藤原清衡等を用ひてこの地方を鎮定した。後三年の役といふのはこれである。



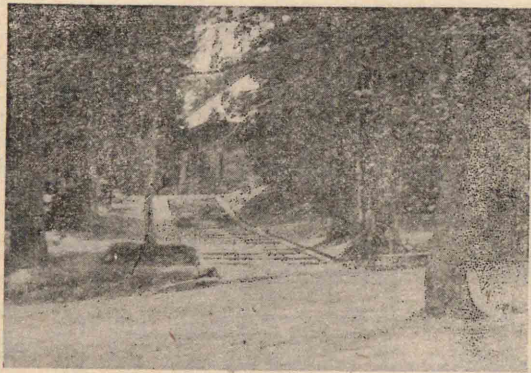
前九年及後三年役要圖

源氏と東國武士

かく源氏は代々東國にあつて武功を立て、頼義、義家いづれも名將であつて恩威がならび行はれたから東國の武士等は深く源氏に心服した。

陸奥藤原氏

一に金堂とも呼ばれ、藤原清衡が葬堂として建立したものだ。後伏見天皇の正應元年に惟康親王が風雨に冒されることを防ぐために金堂を建てられた。附近にまた藤原氏の建てた毛越寺や、その居館柳の御所、伽羅の御所の址等がある。



金堂色

藤原清衡は後三年の役の功により、清原氏の舊地を領して陸奥の平泉(今の岩手縣西磐井郡平泉)に居り、三代九十餘年の間富強を誇つた。清衡が建てた中尊寺の金色堂(コンジキダウ)は今に存して當時の榮華を物語つてゐる。

【陸奥藤原氏略系】



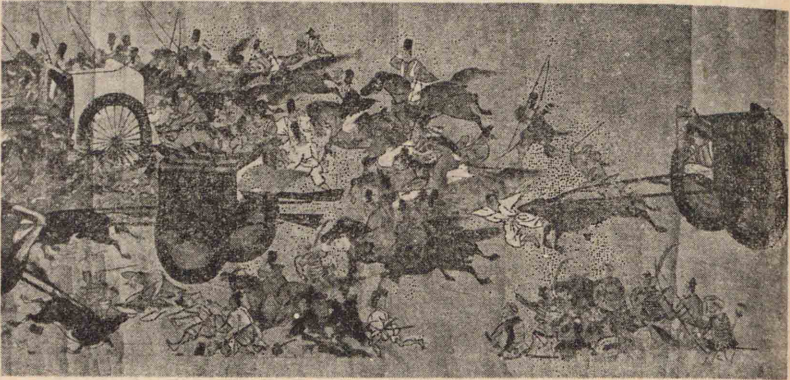
●西國に於ける平氏

平氏は●貞盛が天慶の亂に東國で功を立て、その後裔は伊勢に住し、●忠盛に至つて白河・鳥羽兩法皇の御信任を得、二度も瀬戸内海、海賊を平げて軍功あり、漸次西國で勢力を張るに至つた。

●京都に於ける武士 白河法皇の次には鳥羽法皇が院政を行はれた。保元元年鳥羽法皇が崩ぜられた時、たまたま左大臣藤原頼長は兄關白忠通(タカ)と争ひ互に兵を集めたので、武士等が多く馳せ加つて、亂を起した。これを保元の亂といふ。久しく平和のつゞいた京都にも兵亂を見、武士が活躍するやうになつた。

保元の亂後、源義朝は武人として、平清盛に壓されがちであつたので、藤原信賴(ノボリ)と結んで平治元年清盛排撃の兵を擧げた。こ

平治物語繪卷



第十五章 源平二氏の興起

保元の亂  
保元元年  
皇紀一八一六年

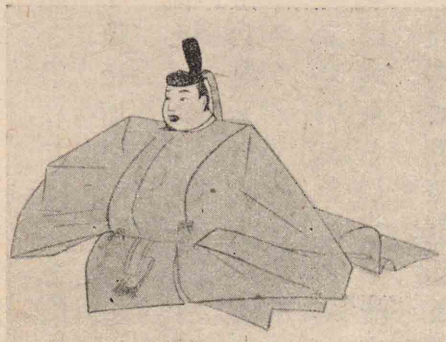
貞盛①  
忠盛②

平治の亂  
平治元年  
皇紀一八一九年

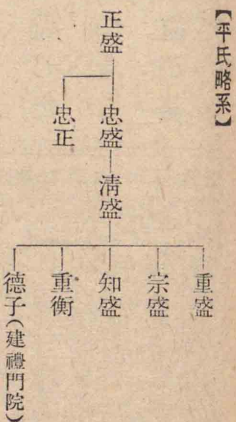
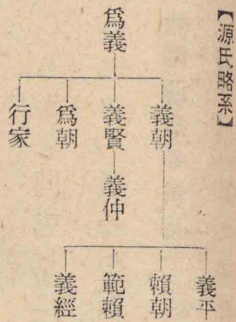
れが平治の亂である。この亂で義朝は敗死し、京都に於ては平氏がひとり榮えるに至つた。

保元の亂 鳥羽法皇の院政の時、崇徳天皇御讓位の後、近衛天皇即位し給うたが天皇の崩後、鳥羽法皇の思召により、後白河天皇が御立ちになつた。當時藤原氏では左大臣頼長が兄の關白忠通に代らうとし、頼長は崇徳上皇にすゝめ奉つて兵を擧げた。その許に集つた武士には源義家の嫡孫爲義、その子爲朝、平清盛の叔父忠正等があつた。關白忠通の味方には爲義の嫡子義朝、源頼政、平清盛等が集つた。義朝、清盛は上皇の御所に夜討をかけ、頼長は流矢にあたつて薨じ、その軍は敗れ、爲義は斬られた。

平治の亂 二條天皇の平治元年、源義朝は、平清盛が紀伊熊野に詣でた隙をうかがひかねて清盛及び當時權勢のあつた藤原通憲、信西入道に怨をもつ藤原信頼と謀り、兵を擧げた。清盛は急ぎ京都に歸り、義朝等を攻めたので、信頼は斬られ、義朝は敗れて逃れ、後尾張の野間にて殺され、義朝の子頼朝は伊豆に流された。



藤原頼長



### 第十六章 平氏の全盛とその滅亡

平氏の全盛



平清盛

●平清盛の全盛 平清盛は平治の亂後、官位しきりに進み、六條天皇のときには従一位太政大臣となり、高倉天皇の御代には、その女徳子(建禮門院)は中宮となり、次の帝安德天皇即位し給うや、清盛は外戚となつた。平氏は清盛の時全盛となり、一門みな高位高官にのぼ



清盛の專横

治承元年

藤原成親



平重盛

り、その所領は全國の半ばを占め、平氏でなければ人でないといはれるほどであつた。清盛は勢が盛なのにまかせて專横となり、治承元年には後白河法皇の近臣藤原成親

源頼政<sup>①</sup>  
治承四年  
皇紀一八四〇年

以仁王

源頼朝の擧兵<sup>②</sup>

源義仲の擧兵<sup>③</sup>

**源義仲**は讃岐國(香川縣)高松の東北海岸にあり、圖のごとく上部の平坦な臺地をなして海に突出してゐる。壽永二年及び三年平家がこゝに據つた。

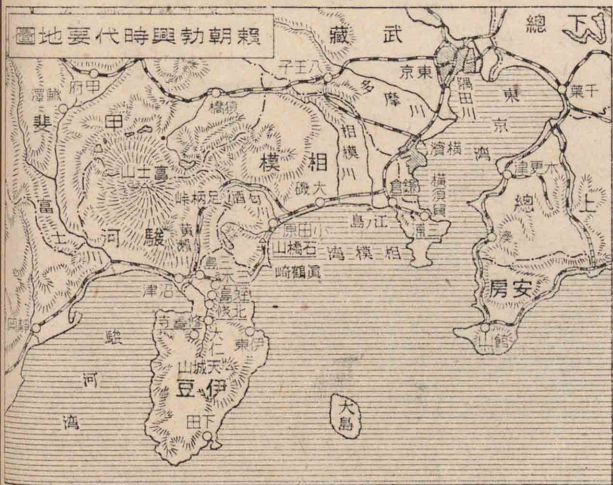
平家の都落  
壽永二年  
皇紀一八四三年



屋島古戰場

法皇の皇子以仁王を奉じて兵を擧げようとしたが、謀がはやくもれて、頼政は宇治に敗北し、王は流矢にあたつて薨ぜられた。また源頼朝は、さきに伊豆に流されたが、以仁王の令旨を受けて起ち、忽ち關東地方を従へ、鎌倉に據つて勢威日に盛となつた。源義仲もまた兵を信濃の木曾に募つて、北國を平げ、平氏の軍を破りつゝ、京都に迫つた。

**平氏の滅亡** 當時清盛は既に薨じて子宗盛が家を嗣いだ、が、柔弱であつて源氏の軍を恐れ、壽永二年、安徳天皇を奉じ、一族とともに西國に落ちた。義仲は代つて京都に入つたが、粗暴なために京都の不安を増したので、頼朝は後白河法皇の命により、弟



義仲の戦死

**下關市赤間宮の境内にある。**

一の谷の戦

屋島戦

壇の浦戦

壽永四年  
皇紀一八四五年

扇の的

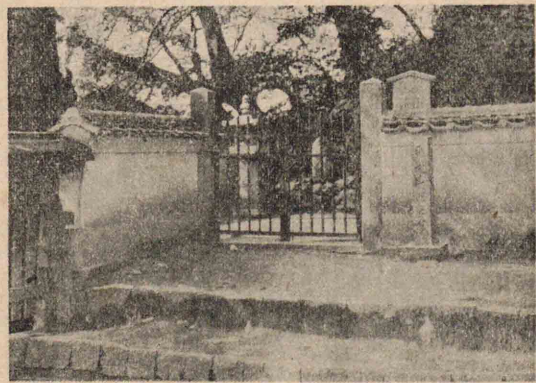
治承四年(八四〇)  
文保二年(一一七〇)

幕府の組織

- 侍所<sup>①</sup>
- 別當
- 和山義盛
- 公文所(政所)<sup>②</sup>
- 別當
- 大江廣元
- 問注所<sup>③</sup>
- 執事
- 三善康信

範頼・義經を上洛せしめた。義仲はこれを宇治勢多に防いだけれども、その軍が敗れ栗津(大津市東南部)で討死をした。

この間に、平氏は勢を盛りかへし、攝津の福原に還り、一の谷に陣をとつたが、範頼・義經に攻め落され、讃岐の屋島に退き、ついで長門の壇の浦に戦ひ、一門の將士等、多く悲壯なる最期を遂げた。時に壽永四年三月、さしも榮華を極めた平氏もはかなく亡ぶるに至つた。



平家の墓の門

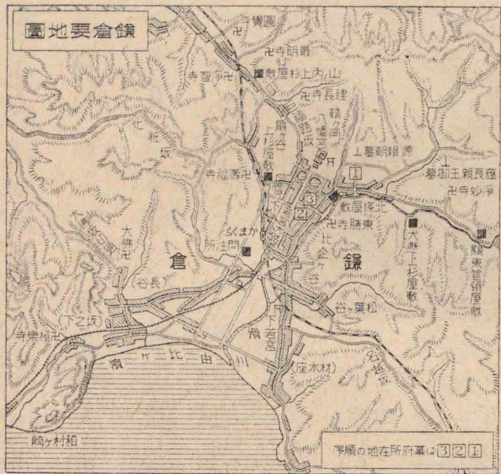
與一鎬を取つてつがひよつびいてひょうつと放つ。弓は強し、鎬は浦ひやく程に長鳴して過たす扇の要ぎは一寸許りおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鎬は海に入りければ扇は空へぞ揚りける。春風に一もみ二もみまれて海へさつとぞ散つたりける。

(平家物語)

第四篇 中世 第一期 鎌倉時代 (頼朝幕府設立より後醍醐天皇御即位まで)

第十七章 鎌倉幕府の創立

●鎌倉幕府の基礎 源頼朝は、源氏が代々東國地方で勢力を張つてゐたことと、また鎌倉が要害の地であることに依つて、幕府をこの處



に開いた。これよりまへ、頼朝は<sup>①</sup>侍所を設け、和山義盛を別當とし、武士を取締らせたが、次いで<sup>②</sup>公文所(後の政所)を開き、大江廣元を別當に任じて庶政を統べさせ、又<sup>③</sup>問注所を置き、三善康信を執事として訴訟裁判を掌らせた。これらはこの後ながく鎌倉幕府の中心機關となつた。

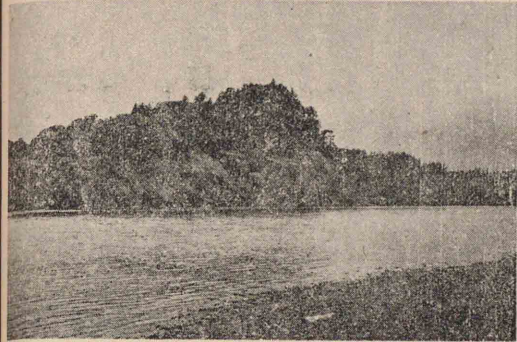
守護・地頭設置の理由

守護・地頭の設置

文治元年  
皇紀一八四五年

圖 國は北上川をへだて、高館を望むところ、この丘陵は舊くより判官館とよばれ、義深自刃の所と傳へられてゐる。  
岩手縣西磐井郡平泉

頼朝と義經との不和



高館

●守護地頭の設置 義經は平家追討に最も功が多かつたが、兄頼朝の怒にふれ、その行方を晦ました。頼朝は大江廣元の議を用ひ、義經等の追捕と諸國の叛亂を豫め防ぐためと稱して、文治元年、後白河法皇の御許を得、全國に守護地頭を配置した。守護は軍事警察の事に

あたり、地頭は土地の管理と年貢のとりたてを掌つた。これによつてしだいに地方では、守護地頭が實力を増し、その上に立つ頼朝は天下の權を握るに至つた。

頼朝は生れつき人を疑ふ心がふかく、義經は勇敢な一面に専斷なところがあつたから、時には頼朝の意にも背き、梶原景時の讒言などがあつたので、戦勝の後、却つて鎌倉に入ることを拒まれた。この時の義經の兄頼朝に對する陳情書(陳情書)は涙なくしては讀

めぬものである。しかもその後頼朝の命をうけた土佐坊昌俊が京都の義經の邸を襲ふたことがあつたので、義經も後には京都を出で身をやつして、潜かに奥州に遁れ、藤原秀衡に頼つたが、その子泰衡の代になつて、平泉の高館であへない最期を遂げた。時に三十一歳であつた。

●海内平定 かくて全國おほむね頼朝の威勢に服し、ただ奥羽には藤原秀衡が、富強に驕つて命を奉じなかつたが、その子泰衡の時、頼朝は自ら大軍を率ゐてこれを攻め滅した。ここに於て天下は平定し、建久三年には頼朝が征夷大將軍に任ぜられるに至つて、鎌倉幕府は名實共に備はり、以後六百七十餘年間、武家が兵馬の權をとる基をなした。

●武家政治 頼朝は平氏滅亡の跡に鑑みて、質素儉約を旨とし、神佛を崇び、武士には質實剛健の風を養ひ、裁判の公平を圖つたので、武士等はよくこれに服した。

頼朝の政治

奥州征伐  
皇紀一八四九年  
鎌倉幕府の完成  
建久三年  
皇紀一八五二年

頼朝孝子を重んず

名高い曾我兄弟の仇討のあつたとき、頼朝は深く兄弟の孝節に感じ捕へられた五郎時致をゆるさうとしたが、法のまげ難いことを思ひ、止むなくこれを罰した。なほ養父曾我祐信に曾我の庄の貢を免除し、篤く兄弟の後を弔はせ、その遺書を手筈のうちに藏し、永く孝子兄弟を偲んだ。

### 第十八章 鎌倉幕府の越權

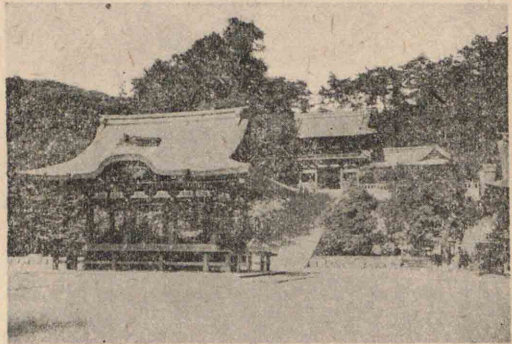
●源氏三代 將軍の職は頼朝薨じて長子頼家がこれを繼いだが、外戚北條時政は、威權を擅にし、間もなく頼家を廢してその弟實朝を立たした。しかし幕府の實權は北條氏にあり、實朝も、承久元年、頼家の子公曉のため弑せられ、源氏は三代二十八年にして家が絶えた。

實朝の詠歌 實朝は天成の歌人であつて、將軍としては不運な一生を終つたが、二十八歳の短い生涯にも、和歌に於て不朽の名を遺した。はじめ定家に學んだが、晩年には九強い萬葉調に獨自の境を拓いた。

北條時政

源氏の滅亡  
承久元年  
皇紀一八七九年

神奈川縣鎌倉町雪ノ下にあり、仲哀天皇・應神天皇・神功皇后を祀り奉る。鎌倉幕府の尊信篤く、歳の始めに將軍自ら拜賀を行ふ等の事があった。實朝はこの神拜の際に石階で弑せられた。



鶴岡八幡宮

原因

承久三年  
皇紀一八八一年

●承久の變 この頃京都にては、後鳥羽上皇が院政を行はせ給ひ、執權北條義時が上皇の御旨にそむくことの多いのを御覽ぜられ、承久三年、義時の追討を思召されたが、義時は大軍を京都に上し、畏くも後

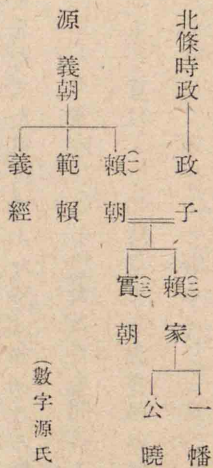
山は裂け海はあせなん世なりとも、君に二心われあらめやも

ものゝふの矢並つくらふ籠手の上に、霞たばしる那須の篠原

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や、沖の小島に波の寄る見ゆ

(金槐集)

#### 【源氏と北條氏】



鳥羽上皇を隱岐に、土御門上皇を土佐(後阿波)に、順徳上皇を佐渡に遷し奉り、古今に類なき無道の行をなした。これを承久の變といふ。

承久の變の時泰時は父義時の命を受けて京都に向つて出發したが途中から只一人鎌倉に歸つて計らざるに風輩を先だてた軍に逢ふた時は如何なる態度を取るべきかを問ふた。義時はこの時賢くも問へる男子かな。その事なり。さばかりの時は兜を脱ぎ弓の弦を切りて偏へに畏りを申して身を任せ奉るべしと答へた。義時のこときものにもその胸中になほ我が國民精神の片鱗を窺ひ得られる。



後鳥羽天皇

なる巖の時てるを頼りにて松の柱に葦葺ける廊など氣色ばかり事簡ぎたり。潮風のいとこちたく吹き來るを聞き召して、我こそは新島守よおきの海の荒き浪風心して吹け (増鏡)

六波羅探題

官幣大社、後鳥羽天皇・土御門天皇・順徳天皇を祀り奉る。大阪府三島郡にある。

評定衆

貞永式目  
貞永元年  
皇紀一八九二年

持明院

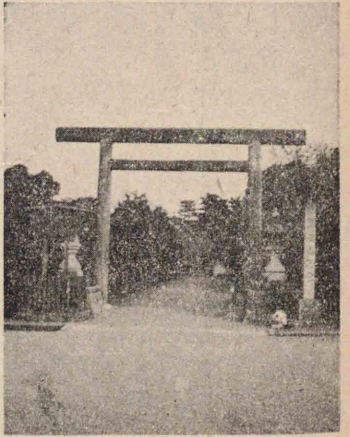
京都市の北部、今の相國寺の近くにあった。伏見天皇御譲位の後の御所である。大覺寺京都市嵯峨にある。

⑤その後の大勢 承久の變の後、義時は泰時・時房を京都に留めて六波羅探題とし、近畿・西國の諸事を管せしめた。義時が卒してから、泰時は鎌倉に歸り執權となつた。泰時は幕府に評定衆を置いて庶務を合議せしめ、また貞永式目(御成敗式目ともいふ)五十一箇條を定めて、武家法制の根本とした。

泰時の孫、時頼もよく衆民の苦を救ふことに心をつくした。

④大覺寺統 持明院統

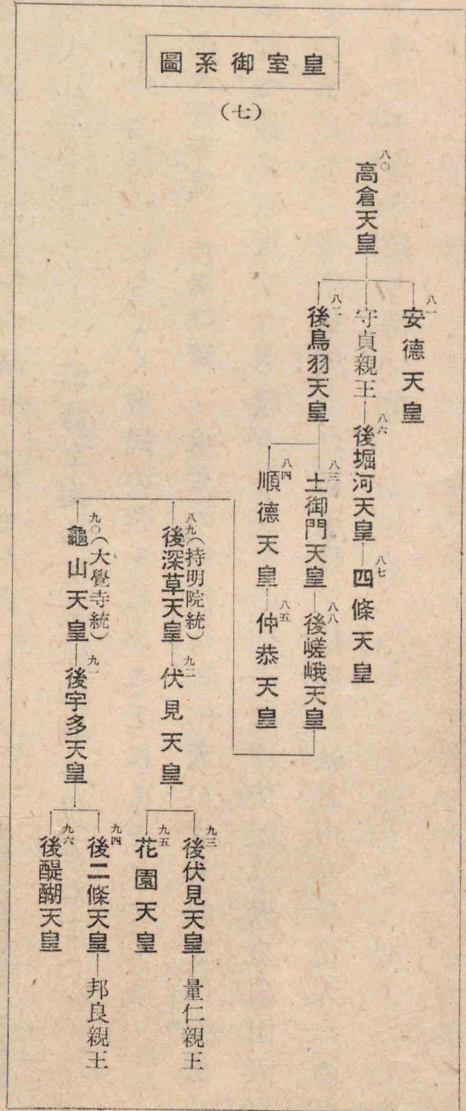
承久の變後、後堀河天皇立ち給ひ、四條天皇を経て後嵯峨天皇立ち給うたが、その御子には後深草天皇・龜山天皇(御子孫を大覺寺統と稱へた)。



水無瀬神社

皇室御系圖

(七)

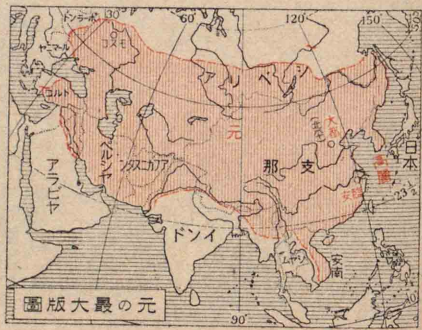


第十九章 元寇

●蒙古 黒龍江の上流地方にゐた蒙古族の鐵木眞は大略あり、我が鎌倉時代の初め頃内外蒙古を統一し成吉思汗と號し、次第に亞細亞の北部・中部を撃つた。孫、忽必烈に至つて南は宋を侵し、東は高麗を討ち、更に我が國をも屈服せしめんとして、屢、無禮な國書を送つて來た。

●文永の役 執權北條時宗は沈勇果敢にして終始強硬な態度を持し、使をしりぞけ、鎮西の將士をして國防を嚴にせしめた。この頃蒙古は國號を元と改めてゐたが、遂に、後宇多天皇の文永十一年高麗と共に兵船九百餘艘を以て對馬、壹岐を侵し、更に肥前筑前の海岸に迫つた。我軍は武器・戰術共に異なり、初め苦戦をしたが、よく奮戦力闘して敵軍を撃滅した。遇、暴風大いに起り、敵艦多く難破し、殘兵は辛うじて遁れ歸つた。

元  
文永の役  
文永十一年  
皇紀一九三四年



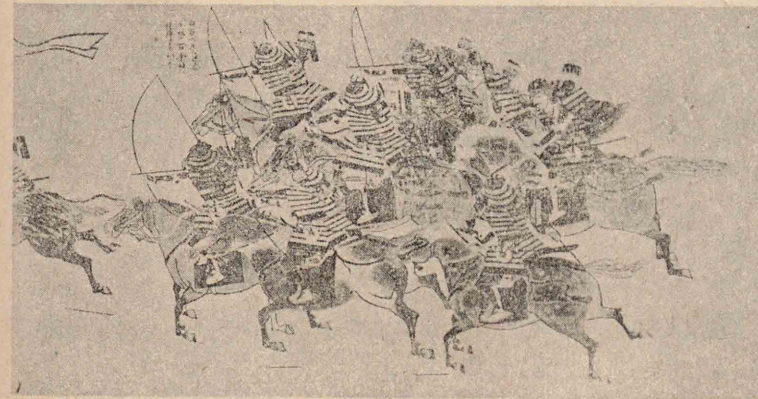
●弘安の役 元はなほも我が國に使を送つて脅かしてゐたが、時宗は毅然として斥け、使者を鎌倉龍口で斬つて意氣を示し、また進んでわれより敵國を征伐する計畫を立て、その準備を急いだ。その後、元

弘安の役  
弘安四年  
皇紀一九四一年

この繪卷は文永弘安の兩役に勇名を馳せた竹崎季長が、當時の畫家土佐長隆等に、戦争の實際を物語つて揮毫させ、自ら詞書を書きそへたものである。こゝにのせてあるのはその一部である。

は宋を滅して支那を全く一統し、弘安四年五月大舉して再び來襲した。先鋒の東路軍凡そ四萬は、再び壹岐を掠め、進んで博多の近海に迫つた。我が勇將河野通有、菊池武房、竹崎季長等奮戦して、遂に敵をして上陸せしめなかつたばかりでなく、屢敵艦を襲うて彼等の膽を寒からしめた。ついで七月、范文虎等の率ゐる十萬餘の江南軍は、海を蔽うて來着し、まさに全軍合して我に迫らうとした。時に大風再び吹き起り、敵艦の覆没するもの算なく、我が軍機に乗じて攻撃し、大勝を得た。

④上下一致 この兩度の來寇には上、皇室



(圖の軍本日) 卷繪來襲古蒙

日本國が歐羅巴に知られることは後章マルコ・ポーロの條參照

國民の自覺

には畏くも國家のため深く宸襟を惱ませられ、幕府は將士を勵まし、その處置よろしきを得、萬民はみな一致して國難に殉ずる熱誠を顯はした。かくて大勝を獲て我が國威を大いに宣揚し、これにより日本國が歐羅巴までも知られる因となつた。

この頃國民の敵愾心の盛んであつたことは、次の例からも察せらる。

京都西賀茂正傳寺の宏覺禪師は、六十三日間蒙古降服の祈禱をした。その願文の裏には、末の世の末の末まで我が國は、よろづの國にすぐれたる國といふ歌が書き添へてあつた。又奈良西大寺の叡尊興正菩薩も、石清水八幡に同じく蒙古撃滅を祈願し、「日本は則ち神の末葉、蒙古はこれ犬の子孫



(圖の軍古蒙) 卷繪來襲古蒙

叡尊

神と犬と何ぞ對揚に及ばんとの文を奉つてゐる。春日若宮の神官中臣祐春が西の海よせくる波も心せよ神の守れをやまと島根ぞと詠んだのは當時の我が國民のなべての氣持をよく示したものである。

### 第二十章 鎌倉時代の文化

●國家の統治と國民精神 この時代には鎌倉に幕府が開かれて、武士を統轄したとはいへ、京都には畏くも天皇が坐しまし、世を治しめし給ひ、公家の間には傳統ある文化がなほも榮えた。

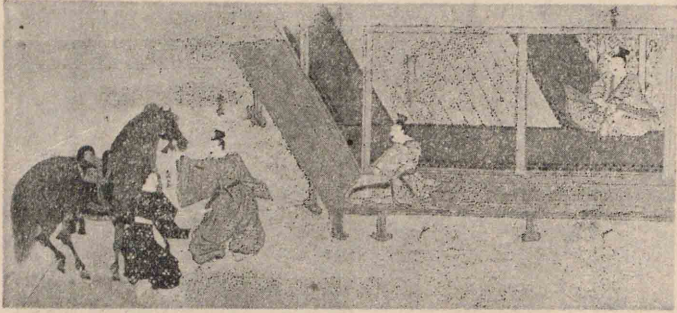
元寇の國難にあつては、公武心をあはせ、廣く國民の間にも國家的自覺が高まつた。國民精神としては尙武勤儉の風が大に興つた。而して文化も從來貴族の間のみ榮えた感があつたに對してこの時代は廣く普及する傾向を生じた。

●武人の生活 武士たちは忠孝節義を第一とし、勇武にして質素を

尙武  
勤儉

勇武  
質素

蒙古襲來繪詞による。竹崎季長が馬を秋田城介泰盛から給はるところである。



武士の生活

尙び、名を惜しみ、死を鴻毛の輕きに比べたほどで、この武士たちの間に起つた氣風が武士道となり、永く我が國民生活の上に基礎となつたものである。なほこの武士道は肇國以來の國民精神がこれを結成したもので歴史を貫いて流れてゐる國民道徳ともいへる。

武士の日常生活は簡易實用を主としたので衣服にはもと貴人の略服であつた直衣または狩衣、水干に烏帽子を常用とし、家屋も板葺草葺で周圍に築地を廻らした質素な武家造に住み、食物は強飯を常食とし、朝夕二食で魚肉などは餘り用ひなかつた。遊戯等も狩獵、笠懸、流鏑馬、犬追物などの勇壯なものが喜ばれた。一體に京都の公家が文弱に流れ遊戯的な生活をしてゐるに反し、質素で眞劍味があつた。

●新佛敎の興起 かくる時世であつたから、



千三

新宗派

淨土宗 ①

眞宗 ②

時宗 ③

法華宗 ④

禪宗  
臨濟宗 ⑤  
曹洞宗 ⑥



法然上人

教へた。④日蓮はまた法華經の題目を唱へる法華宗(日蓮宗)を興し

た。これらの新宗派は皆平易な教で

國民の生活を基にして説いたから、忽ち民間に弘まつた。

またこの頃、僧⑤榮西は支那(宋)から

禪宗の一派臨濟宗を、更にその弟子⑥

道元は曹洞宗を傳へた。自己の鍛錬

によつて悟を開く禪宗は、武士の意氣に適つたので、武士の間に多く

行はれ、武士道の精神にも深く影響するところがあつた。

④學問と文學 學問は公家僧侶ばかりでなく、武士の間にも廣がり

文學には武士の好みに適する平家物語・保元物語・平治物語・源平盛衰

記等の軍記物が多く現れ、文體は漢文にかはつて新に興つた假名交

り文が廣く行はれ、後の世の文章にも多く影響を與へてゐる。和歌

はまた盛んであつて、新古今和歌集等の勅撰があり、歌人には後鳥羽

天皇をはじめ、源實朝・藤原俊成・同定家・僧西行等の名手が出た。この

時代の末に、北條實時・顯時父子が武藏に金澤文庫を建て、學問を奨励

した。

金澤文庫

新古今和歌集

和歌

軍記物

文學

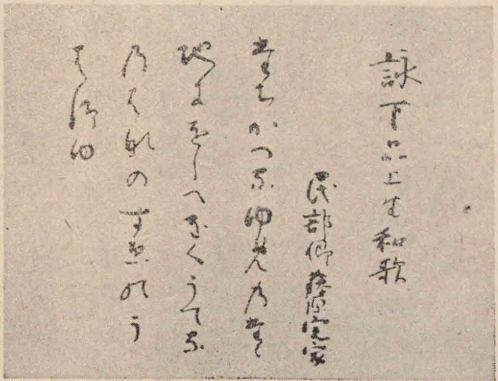
學問

定家は、この時代の歌道では殊に有名である。新古今和歌集は後鳥羽上皇の命を奉

じて定家が主となつて撰んだもので、古今和歌集と並んで勅撰集中の雙璧と稱せら

れる。また世にいふ百人一首は、定家が京都の西小倉の山莊に閑居したとき古へか

この懐紙は定家六十八歳の筆である。たちかへるゆめのたぐちにをしへをく、うてなのはなのすゑのうはつゆ



紙懐歌和家定

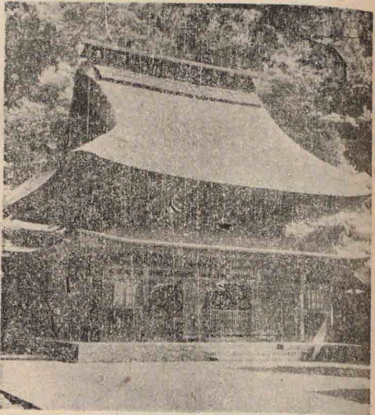
らの名家百人につき各一首を撰び色紙に書いて壁に貼つたと傳へられるものである。西行はもと北面の武士であつたが、深く世の無常を感じて僧となつた。和歌を詠み、諸國を行脚して、一生を送つた。その歌の飾りのない素直さには心打つものがある。山家集はその歌集である。こころなき身にもあはれは知られけり、鳴立つ澤の秋の夕暮

彫刻 繪畫 書道

美術工藝 鎌倉時代の剛健で、潑刺たる精神は、美術工藝の上にもよく現れ、佛像彫刻には運慶・湛慶の名工が出て、雄渾な刀法を以て活動の状を現はすことに勝れ、繪畫には藤原隆信・同信實などが出て、肖像畫や繪巻物が發達した。書道も尊圓親王によつて御家流の基がひらかれた。

建築

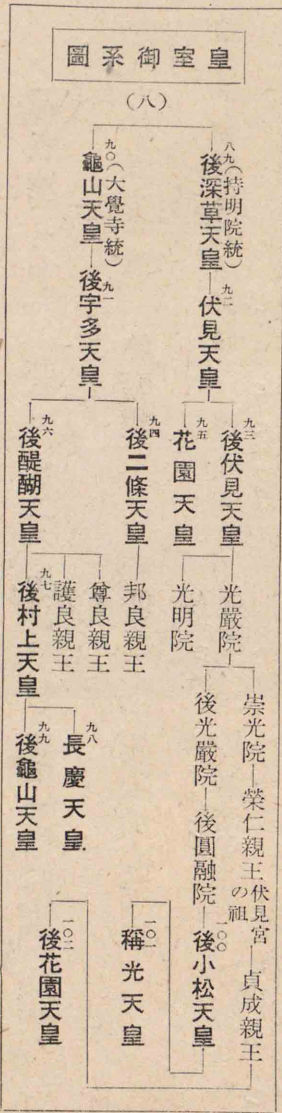
圓覺寺は鎌倉五山の第一。この舍利殿は鎌倉時代に新たに出來た禪宗建築(唐様)の標本で、今國寶に指定せられてゐる。



殿舍利寺覺圓

建築には寺院などでは禪宗風の様式が特色を發揮し、雄偉健實の風が見られ、住宅には質素な武家造が行はれるやうになつた。

工藝には武器の類の製作が進み、刀劍はこの時代に特に發達し、名工粟田口吉光・岡崎正宗・長船・長光等があらはれた。陶工加藤四郎左衛門景正が宋から陶法を傳へて、尾張に瀬戸焼を創めたのもこの時代である。



文保二年(一九六) 皇中九年(二〇三)

第五篇 中世 第二期 建武中興と吉野時代 (後醍醐天皇御即位より 後龜山天皇御還幸まで)

第二十一章 後醍醐天皇の御即位 中興政治の發現

後醍醐天皇の御親政

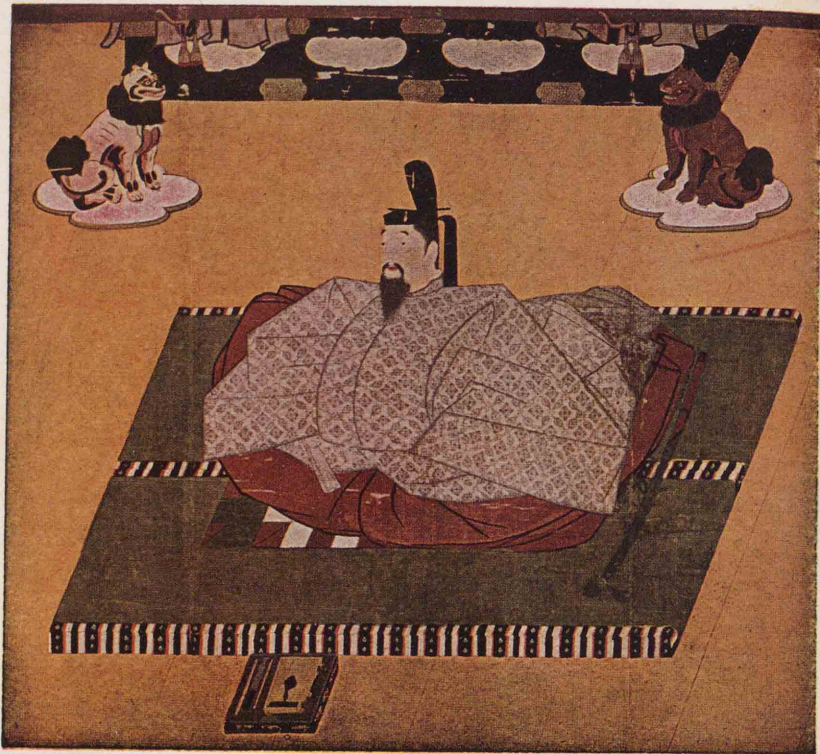
●後醍醐天皇の御即位 後醍醐天皇は英邁の天資を以て即位せられ、御代の初に、御父後宇多法皇が院政を廢止せられた後は親しく政を覽給ひ、近侍の臣に賢良の人を多く集められた。この時執權北條高時は暗愚であつて、しかも奢侈に耽つたので人心はしだいに幕府から離れていつた。

●討幕の御企 天皇は幕府を廢し朝廷の御政治を古へのさまに復さうと思召され、正中元年近臣日野資朝同俊基等と議られたが、事漏れて行はれなかつた。これを正中の變といふ。



正中の變

正中元年 皇紀一九八四年



後醍醐天皇御宸影

この御像は天皇が清涼殿の御帳臺の前におはしますを畫き奉つたもので、御装束は冬の御服で、小葵の御引直衣を召され、下には紅の表袴をお着けになつてゐる。

後醍醐天皇の御宸影の、數あるうちにも、最もすぐれて畫きまつたものである。これにより、ありし御代の御英姿をさながらに拜し奉るのである。

— 京都市・大徳寺所藏 —

元弘元年  
皇紀一九九一年

京都府相樂郡に在る。前の流れは木津川。山上には古くから笠置寺がある。

有王山



笠置山

その後、天皇は皇子護良親王(大塔宮)と御謀を合せられ、元弘元年、再び幕府討伐の御企をなし給ひ、親王は延暦寺その他近畿諸寺の僧徒や、武士等と結び給うたが、高時はこれを知つて、大兵を京都に向はせたので、天皇はひそかに笠置山に行幸あらせられ、勤皇の兵を召し集められた。しかし笠置山は陥り、天皇は翌年、隠岐に遷り給うた。

後醍醐天皇笠置を落ち給ふ 如何にもして夜の内に、赤坂の城へと御心ばかりを盡されけれども、假にもいまだ習はせたまはぬ御歩行なれば、夢路を辿る御心地して、中略有王山の麓まで落ちさせ給ひけり。

藤房・秀房も三日まで口の食を断ちければ、足たゆみ、身疲れて今は如何なる目に逢ふとも、逃げぬべき心地せざりければ、せん方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟諸共に

有王山は京都府綴喜郡にある。笠置山からは西北にあたる。山また山の路を凌ぎ、君臣ともに賊の手にわたり給ひしと傳へられる有王ノ芝は、圖中下方に見える池のほとりにある。

現の夢に伏し給ふ。梢を拂ふ松の風を、雨の降るかと思召して、木蔭に立寄せ給ひければ、下露のはらくと御袖にかゝりけるを、主上御覽ぜられて、

さしてゆく笠置の山を出でしより

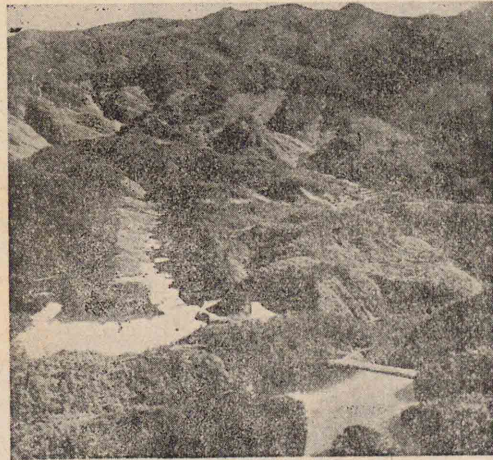
あめが下にはかくれがもなし

藤房卿涙をおさへて

いかにせんたのむ蔭とてたちよれば

なほ袖ぬらす松のしたつゆ

(太平記)



有王山

赤坂城  
千早城  
元弘二年

楠木正成 その時義兵を起すものに、まづ河内に楠木正成があつた。正成は笠置が陥るまへに赤坂城に據つたが、北條氏の軍に攻め落されたので、金剛山に千早城を築いて大軍を一手に受け、大いに天下の義軍を鼓舞した。一方、護良親王も吉野から令旨を四方に下し



金剛山千早城址

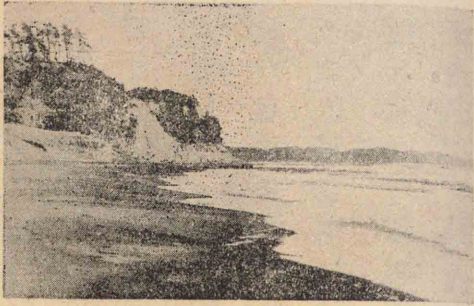
飛行機上から撮影した金剛山千早城址一帯の光景である。千早城址は圖の中央に聳え立つてゐる峻峯の上にある。麓の千早村から只一すぢの急峻な登山路が見える。

太平記に「此城東西は谷深く切れて、人の上るべき様もなし。南北は金剛山に續いて、しかも峯峙ちたり。され共高さ二町許にて廻り一里に足らぬ小城なれば」と記してゐる。

六百年前に楠公が北條氏の大軍勢をこゝに引受け、智謀を盡して防ぎ戦ひ、賊軍をさんぐに惱した有様が想ひうかべられる。

勤皇の諸士

元弘三年五月廿一日義貞の軍は三方より鎌倉に迫つた。義貞自らは極樂寺口に進んでこの稻村ヶ崎を徒渉して向ふの由井ヶ濱に出で鎌倉に入ることが出來た。翌日高時以下自刃した。



給ひ、義兵をお募りになつた。ここに於て赤松則村(播磨)菊池武時(肥後)土居得能(伊豫)等勤皇の稻士が各地に起つた。天皇におかせられても、また隠岐を出で給ひ、名和長年が迎へ奉つて船上(伯耆)に兵を擧げた。

北條氏の滅亡 足利高氏はかねて野心を懷いてゐたので、北條氏の爲め兵を山陰道に進める途にて官軍に歸順し、戈を回して京都に入り、六波羅を陥れた。東國にては新田義貞も兵を上野に擧げ、進んで鎌倉に攻め入つたので、高時は遂に一族と共に自殺し、北條氏はここに亡んだ。時に元弘三年五月であつて、源頼朝が幕府を開いてから凡そ百五十年である。

かくして、ここに後醍醐天皇の中興の大業が成るやうになつた。

北條氏の滅亡

元弘三年  
皇紀一九九三年

【北條氏略系】



第二十二章 建武中興

建武中興

建武元年

皇紀一九九四年

御新政の内容

御親政 ①

記録所 ②

雑訴決斷所 ③

武者所 ④

地方政治 ⑤

國司

守護

征夷大將軍 ⑥

論功行賞 ⑦

●中興の御新政 後醍醐天皇は元弘三年六月京都に還幸し給ひ、翌年正月建武と改元せられた。御還幸の後、天皇はこゝに ①御親政にして萬機御一統の政治の實を挙げさせられ、まづ ②記録所を再興し、大事をこゝにて決せられ、次いで ③雑訴決斷所を設けて訴訟を聴かしめ、④武者所を置いて武士を取締らせ、⑤地方には國司・守護を置いてこれを治めしめられた。又 ⑥護良親王を征夷大將軍となし、その他、⑦有功の公家・武士は皆それ〴〵に官職を賜はり、中にも北畠・楠木・新田・足利の諸氏は厚く賞せられた。この新政を建武中興といふ。

公武不和 ①

不平の士 ②

政治澁滞 ③

二條河原落首

〔注〕

召人 ① 囚人

成出者 ② 成り上

り者

器用 ③ 才能

堪否 ④ 適不適

上のきぬ ⑤ 上に

きる袍

尊氏の叛

●御新政の障碍 かくて中興の大業は、なほも天皇の御理想の實現をこそまち申すべきであつたが、諸政草創のうちに ①公家と武士との間に和協を缺き、②勳功の將士の中にも驕るものや濫りに恩賞を欲するものが出て、③政治の上に混亂と澁滞とを來たし、御新政の前途に多くの障碍を見るに至つた。

當時の世を諷刺した二條河原落首といふのがある。そのはじめにかく謡うてゐる。此頃都にはやるもの、夜討強盜謀論旨召人早馬虚騒動下剋上する成出者器用の堪否沙汰もなく、もるゝ人なき決斷所きつけぬ冠上のきぬ持ちもならはぬ笏持ちて内裏まじはり珍らしや。

●尊氏の謀叛 足利尊氏はその功を賞せられ、御名の一字をさへ賜はつたが、かねてより、自ら幕府再興の非望をいだき、その機會を窺つてゐた。やがて尊氏は鎌倉に下つて叛き、自ら征夷大將軍と稱した。天皇は義貞及び陸奥の北畠顯家に勅して尊氏を討たしめ給うたが、

義貞の敗戦

叡山行幸

尊氏敗走

延元元年  
皇紀一九九六年

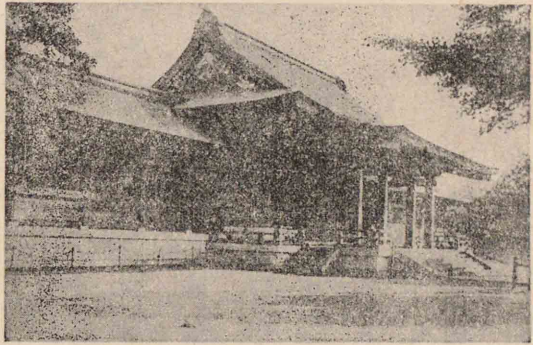
尊氏の再舉

多々良濱戦

延元元年  
多々良濱は福岡  
縣糟屋郡に屬  
し、香椎宮以南、  
多々良河附近の  
海岸をいふ。

湊川戦

延元元年



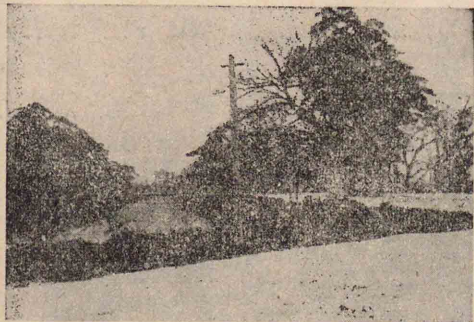
社 神 川 湊

義貞は足柄箱根に敗れ、尊氏はその後を逐うて京都に攻め入つた。天皇は一たび難を叡山に避け給うたが、間もなく顯家が義良親王を奉じて陸奥から上り、義貞・正成長年等と力を合はせて尊氏を破り、これを九州に走らせた。

④ 湊川の戦 尊氏は

九州に下り、多々良濱に菊池武敏を破つて

九州を風靡し、この年五月大兵を率ゐて京都へ攻め上つた。義貞と正成とはこれを攝津の兵庫に防いだ。正成は湊川に戦死し、義貞は敗れて京都に歸り、賊軍京都に亂入するに



川 湊 の 年 初 治 明

及んで、天皇は再び叡山に行幸し給うた。

その後、官軍の諸將何れも利なく、千種忠顯

名和長年等相次いで戦死した。

千種忠顯  
名和長年  
正成兄弟討死  
「七たび生れて  
朝敵を滅さん」

湊川の北に當つて在家の一村ありける中へ走つて、腹を切らんとために鎧を脱いで其の身を見るに斬創十一箇所までぞ負ひたりける。此外七十二人の者共も皆五箇所三箇所の疵被らぬ者なかりけり。正成座上にゐつゝ、舍弟正季に向つて「抑最期の一念によつて、善惡の生を引くといへり、九界の間ににか御邊の願ひなる。」と問ひければ正季からからと打笑ひて「七生まで唯同じ人間に生れて朝敵を滅さばやとこそ存じ候へ。」と申しければ正成よに嬉しげなる氣色にて、「我も斯様に思ふなり。いざさらば同じ生を替へて此の本懐を達せん。」と契つて兄弟共に刺し違へて同じ枕に伏しにけり。

（太平記）

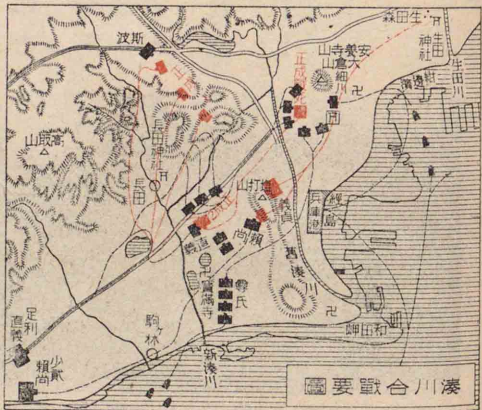


圖 要 畧 合 川 湊



### 第二十三章 吉野の朝廷

吉野山中の景で  
圖中向つて右の  
上方には藏玉堂  
あり。左方には  
遠く如意輪堂方  
面が望まれる。

福島縣伊達郡  
山の麓、靈山支  
城の一なる古屋  
館の址にあり、  
北畠親房・顯家・  
顯信・守親の靈  
を祀る。

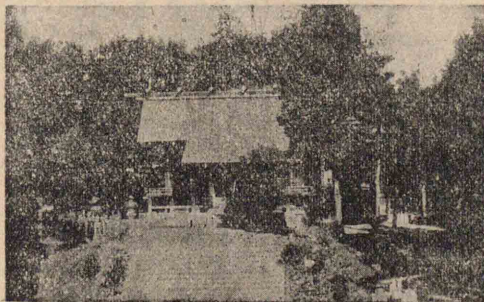
吉野御遷幸  
延元元年十二月  
皇紀一九九六年  
吉野時代



吉野山遠景

年間の朝廷はおほむね吉野にあつたのでこの  
時代を吉野時代といふ。

義貞顯家の奮闘 新田義貞は天皇の命によ



靈山神社

① 金剛山 金剛山は大和・河内の界に聳ゆる葛城山脈中の高峰で、古來楠木氏と關聯して名高い。山頂に近く葛木神社があり、西麓には最も近く、千早城址のある千早があり、裾には、赤坂城址・觀心寺があり、南河内一帶楠木氏の根據地でまた、楠木一族の郷土であつた。

② 新田神社 新田氏は源義家の第三子義國から出て、世々上野(群馬縣)新田郡にあり、義貞の父は朝氏といひ、世良田等を領してをり義貞の居館も世良田にあつたといはれる。新田郡の首都太田町の北金山には義貞を祀る新田神社がある。こゝは渡良瀬川を隔て、北に下野(栃木縣)の足利に對してをる。

③ 船上山 船上山は伯耆(鳥取縣)の大山に近く、元弘三年後醍醐天皇を隱岐より迎へ奉り、名和長年及び弟僧源盛等が據つた所である。頂上は平坦であるが三方絶壁をなして居り、天皇屋敷と呼ばれる所や、船上寺等の古蹟がある。これより平野に近く名和があり、海岸には名和神社や名和氏居館のあとのある御來屋町がある。

④ 井伊谷の城 後醍醐天皇皇子一品中務卿宗良親王は元弘以來御父後醍醐天皇の中興の大業を御たすけし、後足利氏の叛以來遠江井伊谷城にあつて、東海・信越地方の經營にあたられ、勤皇の士には、井伊道政・狩野介貞長・足助重春・香坂高宗があつた。正平年中には新田氏を率ゐて關東にて軍務に盡され後井伊谷に薨じ給ふた。この地に親王を奉祀する官幣中社井伊谷の宮並びに井伊道政・高顯父子を祀る攝社井伊神社がある。

勤皇諸氏と郷土



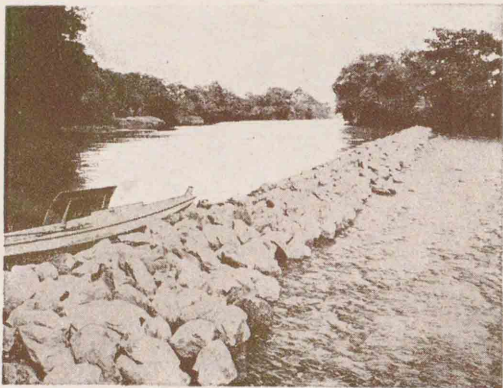
船上山



新田神社



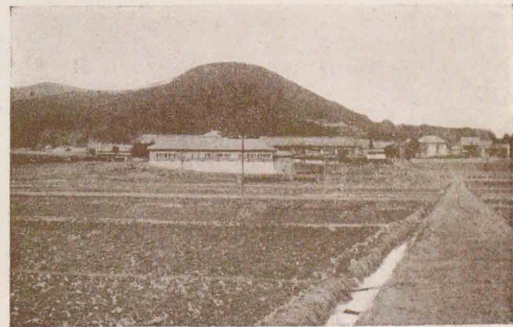
金剛山の麓



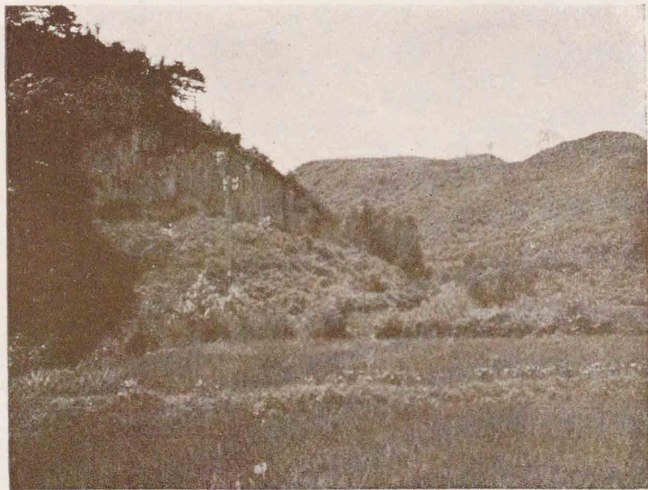
筑後川



山ノ奥



遠江伊井谷の城



山ノ奥の城



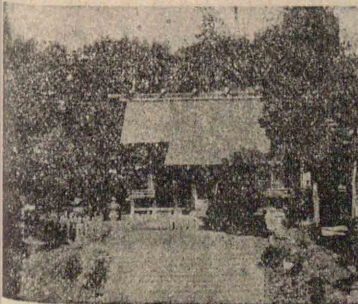
伊勢の村の濱

吉野御遷幸  
 延元元年十二月  
 皇紀一九九六年  
 山の麓 靈山支  
 城の一なる古屋  
 館の址にあり、  
 北畠親房・顯家・  
 顯信・守親の靈  
 を祀る。

年  
 の  
 間、朝廷はおほむね吉野にあつたのでこの  
 時代を吉野時代といふ。



遠景  
 ので、天皇は潜かに吉野  
 に御遷幸あらせられた。  
 これより後四代五十七



山ノ奥神社

— 勤皇諸氏と郷土 —

① 金剛山 金剛山は大和・河内の界に聳ゆる葛城山脈中の高峰で、古來楠木氏と關聯して名高い。山頂に近く葛木神社があり、西麓には最も近く、千早城址のある千早があり、裾には、赤坂城址・觀心寺があり、南河内一帶楠木氏の根據地であつた、楠木一族の郷土であつた。

② 新田神社 新田氏は源義家の第三子義國から出て、世々上野(群馬縣)新田郡にあり、義貞の父は朝氏といひ、世良田等を領してをり義貞の居館も世良田にあつたといはれる。新田郡の首都太田町の北金山には義貞を祀る新田神社がある。こゝは渡良瀬川を隔て、北に下野(栃木縣)の足利に對してをる。

③ 船上山 船上山は伯耆(鳥取縣)の大山に近く、元弘三年後醍醐天皇を隱岐より迎へ奉り、名和長年及び弟僧源盛等が據つた所である。頂上は平坦であるが三方絶壁をなして居り、天皇屋敷と呼ばれる所や、船上寺等の古蹟がある。これより平野に近く名和があり、海岸には名和神社や名和氏居館のあとのある御來屋町がある。

④ 井伊谷の城 後醍醐天皇皇子一品中務卿宗良親王は元弘以來御父後醍醐天皇の中興の大業を御たすけし、後足利氏の叛以來遠江井伊谷城にあつて、東海・信越地方の經營にあたられ、勤皇の士には、井伊道政・狩野介貞長・足助重春・香坂高宗があつた。正平年中には新田氏を率ゐて關東にて軍務に盡され後井伊谷に薨じ給ふた。この地に親王を奉祀する官幣中社井伊谷の宮並びに井伊道政・高顯父子を祀る攝社井伊神社がある。

⑤ 靈山 陸奥國伊達郡にある。天險の要害にして建武・延元の頃北畠顯家・顯信が義良親王を奉じてこれに據つて忠誠を盡した所で、山上よりは東太平洋の白帆、蒼波を望むことが出来る。靈山村大石には北畠親房・顯家・顯信・守親を合祀する別格官幣社靈山神社がある。

⑥ 筑後川 九州の肥後には菊池・阿蘇の二氏が懷良親王を奉じて勤皇の兵を擧げてゐたが、正平十四年八月親王は菊池武光を率ゐて筑後川に少貳頼尙の軍を破られ、大いに皇威を伸張することが出来た。

⑦ 村松の浦 吉野時代宮室を護るものに西に楠木氏、東に北畠氏があつた、北畠親房は伊勢に皇大神宮が鎮り坐すことゝ、その地が吉野朝廷に取つて護るにも出るにも重要な地であることを思ひ、その經營を進めた。故に大和地方より東國に出るには常にこの地よりした。こゝに見る村松の浦は當時の重要な湊の一で海上の重要な根據地であつた。

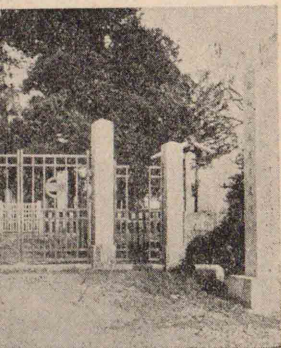
⑧ 搦城 陸奥(福島縣)の白河は結城氏の本據であつたが建武中興・吉野時代結城宗廣が義良親王を奉ずる北畠顯家、親王をたすけ奉る北畠親房・顯信とともに忠誠を盡した時、この搦城は其の居城であつた。圖に見る右方山上の松の附近は本丸の址、左方には松平定信の感忠銘が刻せられた斷崖がある。

— 三重縣度會郡村濱村松 —

金ヶ崎城

福井縣吉田郡藤島村大字燈明寺に在り。義貞戦

り、皇太子恒良親王皇子尊良親王を奉じて北國の經營に赴き、越前金崎城に據り、足利氏の軍と戦つたが、武運つたなく、延元三年閏七月越前藤島の戦に討死した。



燈明寺

⑤ 靈

山 陸奥國伊達郡にある。天險の要害にして建武・延元の頃北畠顯家・顯信が義良親王を奉じてこれに據つて忠誠を盡した所で、山上よりは東太平洋の白帆、蒼波を望むことが出来る。靈山村大石には北畠親房・顯家・顯信・守親を合祀する別格官幣社靈山神社がある。  
— 福島縣伊達郡靈山村 —

⑥ 筑

後 川 九州の肥後には菊池・阿蘇の二氏が懷良親王を奉じて勤皇の兵を擧げてゐたが、正平十四年八月親王は菊池武光を率ゐて筑後川に少貳頼尙の軍を破られ、大いに皇威を伸張することが出来た。

⑦ 村

松 の 浦 吉野時代宮室を護るもの西に楠木氏、東に北畠氏があつた、北畠親房は伊勢に皇大神宮が鎮り坐すことゝ、その地が吉野朝廷に取つて護るにも出るにも重要な地であることを思ひ、その經營を進めた。故に大和地方より東國に出るには常にこの地よりした。こゝに見る村松の浦は當時の重要な湊の一で海上の重要な根據地であつた。  
— 三重縣度會郡濱村松 —

⑧ 搦

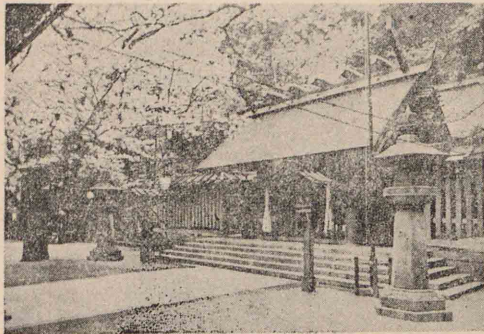
城 址 陸奥(福島縣)の白河は結城氏の本據であつたが建武中興・吉野時代結城宗廣が義良親王を奉ずる北畠顯家、親王をたすけ奉る北畠親房・顯信とともに忠誠を盡した時、この搦城は其の居城であつた。圖に見る右方山上の松の附近は本丸の址、左方には松平定信の感忠銘が刻せられた斷崖がある。

金ヶ崎城

福井縣吉田郡藤島村大字燈明寺に在り。義貞戦死の地と傳へられる。

官幣中社、恒良親王・尊良親王を祀り奉り、福井縣敦賀にある。地は金崎城址である。

顯家の戦死  
延元三年



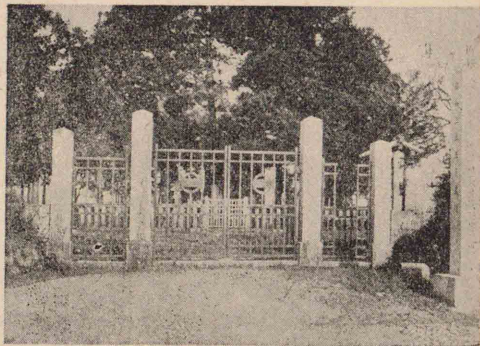
第二十三章 吉野の朝廷

り、皇太子恒良親王・皇子尊良親王を奉じて北國の經營に赴き、越前金崎城に據り、足利氏の軍と戦つたが、武運つたなく、延元三年閏七月越前藤島の戦に討死した。

また北畠顯家は、延元元年、尊氏を九州に走

らせた後、義良親王を奉じて再び陸奥に下り、その地を經營したが、天皇が吉野から召し給うたので、親王を奉じて西上し、鎌倉を略し、畿内に入り、賊將高師直と戦ひ、延元三年五月和泉の石津で戦死した。義貞に先立つこと三月であつた。

後醍醐天皇の崩御 官軍の勢が日に振は



燈明寺

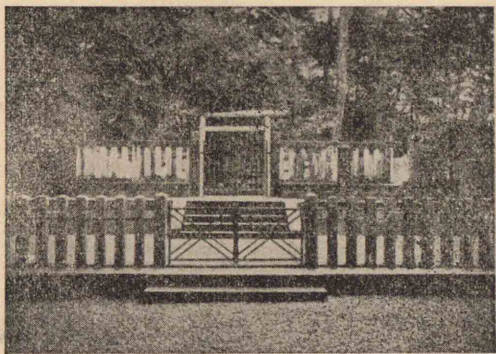
天皇崩御

延元四年  
皇紀一九九九年

神皇正統記

吉野如意輪寺觀音堂の後方にあり、塔尾陵と稱し奉る。北向きに築かれた高さ八尺の圓形の御陵である。

〔註〕獲麟―仲尼（孔子）が春秋を著して哀公十四年に麟を獲るといふにて筆を留めたことと指す。



後醍醐天皇御陵

ぬ時天皇は延元四年八月吉野の行宮に崩御あり、皇太子義良親王が即位せられた。後村上天皇と申す。この御代には北畠親房が朝廷の柱石としてのこり、神皇正統記を著した。

大日本島根はもとよりの皇都なり。内侍所神璽も吉野におはしませば、いづくか都にあらざるべき。さても八月の十日あまり六日にや、秋霧におかされさせ給ひて、かくれまし。ぬとぞ聞えし。寝るが中なる夢の世、今に始めぬならひとは知りながら、かすく目の前なる心地して、老の涙もかきあへねば、筆の跡さへとどこほりぬ。昔仲尼は獲麟に筆を絶つとあれば、こゝにて留まりたく侍れど、神皇正統のよこしまなるまじき理を申し述べて、素意の末をも顯はさまほしくしてしひて記しつけ侍るなり。

（神皇正統記）

四條畷の戦 筑後川の戦 正成の子正行は既に長じて吉野の朝

正行戦死の古戰場でその西麓に別格官幣社四條畷神社がある。楠木正行を祀り、また楠木正時・和田賢秀以下の殉難戦歿の將士を配祀する。大阪府北河内郡四條畷村にある。

正行の戦死

正平三年  
皇紀二〇〇八年

賀名生

熊本縣八代郡宮地村悟眞寺の傍にある。悟眞寺は懷良親王追善のため、菊池武朝が再興したものである。

正行吉野参内

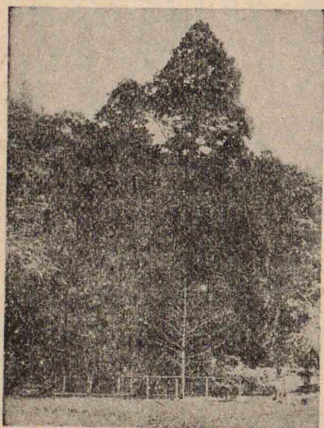


飯盛山

廷を守護し奉つてゐたが、正平三年春、尊氏は高師直・師泰をして大舉吉野を攻めさせようとした。正行・正時は兵を出してこれを河内の四條畷に拒いだ。が衆寡敵せず、壯烈な戦死を遂げた。賊軍は勝に乗じて吉野にせまり、天皇は賀名生に難を避けられた。九州にあつては、ひとり菊池武光が懷良親王を奉じて孤忠を盡し、正平十四年筑後川の戦に賊軍

を破つて大いに勢力を得た。しかしその死後は九州の勤皇の士も振はず影をひそめた。

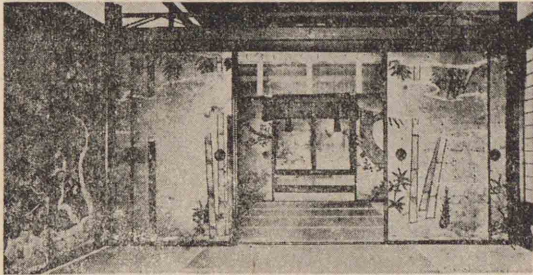
〔父正成庇弱の身を以て大敵の威を碎き先朝の



懷良親王御墓

宸襟を休め進らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻め上り候間、危きを見て命を致す所かねて思ひ定め候ひけるかによつて、遂に攝州湊川にて討死仕り候了

京都嵯峨の大覺寺は後宇多天皇との御關係深く、この御皇統を大覺寺統と稱し奉る。また後龜山天皇は、元中九年此所にて後小松天皇に神器を御譲りになつた。



大覺寺客殿

んぬ。其の時正行十三歳に罷りなり候ひしを合戦の場へは伴はで河内へかへし、死に残り候はんずる一族を扶持し朝敵を滅ぼし君を御代に即け進らせよと申し置きて死にて候。然るに正行正時已に壯年に及び候ひぬ。此の度我と手を碎き合戦仕り候はずば、且つは亡父の申し遺言に違ひ且は武略のいふかひなき謗に落つべく覺え候。今度師泰に懸け合ひ身命を盡し合戦仕つて、戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らん爲めに參内仕つて候。(太平記)

⑤ 京都御還幸 吉野朝廷は一時京都回復のこと

後龜山天皇

京都御還幸

元中九年  
皇紀二〇五二年

もあつたが諸忠臣も多く歿し勢も振はなくなつた。後龜山天皇の御時、足利義満は天皇に京都還幸を奏請して聽され、天皇は京都に御還幸あり御父子の禮を以て神器を後小松天皇に傳へ給うた。

元中九年(1365)  
永祿二年(1359)

第六篇 中世 第三期 室町時代 (後龜山天皇御還幸より信長入京まで)

第二十四章 室町幕府の創立

① 室町幕府の創立 後小松天皇の御代になつて、足利義満は征夷大將軍となることを得たので、足利氏の幕府はこゝに始まつた。それ

までは尊氏も義詮もともにみだりに征夷大將軍を稱してゐたに過なかつた。義満は勢威強く、京都室町に壯麗な邸宅を營み、幕府を利こゝに置いた。これを室町幕府といふ。

② 室町幕府の職制 室町幕府の組織は、將軍満の下に、管領があり、功臣の斯波・細川・畠山の三家がかはるがはる任ぜられ、また侍所があつてその長官の所司は山名・赤松・京極・一色

室町の邸宅

義満の室町の邸宅には、花を多く植ゑたので花の御所、又は花管といつた。

幕府の組織

三管領①  
斯波・細川・畠山  
四職②  
山名・京極・赤松・一色

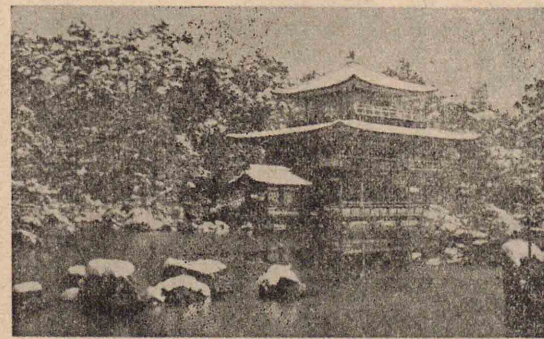


地方政治③  
守護・地頭  
關東管領  
九州探題  
奥羽探題

圖説  
京都市の西北  
部、衣笠山麓鹿  
苑寺(金閣寺)の  
内にある。

の四家から任ぜられる。これらを三管領四職といった。③地方は、諸國に守護地頭がある。重要な所である鎌倉には關東管領、九州と奥羽にはそれぞれ探題があつた。これらの諸職は、概ね世襲であつたので、しだいに権力を増すものができた。

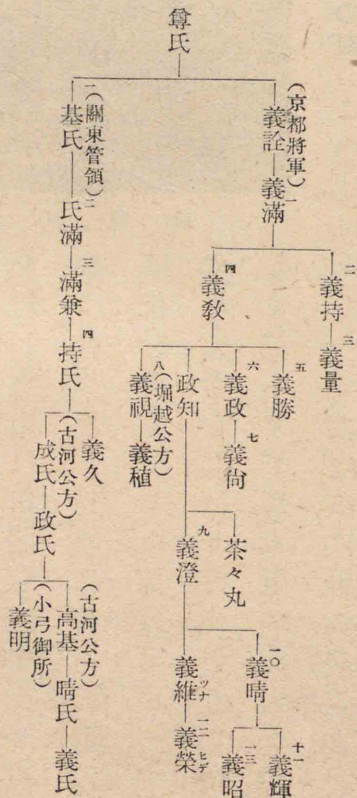
●義滿の驕奢 義滿ははじめ強臣を抑へ幕府の威權を伸張したが、のち太政大臣に任ぜられ勢にまかせ、政治を怠り、京都の北山に華麗な別荘を營み、そのうちに金閣を造つて世を驚かせ、驕奢に耽つた。



金閣

義滿の北山の別荘は、諸大名に課し、巨萬の費を以て造られ、豪奢を極めたものであつたが、今は金閣と庭園とを留めるに過ぎない。金閣は三層の樓閣で檜皮葺の屋根が緩やかな曲線を描き、幽寂な庭園と相應じて極めて優美輕快な外觀を呈してゐる。上層の外には漆を塗り、金箔を押ししたことから金閣といはれる。

【足利氏略系】



第二十五章 室町幕府の衰運

●權臣の跋扈 足利氏は尊氏の時から地方の豪族等の力をかるとが多く、豪族等の權勢が強かつたので、これが永く禍の因をなしてゐた。義滿の頃には十一ヶ國を領有してゐた。④山名氏清が反き、また

明德の亂④

第二十五章 室町幕府の衰運

8  
2170  
100

應永の亂 ③

永享の亂 ④

嘉吉の變 ①

下剋上

徳政



足利義満

周防の ③ 大内義弘も關東管領の足利滿兼と通じて兵を擧げた。四代將軍義教は果斷の性質で關東管領の ④ 足利持氏の專横を抑へたが自分は權臣 ⑤ 赤松滿祐のために弑せられた。これから將軍の威權が衰へて次第に下剋上の風をなした。

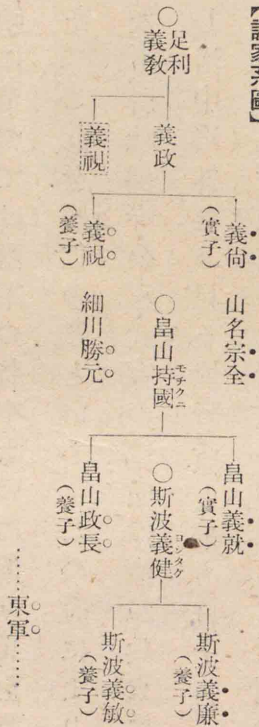
●義政の逸遊 六代將軍義政は好んで土木を起し、東山に銀閣を建て、日々風流を弄び、逸樂に耽つた。爲めに幕府の財政が窮乏すれば税を重くし、また徳政といつて、貸借を破棄する惡令をしはしば出したので人心はますます荒み、すでに大亂の兆があつた。

●應仁の亂 この時にあたつて、義政には弟の義視と、實子の義尙とが將軍家相續の争を起し、重臣細川勝元は義視を援け、山名宗全は義尙を援け、互に味方を集め黨を結び遂に戰を開くに至つた。

諸家の相續争ひ

これは京都眞如堂縁起に載せられた應仁合戰の繪である。この縁起は應仁の亂から遠くない大永四年に成つたもので、これによつて合戰の實況を想見することが出来る。

【諸家系圖】

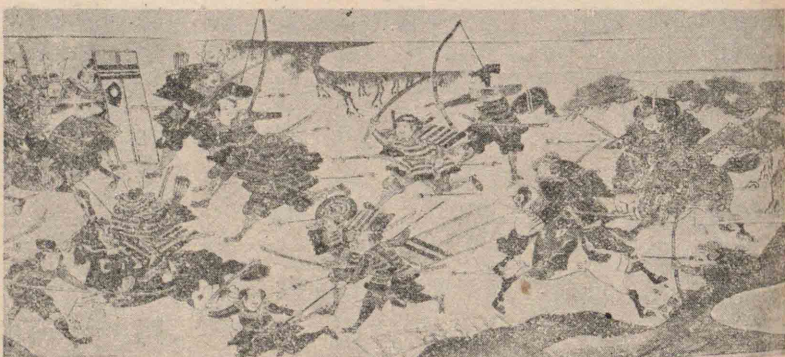


將軍義政は、はじめ子かなかつたため、弟義視を養つて將軍としようとしたが、のち夫人富子は義尙を生んだ。同じ頃昌山氏にも養子政長と實子義就との間に家督の争ひがあり、斯波氏でも義敏、義廉の間に争ひがあつた。勝元は義視をたすけて、政長、義敏と結び宗全は富子とともに義尙を立てようとして、義就宗廉を援いて黨を結んだ。

應仁の亂始まる  
應仁元年  
紀元二二七年

戰亂は後土御門天皇の應仁元年正月にはじまり、勝元は京都の東に陣し、宗全は西に陣

第二十五章 室町幕府の衰運



應仁合戰圖



亂終る

文明九年

皇紀二二三七年

亂の結果

し、兩軍の兵二十餘萬、戦を續けること十一年にも及んだ。この間に宗全も勝元も相ついで卒し、義政も義尙に將軍職を譲り、文明九年の頃に至つては、兩軍の將卒も戦に倦み、兵を收めてそれぞれ國に歸つた。これを應仁の亂といふ。この亂により京都は久しく戰の巷となり、神社、佛寺、公家、武家の第館は概ね兵火にかかり、住民は多く流亡し、洛中洛外たゞ見る焼野原と變りはてた。これより幕府の威令全く行はれず、地方には諸侯が割據して所謂戰國時代となつた。

### 第二十六章 室町時代の外交

元と交通

僧侶・商人 ①

天龍寺船 ②

●元明との交通 ①文永・弘安の役の後、我が國と元との間には、わづかに僧侶商人が往來したに止まつたが、②足利尊氏は後醍醐天皇の御冥福を祈る爲、天龍寺を建て、その費用を得ようとして天龍寺船といふ貿易船を元に送つた。③後義満は利を求めて元の後に興つた

明との交通

義満 ③

永樂通寶 ④

僧侶畫家入明 ⑤

明と交通したが、子義持は體面を重んじてこれと絶つた。しかるに義教、義政はまた利益のため貿易を開いた。④かくて明の通貨永樂通寶が多く輸入せられ、⑤僧侶畫家の彼の地に入つてその文物を傳へたものもあつた。

⑥これよりさき、鎌倉時代の末頃か

邊民 ⑥  
勘合符 ⑦

明の成祖の永樂

年間に鑄造した

銅錢船載せられ

我が國內に流通

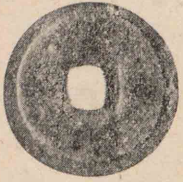
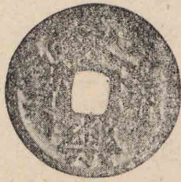
し、永樂錢又は

永錢と呼ばれ物

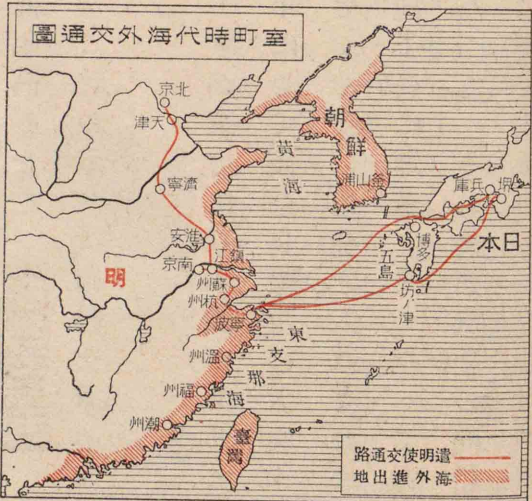
價もこれを標準

として定める有

様であつた。



永樂錢は、鮮支那の沿岸にいたり、わが邊海の民が、朝鮮支那の沿岸にいたり、諸所に活躍したが、この時代にはいよ／＼盛んとなり、遠く南洋の方面にまで出るものも少なくなかつた。⑦それゆゑこの頃の貿易は勘合符といふものを得て渡航することを定めた。その勘合符は大内



大内氏が朝鮮との通商の勘合符に用いた銅印で文字は「通信符」を半切したものである。

邊民

邊海の民の外國に活躍するものが、八幡大菩薩の船旗を立てたものが多かったから支那では八幡船などといつた。

氏がながく掌つてゐた。

●朝鮮との關係 元寇の後、高麗との通商も義満の頃から漸く多くなつた。後高麗は沿岸に進出する

我が邊民のため苦しんだが、今の李王家の祖、李成桂

は人望を得て、遂に後龜山天皇の元中九年、高麗を亡

し、國を朝鮮と稱し、漢城(京城)に都した。これから我に修好を求め、交

通もしげくなつた。

●歐人の來航 歐羅巴では、マルコ・ポーロが東方に日本國があるこ

とを傳へた。それから凡そ二百五十年にして、後奈良天皇の天文十二年に、葡萄牙人が初めて日本の土地をふんだ。葡萄牙人はこれまで印度には來てゐたが、この年大隅の種子島に漂着し、その携へてゐた鐵砲を始めて我國に傳へることになつた。その後、西班牙の商船も來航し、ともに貿易を營んだ。彼等の齎した珍しい品物は我が



圖の符合勘

鐵砲の傳來

天文十二年  
皇紀二二〇三年

天主教の傳來

天文十八年  
皇紀二二〇九年



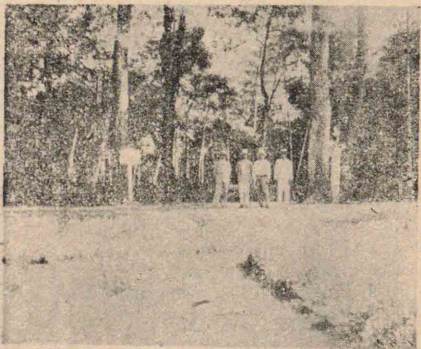
ルエイヴザ・コスシラフ

國民に非常に歡迎を受けたが、中にも鐵砲は忽ちに國內にひろがり、新しい武器として戦争に用ひられた。

また天文十八年にキリスト教の宣教師西班牙人フランシスコ・ザヴィエルは

薩摩に渡來し、始めてその教を傳へた。當時我が國ではこの教を天主教又は切支丹宗と稱し、しだいに各地に布教せられることとなつた。

キリスト教は、はじめ九州に信者を多く得、中にも豊後の大友義鏡(宗麟)肥前の有馬晴信、大村純忠等は熱心な信者で、後に、使を羅馬法王のもとに遣した。この使者には伊東祐兵(滿所 Mameo)ほか二人のいづれも十六歳以下の少年が選ばれ、天文十年に日本を出で、二年の後、ローマに達し、法王に謁して、信書を呈し、八年目に歸



地生誕所滿東伊

宮崎縣兄湯郡都於郡町は伊東氏累代の居城のあつた所で、今圖に見るごとく、城址に伊東滿所の誕生地と記された標柱が立つてこれを記念してゐる。

國した。これ實に我が國人がヨーロッパの土地を踏んだ最初である。

### 第二十七章 室町時代の文化

●文化の傾向 京都には朝廷の御坐します外に、幕府も京都にあつたので、統一のある文化が榮え、しかもその文化は公家・武家・僧侶の間のみならず、庶民の上にも及ぶやうになつた。幕府には紛亂が斷えなかつたが、經濟方面では貨幣の流通も稍見られ、國民の間に商業が進んで來た。かくて文化が一般に國民の間に弘く及ぶやうになつた。



蓮如

●佛 教 義滿をはじめ代々の將軍や武將には禪宗を信ずるものが多く、禪宗は大に行はれ、疎石(夢窓)などの有名な僧侶が多く出た。民間では浄土宗・一向宗が流布

疎石

五山

し、法華宗もまた近畿地方の布教につとめた。一向宗には義政の頃蓮如(蓮如)が出て、本願寺の勢力は諸侯をも凌ぐさまとなつた。

義滿のとき、京都と鎌倉とにそれぞれ大寺を選んで五山を定めた。京都の五山は南禪寺(五山の首)・天龍寺・相國寺・建仁寺・東福寺・萬壽寺であり、鎌倉の五山は建長寺・圓覺寺・壽福寺・淨智寺・淨妙寺をいふ。これ等諸寺から名僧を出し、この時代の學問はまたこ

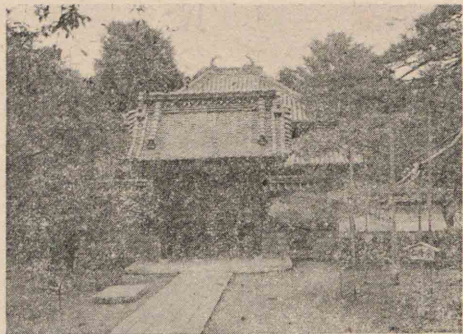
こを中心として興つた。

●學問文學 學問は主に僧侶がしてゐた。

殊に禪宗の五山には學問・詩文を好くするものが多く、世にこれらを總稱して五山文學といつた。僧侶のうちには將軍の政治外交の顧問となつて重く用ひられ、また明に渡る使となつたものがある。しかしこの時代にも公卿のうちには太政大臣關白一條兼良(カネヨシ)は和

五山文學

●圖 足利學校  
足利學校は下野國(栃木縣足利市)にあり、今も聖堂があり古書を保存してゐる。



足利學校

一條兼良

上杉憲實

連歌  
俳諧  
謡曲  
狂言

東山時代

雪舟は小田氏で名を等揚といひ、應永二十七年備中に生れ、文龜二年八十三歳で歿したといひ、或は永正三年八十七歳まで長壽を保つたとも傳へられてゐる。

漢の學に通じ、識見があり、武人には上杉憲實があつて、足利學校を再興し、金澤文庫を修理した。

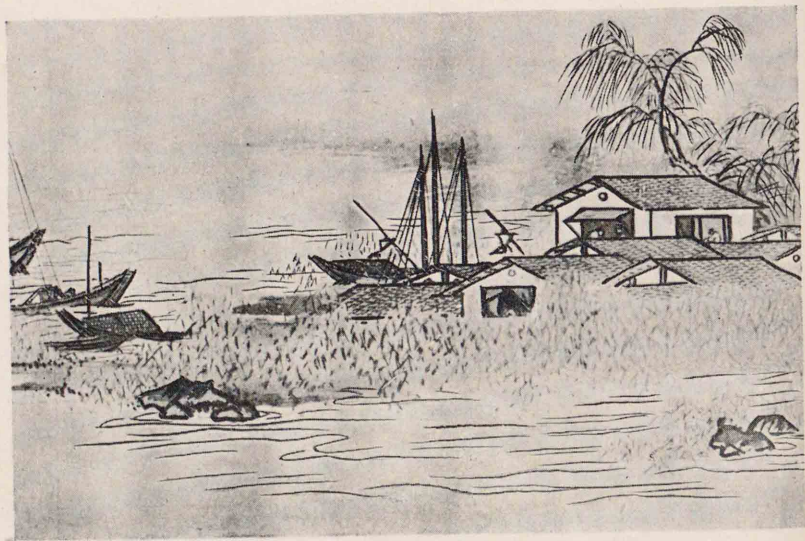
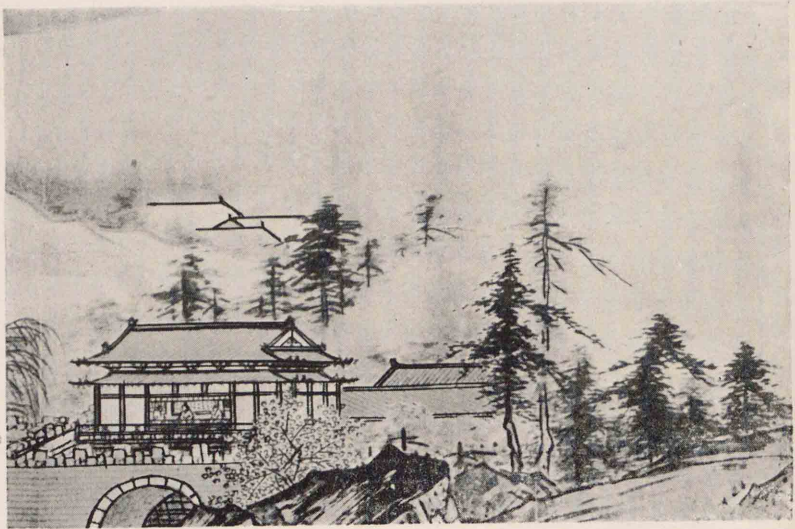
和歌は衰へたが、連歌が發達し、俳諧などが興つて、ひろく武士や庶民の間に行はれるやうになつた。謡曲や狂言がこの時代の文學として特に發達した。

④美術工藝 將軍義政は、政治を顧みず、東山に別莊を營み、風流の生活に耽り、書畫骨董を愛翫したので、この頃は美術や工藝が進み、名人が多く出た。この時代は東山時代と特に呼ばれることがある。



雪舟

繪畫は、雅味、氣品のある墨畫が榮え、義政のころに出た雪舟は、山水畫では古今に比を見ずといはれるほどである。佛畫には明兆が出て、兆殿司といはれ、大作を多く遺した。大和繪には、土佐光信があつた。光信の女婿が



雪舟筆山水圖

建築  
書院造  
庭園  
彫刻  
後藤祐乘  
能樂  
能面  
陶器  
漆器

雪舟は小田等揚といひ、備中赤濱の人である。十二、三歳の頃、寺に入つて僧となつた。壯年に至つて京都相國寺の洪徳禪師の弟子となり、畫人周文に師事して畫を學んだ。後、應仁の初め明に渡つて天童山に上り、參禪の傍ら畫道をみぎいた。歸國後周防山口の雲谷寺や石見益田の大喜庵等に住し、後柏原天皇の御代に八十餘歳で歿した。

雪舟の畫は如拙・周文等の畫風をつぎ、宋元の水墨畫の日本化に一步を進めたもので、筆致雄渾で氣韻に富み、山水・人物等すべてにすぐれてゐたが、殊に山水畫に於て古今獨歩と稱せられる。

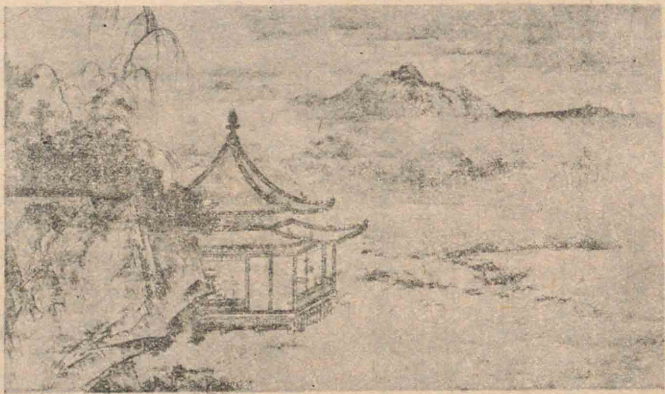
この圖は毛利公爵家所藏の山水畫卷の一部で、雪舟六十七歳の筆である。

野元信は、和漢の長所を併せて新に狩野派を開き、後世長く榮える基をなした。

建築には寢殿造に武家造を加味した書院造が生じ、その後の住宅の基となつたが、これとともに庭作りの術も發達し、相阿彌はこの道の達人と云はれた。

彫刻は一般に衰へたが、金屬彫刻には名人、後藤祐乘があり、又能樂の流行に伴うて、勝れた能面作家も出た。茶の湯の流行につれ陶器の製法も進歩し、漆器や蒔繪の技も精巧を極め、當時我が國から支那への重要な輸出品となつてゐた。

⑤ 風俗趣味 この時代は、住宅では禪宗の寺院にある玄關などを附



狩野元信筆山水圖

素襖  
肩衣  
茶湯  
插花  
香合

けた建築が行はれ、茶室風の瀟洒で氣品のあるのがよろこばれ、また石や樹木の配置に工夫をこらした庭園が発達した。衣服には武士等は多く素襖を着たが、また肩衣をつける風などがこの頃おこつた。趣味の上では茶湯、插花、香合などが流行し、今日の國民の間に行はれる技藝のもとをなした。

### 第二十八章 群雄の割據

細川氏  
三好氏  
松永氏

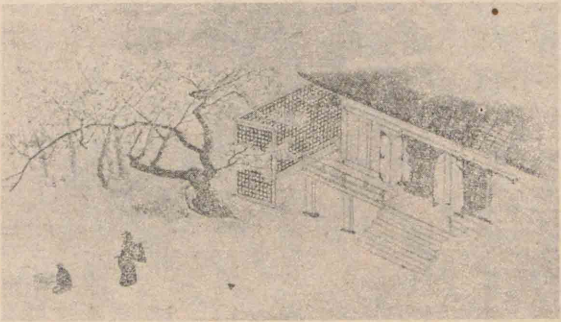
●幕府の無力 應仁の亂後、幕府の威令は全く地に墜ち、たゞ將軍義尙がこの勢を挽回しようとなつたが、志を達し得ないうちに年若く陣中に薨じた。その後は幕府の權力は管領細川氏に移り、細川氏もまたその臣下三好長慶に實權を奪はれ、三好氏の權も更にその家臣の松永久秀に移り、次第に下剋上が世の風となつた。

●皇室の御式微 かくて幕府がその無力を暴露してからは朝廷を

弼けたてまつることができず、後土御門天皇から正親町天皇に至る四代の間は、天下が亂れに亂れて、おそれ多くも皇室は御式微にわたらせられ、朝廷の御儀式に事を缺かせられる御ありさまで、皇居は荒

れはてて、賢所の御燈明は、くづれた御垣の外からも拜せられたと傳へられる。

川端道喜「家の鏡」の一部



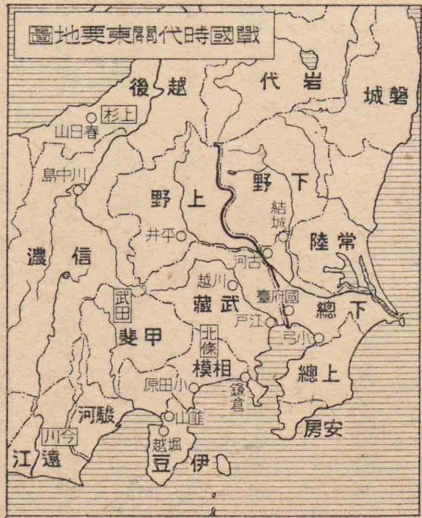
内裏へ御供進の圖

かゝるうちにも、天皇はつねに民のために御心を費させ給ひ、民はまた皇室の御ために盡しまつるまごころの数々が世にもあらはれて、ここにも比類なき我が國體がよく窺はれる。  
百五十五代 後奈良天皇の天文九年のころ、天下に疫病が流行し、多くの民がこれに罹つたとき、天皇は國民のためいたくなげかせ給ひ、御みづから般若心經を寫し、醍醐の三寶院(京都見)に納め給うて、御祈願をこめられたことがある。  
京都の御所の近くに住める、道喜といふ粽を商ふ者があ

つて、折々の供御を上つて忠誠をつくしてゐたが、正親町天皇の時、内裏の御垣の修理に力を盡し、のち織田信長豊臣秀吉から賞せられた。一家の鏡は道喜が御垣の築造にあづかり供御を奉ることを描ける圖で、その子孫に傳へてゐるものである。

●諸國の新形勢 地方では諸國の守護等が幕府の命令をきかず、各地に割據して互に争ひ、從來の名族は概ね衰亡し、實力あるものがこれに代り、地方の狀況が著しく變つてきた。

●關東地方 鎌倉では、關東管領の實權はその執事である上杉氏の手にあつた。上杉氏は、足利持氏の子成氏を迎へて關東管領としたが、成氏は上杉氏と争ひ、上杉氏に攻められて下總の古河(千葉)に移つた。ここに於て上杉氏は義政の弟政知



關東地方要地圖  
黒線は大體兩公  
方の勢力の境界  
線を示す。

古河公方

堀越公方

山内  
扇谷

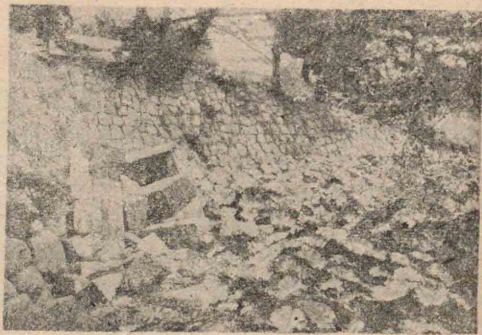
●神奈川縣小田原  
町にあり、北條  
氏が豊臣秀吉の  
ため滅され、城  
も陥り、後には  
徳川氏が領した  
ことがある。

北條早雲

北條氏綱

北條氏康

を京都から迎へ、伊豆の堀越(縣海)にその居館を置いて關東管領とした。そこで關東管領の家は二つに分れ、古河堀越の兩公方が對立し、諸將もそれぞれ二つに分れて相争つた。これよりまへ、上杉氏も山内扇谷の兩家に分れて内争を續けてゐたので關東地方は全く混亂に陥つた。



小田原城址

この頃駿河の今川氏の客將に伊勢長氏があつた。大志をいだき、堀越公方家の内紛に乗じて伊豆を取り、氏を北條早と改め、入道して早雲といつた。ついで相模の小田原を奪つてこゝに據つた。その子氏綱、孫氏康、いづれも智勇に勝れ、兩上杉家や古河公方



北條早雲

上杉氏  
長尾氏



武田信玄

上杉謙信

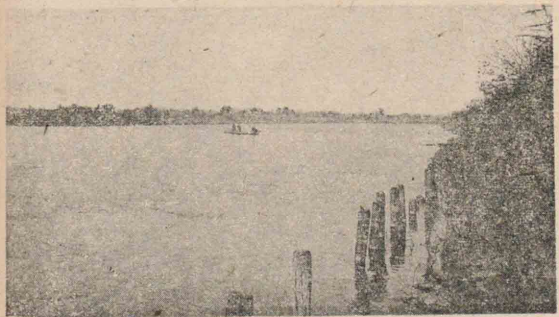
謙信は流れの早い犀川をこの邊で夜中に渡つて向ふ側に見える川中島に進出し八幡原に陣する信玄の陣屋に斬り入つたといはれる。



上杉謙信

武田信玄

と戦つた。この頃甲斐には武田信玄(晴信)があり、沈着にして智謀にすぐれ、しきりに信濃を侵



報聲嶺の渡し

川中島の戦

した。信濃の村上義清等は敵しかねて援を謙信に求めた。これから兩雄屢々川中島(長野縣)で戦を交へたが、勝敗は遂に決しなかつた。

その後謙信は北國の大部分を取り、信玄は駿河と上野とに勢を伸ばし、關東の北條氏と三雄鼎立のありさまとなつた。

今川義元

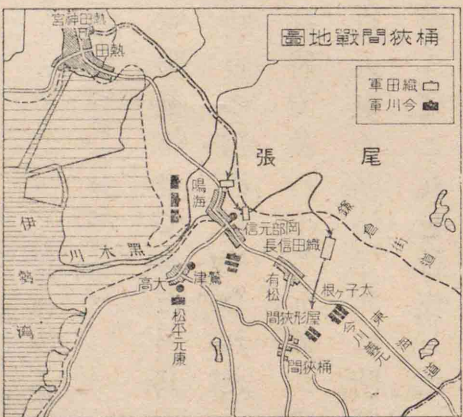
織田信長

桶狭間の戦

永祿三年  
皇紀二二二〇年

つて三河をも併せ、勢に乗じて京都に上り天下に號令しようとし、永祿三年尾張に攻め入つたが、桶狭間(愛知縣)の一戦に織田信長に破られ討死した。これから今川氏は急に衰へ遂に信玄に滅ぼされた。

桶狭間の戦 信長が突撃して太子ヶ根山を下つて、義元の陣に攻め入つた様子を、信長公記に次のやうに述べてゐる。





「空晴るゝを御覽じ、信長槍をおつ取つて、大音聲を上げて、すはかゝれかゝれと仰せられ、黒烟立て懸るを見て、水をまくるが如く、後へくわつと崩れたり。弓槍鐵砲のぼりさし物算を亂すに異らず。今川義元の塗輿も捨ててくづれにげにけり。」

中國  
大内義興  
大内義隆

⑦ 中國地方 中國では周防の大内義興が富強を誇つてゐたが、其子義隆に至り驕奢に流れ、武備を怠り家臣陶晴賢の爲に弑せられた。

毛利元就

そこで義隆の部將安藝の毛利元就が義

嚴島の戦

弘治元年

皇紀二二一五年

兵を擧げ、後奈良天皇の弘治元年に晴賢を嚴島(廣島)に襲うてこれを討伐した。

尼子氏



毛利元就

元就はやがて大内氏の舊領周防・長門の諸國を收め、更に出雲の尼子氏をも滅して中國の大半を領有するに至つた。

四國  
長曾我部氏

九州  
大友氏

龍造寺

⑧ 四國九州の形勢 四國では土佐の長曾我部氏が獨り威を振ひ、九州では豊後の大友氏、肥前の龍造寺氏、薩摩の島津氏が勢力あり、中に

も島津氏は最も強大の聞えがあつた。

奥羽  
最上氏  
南部氏  
秋田氏  
伊達氏

⑨ 奥羽地方 奥羽地方では葦名・最上・南部・秋田・伊達等の諸氏が互に争ひ、伊達氏が最も勢を得てゐた。

織田信秀  
毛利元就  
北條氏綱  
本願寺

⑩ 諸氏の勤皇 諸國に豪族が割據し、相争つてゐたが、皇室の御事を知り奉つては、みな王事につとむべきことを思つたので、その中にも尾張の織田信秀は、京都よりの御使をうけ忠勤を誓ひ、中國の毛利元就は朝廷の御費用を献じ奉り、伊豆の北條氏綱や其の他本願寺等も奉公の志が深かつた。

三條西實隆  
山科言繼  
立入宗繼

京都の公卿にも三條西實隆・山科言繼や、また立入宗繼などが地方の豪族を説いて勤皇の志を鼓吹したので、諸豪の強大なものも早く天下を平かにし京都に上つて宸襟を安んじ奉らんことを思つたのである。

永祿十一年(三三六)―  
慶長三年(三五八)

第七篇 中 世 第四期 安土桃山時代 (信長入京より  
秀吉薨去まで)

第二十九章 織田豊臣二氏の統一

●織田信長の上洛と天下統一運動 應仁の亂後久しく群雄割據の有様であつた世の中にも、年を経て次第に統一の氣運が動いて來た。



織田信長

この時にあたり織田信長は果斷と勇略と地の利とを以て、この大事業の基礎をつくり、豊臣秀吉はその後をうけてこれを完成した。この時代を安土桃山時代といふ。信長は正親町天皇の勅命をかしこみ京都に上ることをはかり、永祿十一年に將軍

義輝ヨシテルの弟義昭ヨシアキを奉じて京都に入り、義昭を將軍職につかしめた。ついで信長は、元龜元年徳川家康とともに、越前の朝倉義景、近江の

織田信長

信長の入京

永祿十一年  
皇紀二二二八年

近畿平定

姉川の戦  
元龜元年  
皇紀二二三〇年

足利氏の滅亡

天正元年  
皇紀二二三三年

石山本願寺

安土城落成

天正四年  
皇紀二二三六年

安土時代

三方ヶ原の戦

元龜三年  
皇紀二二三二年

淺井長政の聯合軍と姉川(關原)に戦つて大いにこれを破り、翌年には比叡山延暦寺を焼拂つて、横暴な僧徒を威壓した。かくて信長の勢は、入京以來日に盛んになるので、將軍義昭はこれを忌み、信長を除かうと企てた。そこで天正元年信長は却つて義昭を逐つた。室町幕府は義満以來十三代凡そ百八十年で滅んだ。

●安土築城 その後信長は今の大阪にあつた石山本願寺と戦をつづけたが、正親町天皇の勅によつてこれと和睦し、本願寺はその地を退いたので、近畿の地は信長の勢力の下に立つた。これよりまへに、信長は近江の安土に莊麗な城を築いて、こゝを中心として天下に號令せんと志した。そこで信長のころを安土時代ともいふ。

●諸氏の上洛計畫と其没落 そのころ地方の豪族等は、また京都に上らうと企てたものが多かつた。まづ武田信玄は、多年訓練した精兵を率ゐて遠江に進出し、元龜三年、三方ヶ原で家康の軍と信長の援軍

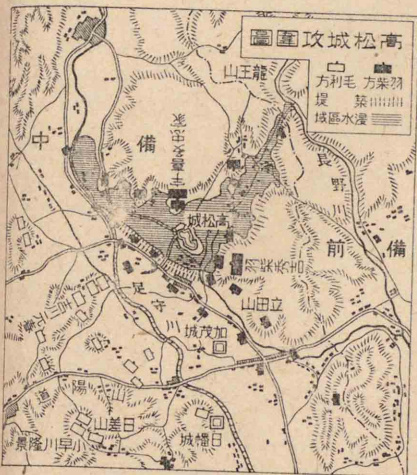
長篠の戦  
 天正三年  
 皇紀二二三五年  
 武田氏滅亡  
 天正十年  
 皇紀二二四二年

とを破り、なほ進んで三河に入つたが、偶病んで陣中に歿した。子勝頼は血氣にはやり、天正三年、織田・徳川の聯合軍と長篠(愛知縣)に戦つて大敗し、ついで同十年、信長に攻められて滅亡した。上杉謙信も上京を策し、天正五年には越中能登を略し、翌春大舉して西上を決行しようとしたが、出發に臨んで俄かに病歿し、その後は上杉氏も衰へた。

その他の諸氏も多く地の利に恵まれず、志を伸ばすことができなかつた。

④ 中國征伐と本能寺の變 中國では毛利元就の歿後、孫輝元(元就の嫡子)が嗣ぎ、一族よく團結して勢ますく、強く、石山本願寺や、また遙かに武田・上杉の諸氏と通じて、信長に對抗してゐたが、信長は羽

毛利輝元



高松城の水攻  
 天正十年

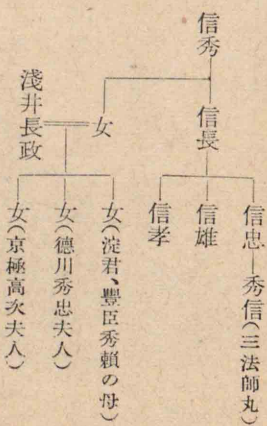
本能寺の變  
 天正十年

山崎の合戦  
 天正十年

柴秀吉をしてこれを伐たしめた。秀吉は軍を進め、天正十年には備中に入り、高松城を水攻にした。輝元等大軍を率ゐて來り援けたので、秀吉もまた信長に援軍を求めた。そこで信長は急に安土を出發し、京都に入り、信長は本能寺に長子信忠は妙覺寺に宿つた。時に明智光秀も兵を中國に進めることを命ぜられたが、丹波に於て俄かに叛いて本能寺を襲ひ、信長を弑し、信忠も自刃した。かくて信長の天下統一の大業は中途にして挫折した。

⑤ 秀吉の全國平定 秀吉は本能寺の變の報に接すると、直ちに毛利氏と和し、軍をかへして、光秀を山崎に討ち、次いで諸將と會して信長の繼嗣を定めた。しかるに秀吉の威名が俄かに加つたので、柴田勝家・瀧川一益等がこれを嫉み、織田信

【織田氏略系】



柴田勝家の滅亡  
天正十一年 ②

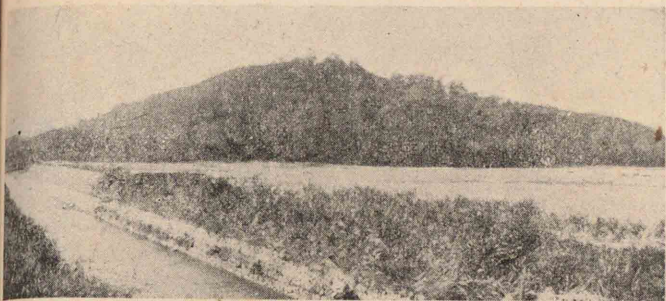
小牧・長久手の  
戦 ③  
天正十二年

四國征伐 ④  
天正十三年

九州征伐 ⑤  
天正十五年

小田原陣 ⑥  
天正十八年

奥州平定 ⑦



孝を擁して兵を挙げ、秀吉を除かうとした。秀吉は機先を制して勝家の軍を賤ヶ嶽に破り、進んでこれを越前に滅した。まもなく信孝は自刃し、一益も降つて、秀吉の名聲はますます揚つた。信孝の兄信雄も秀吉の威名を忌み、これを討たうとして徳川家康に援を求めたので、小家康は天正十二年尾張の小牧山に秀吉と對陣し、またその部將を長久手に破つた。間もなく山秀吉は信雄・家康と和した。その後秀吉は紀州・根來の僧徒を伐ち、また四國の長曾我部元親を降し、ついで北陸地方をも平定した。また天正十五年には自ら軍を率ゐて九州を征伐し、島津義久を降し、同十八年には大軍を以て小田原を圍み、關東の雄、北條氏を滅した。こゝに於て陸



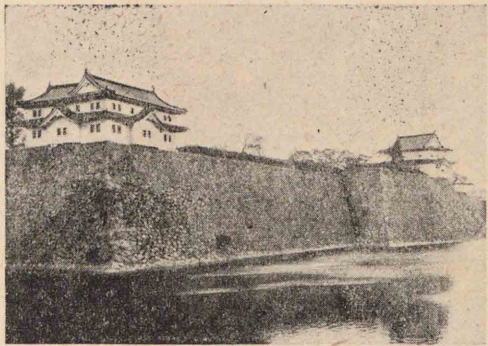
豊臣秀吉畫像

この畫像は、舊宇和島藩主伊達侯爵家の所藏にかゝるもので、秀吉の臣富田信廣が主君の薨後間もない頃に人をして描かしめたものである。筆者は詳かではないが狩野山樂と傳へられてゐる。眼光鋭く人にせまるものがあり、秀吉の風貌が躍如としてゐる。現存する秀吉の畫像中最もすぐれ、その眞を畫くものとせられてゐる。

大阪城の築城  
天正十一年  
皇紀二二四三年

天正十一年に秀吉が築いた大阪城で天守閣は、大阪落城の時焼失した。今は秀吉の創建のものに模して昭和年に再興した。

聚樂第行幸  
天正十六年  
皇紀二二四八年



奥の伊達政宗等も來り服し、天下統一の業は遂に完成した。實に應仁以來百二十餘年である。

これよりまへ、秀吉は諸大名に命じて宏莊堅固な大阪城を築かしめ、自らこゝに居つた。また堺伏見などの商家をもこゝに移したので、大阪はやがて天下第一の都市となつた。

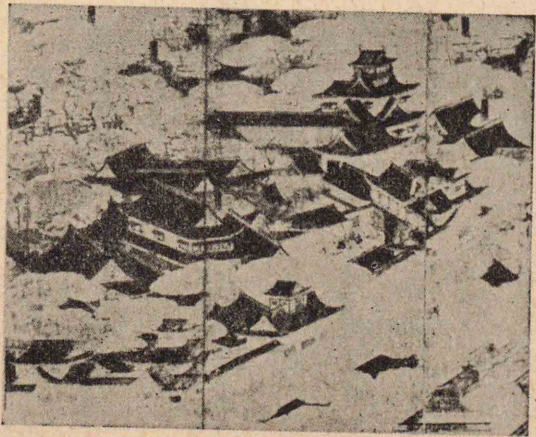
大阪城  
◎信長・秀吉の勤皇 信長・秀吉ともに尊皇の心深く、今までの武家政治の形をとらず、どこまでも朝臣として天下を治めようとした。信長は入京すると直ちに皇居を修理し、御料を増したてまつり、儀式の廢れた

のを再興し、公家の所領をも復した。秀吉もまた篤く朝廷を敬ひ、皇居の御修造、伊勢大神宮の御造營を行ひ、天正十六年には聚樂第ジュラクダイに後

秀吉の民政

陽成天皇の行幸を仰ぎ奉り、諸大名をして行幸に供奉せしめ、朝廷を尊信し奉るべきことを誓はせた。

⑦ 秀吉の政治 秀吉は度量が廣く、天下の英傑はみなその下に服した。秀吉はまた士民をよく愛撫し、或は北野に大茶湯を催して、貴賤の別なく風流の樂を共にすることなどをした。よく經濟に意を注ぎ、全國の土地を検して石高を定め、大判・小判を鑄造して貨幣の制を整へた。政治の上では五奉行を置いて政務を分掌せしめ、後、五大老を設けて大事を議せしめた。かくして全國統一の政治の實を擧げること努めた。



聚樂第

檢地

貨幣の制

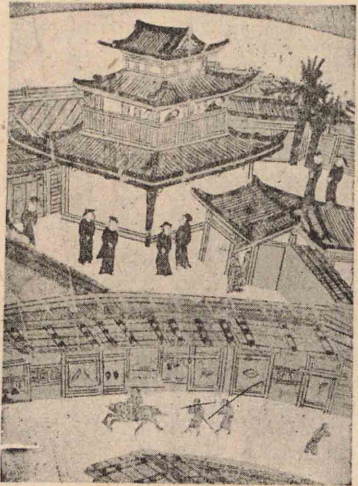
五奉行

五大老

第三十章 海外知識 秀吉の海外經營

① 信長とキリスト教

信長は近畿の地方を平定するにつけて、キリスト教の布教を許し、また宣教師から西洋の知識を得ようとした。京都並に信長の居城のある安土には南蠻寺が建てられ、安土には學校も設けられた。九州の大名の大友(後豊)大村有馬(前肥)の三氏が使をはる。羅馬法王のもとに遣したのは天正十年であつた。これらによつて外國に關する知識が大いに進んだことが知られる。秀吉はキリスト教の傳播には弊害がありとしてこれを禁止したが、その雄大な志は進んで海外の經營を計畫した。



南蠻寺の景

南蠻寺  
京都  
安土

遣歐使節  
天正十年

朝鮮役の由來

●朝鮮の役 天下が統一し、國民の活動が昌んとなつたので秀吉は我が國威をさらに海外に輝かさうとして、遠く使者を印度・呂宋(ライリツピン)高山國(臺灣)等にも送り、それぞれ入貢を促したが、特に朝鮮王に對してはその入貢を求むるのみでなく、王をして明の朝貢をも促さしめようとした。朝鮮王は明を恐れて命に應じなかつたから、秀吉はまづ朝鮮を征し、次いで明國を征伐しようと決心した。

文祿の役

文祿元年  
皇紀二二五二年



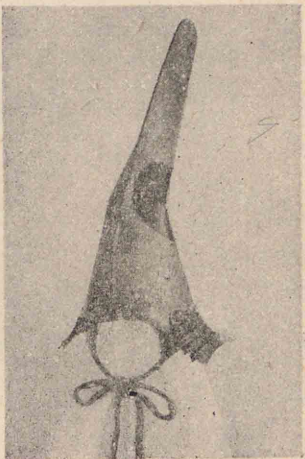
加藤清正 正清

●文祿の役 かくて後陽成天皇の文祿元年、宇喜多秀家を總大將とし、加藤清正、小西行長を先鋒とし、九鬼嘉隆、藤堂高虎等は海軍を率ゐ、海陸より大軍を朝鮮に向けた。我が軍は破竹の勢を以て京城を陥れ、朝鮮全土を風靡した。やがて明の援兵は大舉して來たが、小早川隆景等が碧蹄館に迎へ撃つて大にこれを破つた。

京都本因寺所藏のものにて、清正の像としては最も信ををくに足るものである。

碧蹄館の戦

加藤清正が着けた兜で、鉢の高さ二尺四寸。銀色の箔を押し、朱色の日の丸を左右に描いてゐる。十字槍ともにも知らぬものがない。今も徳川侯爵家(舊和歌山藩)に傳つてゐる。

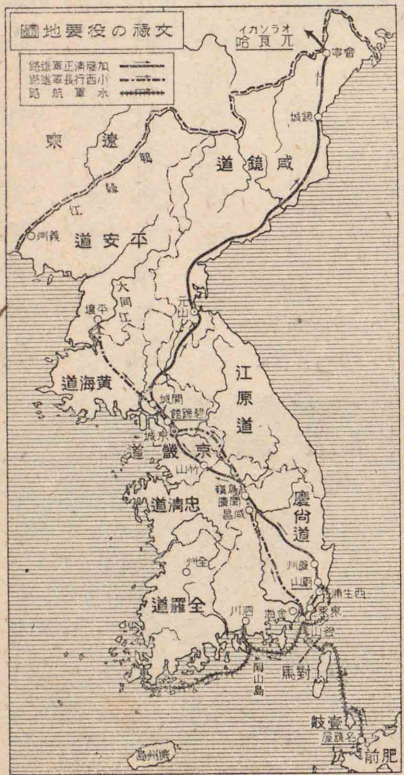


で、秀吉は大いに怒つて直ちに再征の令を下した。

慶長の役

●慶長の役 翌慶長

二年、小早川秀秋を總大將として我が軍は再び朝鮮に渡り、清正は蔚山に籠城し、敵の大軍をむかへ撃つた。このことがあつて諸



秀吉薨去  
慶長三年

朝鮮役の結果

將もみな奮戦したが、慶長三年八月秀吉は病んで薨じたので、遺命によつて諸軍相次いで引上げた。

この役によつて、我が武威は海外に揚り、國民進取の氣象を盛ならしめたこと、著しいものがあつた。

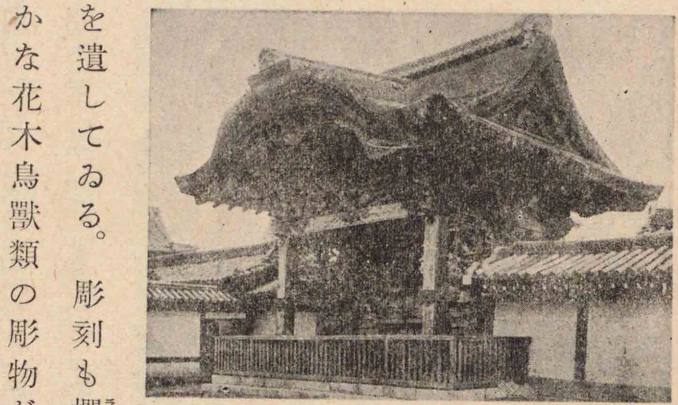
### 第三十一章 安土桃山時代の美術工藝

●文化の特色と美術工藝 この時代は諸國の群雄が互に相争ふの狀態から天下統一の氣運に向うてきたため、豪壯な氣風が大におこり、政治・軍事にも進取果斷を尙んだと同じく、建築・繪畫・工藝等みな豪快で潤達なものがよろこばれ、東山時代の閑寂な風尙と大いに異なるものがあらはれてきた。

●建築 信長の安土城、秀吉の大阪城・聚樂第・伏見城など宏壯なものが營まれ、諸大名もこれにならうてまた雄大な城邸宅を造つ

た。今日も諸地方に遺つてゐる城の趾などにも大規模のものが見られる。

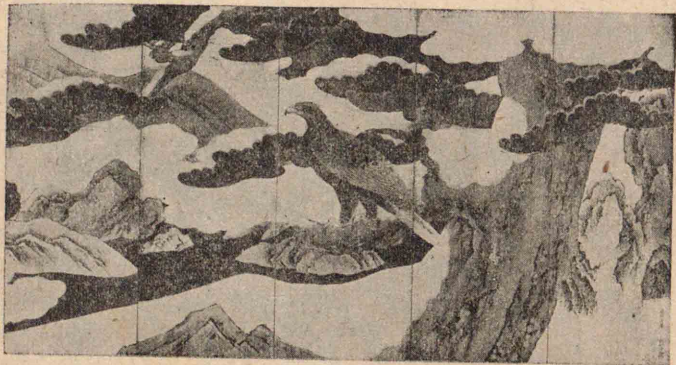
#### ●繪畫彫刻 繪



西本願寺唐門

畫には狩野永徳・同山樂・海北友松等が出で屏風や襖の畫に金碧の色まばゆいばかりの豪華な作品を遺してゐる。彫刻も欄間などに彩色の鮮かな花木鳥獸類の彫物が見られる。

●工藝 工藝も信長・秀吉の奨励によつて進歩し、甲冑武具の類の製作はこの時代に



狩野永徳の繪

狩野永徳  
狩野山樂

書院大廣間と共に桃山城の遺構を徳川家が寄進したものと云はれてゐる。

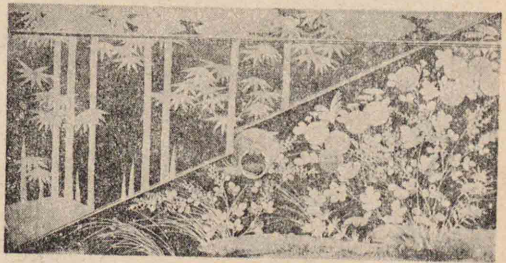
●圖説 構圖が大きく、金地の上に殘雪をのせる老松と岩石に、あたりを睥睨する猛鳥を配する。鷹の描寫は甚だしく寫生的になつてゐる。右下に「永徳眞筆永納證之」とある。東京美術學校藏。



千利休

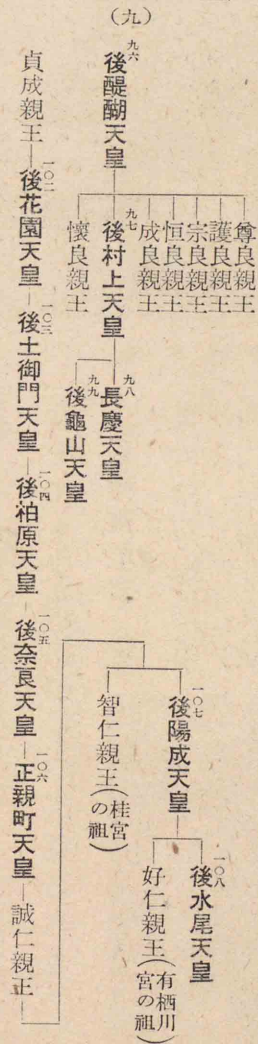
秀吉の夫人が建てた京都の高臺寺の佛殿の裝飾に金漆の蒔繪が施されており、同寺にも華麗なこの時代の蒔繪の器具が藏せられてゐる。世に高臺寺蒔繪といふ。

特に發達して、華麗なものが多く出來た。また茶の湯が盛んに行はれ、千利休がこの頃に出でて、茶道の法式がほゞ定まり、これから武士の間にも、民間にも大いに流行したので、茶器の製作も盛んとなつた。そのほか染織蒔繪の術が發達した。陶器には有田焼薩摩焼がこの時代からてきるやうになり、織物では京都の西陣が著しい進歩を見せ、金欄など精巧なものが製作せられた。



高臺寺蒔繪

皇室御系圖

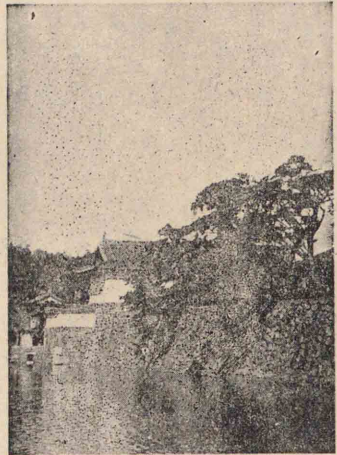


第八篇 近世 第一期 江戸時代前期 (秀吉薨後より) 享保元年(三三三)

第三十二章 德川家康 江戸幕府

德川家康 豊臣氏の天下統一の事業を承け繼いだものは德川家

三河の松平氏  
江戸城  
もと太田道灌が築いた城があつたが、家康は壯大な城郭をここに築造した。



江戸城

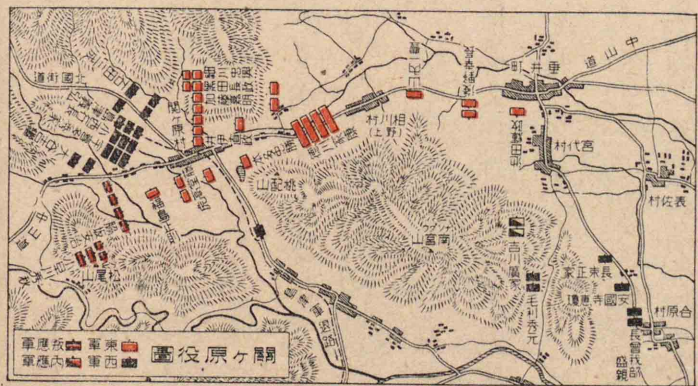
吉に屬し小田原陣にも従つた。北條氏の滅亡後はその舊領關東の地に封ぜられたので江戸城を修築してここに居たが、秀吉の薨後は、その遺言により前田利家と共に秀吉の遺子秀頼を助け、利家は大阪、

秀吉薨後の家康  
慶長三年  
前田利家

家康は伏見城にゐた。利家の薨後は家康の威望ひとり盛となつた。

●關ヶ原の戦

この形勢を見て、秀吉の信任を得てゐた石田三成は豊臣氏のため不利となることを憂へ、ひそかに上杉景勝と謀り、家康を除かうと企てた。かくて慶長五年景勝は會津(福島縣若松市)に在つて叛意を示したので、家康は大軍を率ゐて東國に向つた。この隙に乗じて三成は、家康の罪を鳴らして兵を挙げ、毛利輝元・島津義弘・宇喜多秀家・小西行長等加はる者が多かつた。家康は變を聞くと、一方景勝に備へて備中から引き還し、三成等の軍と大いに美濃の關ヶ原に戦つてこれを破つた。



關ヶ原戰の結果

この戦は實に天下分目の戦であつた。これにより徳川氏は豊臣氏に代つて天下の政權を掌握し、秀頼は攝河・泉三國を領する大名の地位となつた。さうして、秀吉の部將であつた三成・行長は斬られ、景勝等は領地を削られ、その他多くは家康の配下に立たなければならぬやうになつた。

●豊臣氏の滅亡

關ヶ原の戦後、豊臣氏は大名に過ぎなかつたが、なほ秀吉恩顧の將士がその背後にあり、大阪城に蓄へられた富力もまた大であつた。このことは家康の憂慮するところであつたが、たまく、秀頼が京都方廣寺の大佛を再興したとき、家康はその鐘銘の中に「國家安康」の文字があつたのを、家康を呪ふものであるとし、厳しく豊臣氏を責めた。大阪では家康の無法を憤つて、遂に慶長

石田三成

上杉景勝

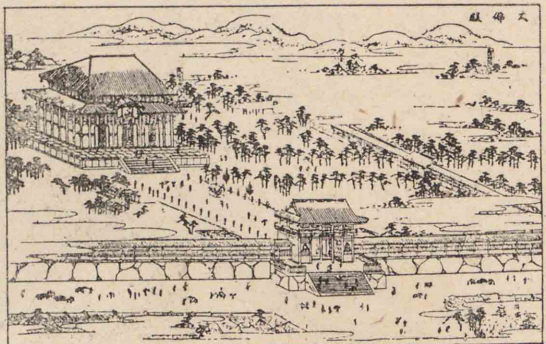
慶長五年

皇紀二二六〇年  
西紀一六〇〇年

京都七條東山にあつた。今此の地には秀吉を祀る豊國神社があり、昔の石垣が残つてゐる。

方廣寺大佛

鐘銘問題



部一の銘鐘び及殿佛大の前以治明



長野縣埴科郡松代町原氏所藏  
眞田幸村  
木村重成

冬の陣

慶長十九年  
皇紀二二七四年

最上屏風の一部  
で夏の陣の様を  
畫いたものであ  
る。

夏の陣

元和元年  
皇紀二二七五年

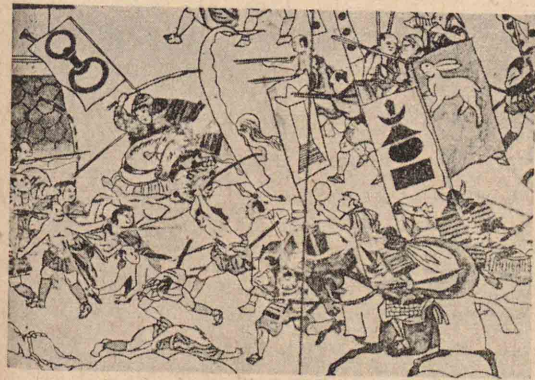
方廣寺大佛



十九年冬、兵を擧げたので、家康は秀忠とともに大軍を率ゐてこれを攻めた。この時、大阪方には眞田幸村、木村重成等がよく戦ひ、城も村また堅固で容易に陥らなかつたので、家康はひとまづ和を講じた。

これを大阪冬の陣といふ。しかし和陸の條件の實行について争が生じ、戦は再びその翌年、元和元年の夏に開かれた。この度は城の守がうすく、大阪方は敗れ、豊臣氏はこゝに滅びた。これを大阪夏の陣といふ。

秀吉は天正十四年京都東山の麓に方廣寺を建て、中に六丈三尺の木像盧遮那佛を安置したが、慶長



大 阪 陣 の 圖

元年の地震に破壊した。秀頼は再建を企て殆んど出来上つた時、誤つて火を出し、寺は焼けた。慶長十五年再び工を起して、更に金銅を以て佛像を造り、慶長十九年に至つて落成した。その八月三日、大佛の開眼供養をするはずであつたのを、鐘の銘文について物議が生じ、供養の式は家康から止めさせられた。方廣寺は、後、寛政十年の雷火によつて焼失し、今の方廣寺には、その鐘がのこつてゐる。

#### 四 江戸幕府の開設

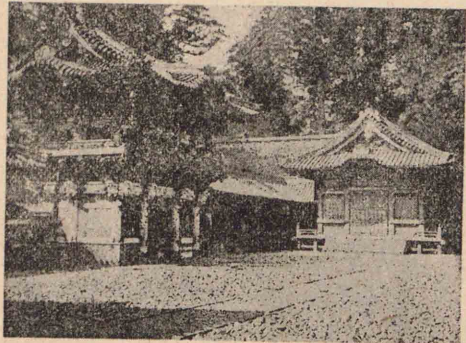
家康は慶長八年征夷大將軍に任ぜられ、幕府を江戸に開いたが、十年には職を子秀忠に譲り、駿府に退いた。しかし重要な政務はなほ自らこれを見た。元和二年家康薨じ、その後は、東照子秀忠よく父の遺業を守り、やがてまた將軍職を子家光に譲つた。家光は英主で、酒井忠勝、松平信綱等の賢臣を用ひ、幕府の組織はこの時代になつて確固たるものとなつた。

駿府

秀忠

家光

家光はことに東照宮を崇敬し、毎年日光社參を例とした。これは陽明門で世に日暮門といふ。



幕府組織  
大老  
若年寄  
寺社奉行  
町奉行  
勘定奉行  
大目付  
目付  
天領  
所司代  
城代  
奉行

幕府の組織 幕府は、將軍の下に老中ラウヂョウが政務を執り、若年寄が之れを助けた。時に應じて大老が老中の上に置かれることもあつた。また寺社奉行、江戸町奉行、勘定奉行があり、それぞれ寺社、江戸の市政、幕府の財政のことを掌つた。地方では天領と稱する直轄地には郡代、代官を置き、京には所司代、大阪、駿府には城代、長崎、山田等の要地にはそれぞれ奉行を置いた。

親藩

⑥ 諸大名に對する政策 大名には親藩、譜代、外様の區別があつた。

譜代  
外様

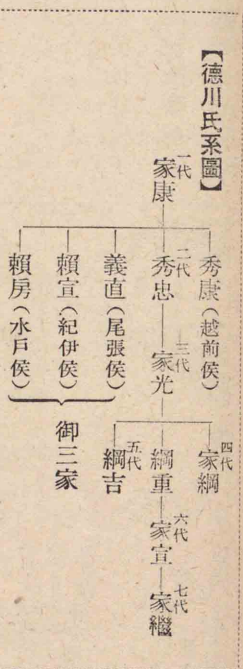
親藩は徳川氏の一族で大名となつたもの、譜代は三河以來徳川氏に仕へた舊臣の家筋、外様はもと徳川氏と同じく大名であつたのが後これに従つた家をいふ。親藩のうち尾張、紀伊、水戸を御三家といつた。幕府はこれら諸大名をば巧に配置して、互に監視し制肘せしめるやうにし、幕政には親藩、譜代のみ參與せしめた。また參勤交代の制を立て、年を定めて諸大名をして江戸に勤仕せしめ、武家諸法度を頒つて諸大名の行動を取締つた。

御三家

大名の配置

參勤交代

武家諸法度



### 第三十三章 海外諸國との交通 島原の亂

朝鮮  
支那

① 朝鮮及支那との關係 文祿・慶長の役の後をうけ、家康は朝鮮及び支那と平和に交りを結ばうとし、對馬の宗氏をしてそれまで絶えてゐた朝鮮との國交をもとのごとくにせしめた。しかし明はなほ交通することを承諾しなかつたが、貿易のため商船の來航は後を絶たなかつた。

葡萄牙  
西班牙

② 歐洲諸國との交通 これまでは歐羅巴の諸國のうち葡萄牙、西班牙の兩國人が主として我が國と貿易をしてゐたのが、この頃になつ

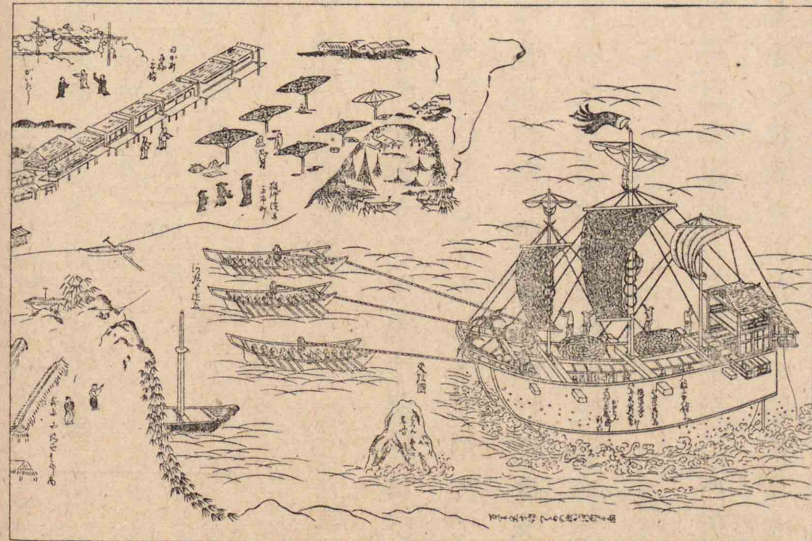
和蘭

ヤン・ヨーステン  
ウイリアム・アダムズ

これは交趾の日本町の圖で、茶屋四郎次郎が彼地に在った時寫したものとい傳へられてゐる。

て和蘭・英吉利が東洋貿易に力を入れ、葡萄牙・西班牙と競争するやうになつた。家康は九州に漂着した和蘭船の乗組員、和蘭人ヤン・ヨーステン、英吉利人ウイリアム・アダムズを江戸に召しよせ、これら兩人をよく用ひて海外の事情を知り、慶長十四年には和蘭人に貿易を許し、後、アダムズの願により英吉利人にもこれをゆるした。

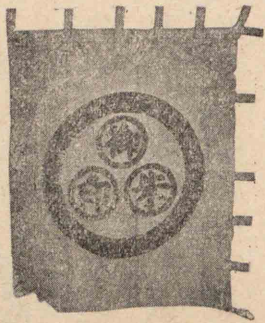
ヤン・ヨーステンは常時日本では、耶揚子といはれ、江戸に宅地を賜はり、俸祿を給せられた。今東京の馬場先門の八重洲



日本町人の圖

河岸はその舊地と云はれてゐる。ウイリアム・アダムズは我が國に歸化し、三浦按針と稱した。その江戸の邸宅は日本橋の按針町にあつたといはれる。(按針町は今の室町一丁目附近である。)

● 日本人の海外發展



御朱印の船旗

さきの時代から我が國人の海外に進出するものは少くなかつたが、徳川時代に入つてこの氣運は更に盛んとなつた。南の方では、高砂(今津)・阿媽(今)・呂宋(今)・安南(今)・暹羅(今)から瓜哇(今)等まで通商に出るものも多かつた。秀吉はこれらの渡航の船

には朱印のある免許狀を與へて保護したが、家康もこれに倣つた。世に御朱印船といはれる。家康はまた東方に西班牙の領地である新西班牙(今のメキシコ)のあることを知り、これに使を遣はし、伊達政宗は、支倉常長を伊太利の羅馬に遣はすことなどがあつた。

當時、歐羅巴人は南方諸國を根據として來るゆゑ、一般に南蠻人といはれた。日本人

御朱印船  
ノビスパン  
支倉常長

高砂  
阿媽  
呂宋  
シヤム  
ジャバア

の南方渡航者は暹羅・安南などに居住し暹羅には日本町ができた。駿河の國に生れた山田長政は暹羅に入り、武勇を以てその國の難を救ひ國政にも與つた。

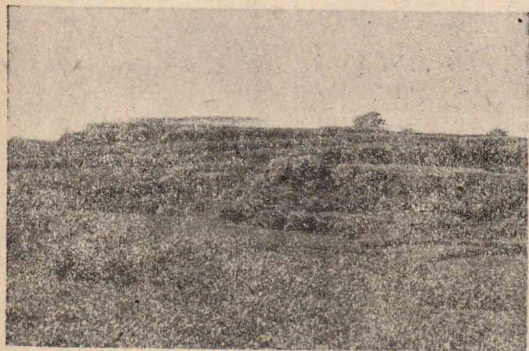


山田長政

④島原の亂 秀吉

のときに天主教は

禁ぜられてゐたが、家康もこれをうけつぎ嚴重に取締つた。家光に至つては、さらに一切天主教に關係ある書籍の輸入を禁じ、日本人の海外に移つた國人の歸り來ることも禁じてきびしい取締を重ねたので、寛永十四年九州の天主教徒は、島原半島の南端にある原城に據つて亂を起した。幕府は大軍を動か



原城址

家光  
鎖國

島原の亂  
寛永十四年  
皇紀二二九七年

和蘭人

寛永の鎖國  
寛永十六年  
皇紀二二九九年  
支那人  
朝鮮人

慶安の事件

保科正之

松平信綱

して、やうやくその翌年にこれを鎮定することができた。

⑤鎖國政策 幕府は島原の亂によつて、いよく禁教を嚴にし、寛永十六年には、すべての歐人の渡來を禁止した。たゞ和蘭人だけは、長崎の出島に居住せしめ、貿易を營むことを許した。これを寛永の鎖國といふ。これからは和蘭と、東洋の支那・朝鮮の國人ばかりが我が國に往來することになつた。

第三十四章 徳川綱吉 元祿時代

●將軍家綱 鎖國の後、幕府は國內の事に力を注ぎ、慶安四年家光が薨じ、子家綱四代が幼少で將軍職をついだ。この時由井正雪キシヨウ・丸橋忠彌マルハシチユミ等が相結んで徳川氏を倒さんとして亂を企てたが、事露シロはれて正雪は自殺し、忠彌は刑せられた。その後は、家綱の叔父保科正之ホシナマサユキがよく將軍を輔け、また名臣の松平信綱も賢明であつたから幕府の内もよく



保科正之

治まり、諸大名に對しても寛大な處置をとつた。諸大名の家臣がその主のために殉死することを禁じ、また諸大名が幕府に人質を納める慣例を廢止したのはこの時代である。

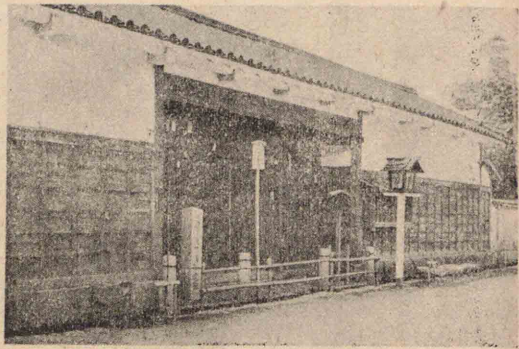
●將軍綱吉 家綱の後、綱吉は上野の館林

堀田正俊  
柳澤吉保  
生類憐みの令  
貨幣改鑄  
元祿時代

から入つて將軍となつた。このころから太平の氣がみなぎり奢侈の風はひろがつた。綱吉は學問を好み、はじめは嚴格な氣質の堀田正俊を用ひて大いに政務につとめたが、後には柳澤吉保などが寵用せられて紀綱が弛んできた。また綱吉は僧隆光のいふところを聞いて生類憐みの令を出して殺生を禁じ、なほ幕府の財政の窮乏を救はうとして貨幣を改鑄して粗惡なものを世に行ふなどの失政が多くあり、その上に天災などもつづいた。綱吉將軍の頃を元祿時代とい

赤穂義士

今兵庫縣赤穂町  
舊城址内にあり、また邸址には大石神社が建てられてある。



大石良雄舊宅

元祿十五年には播磨(兵庫)赤穂城主淺野長矩の臣、大石良雄等四十七士が主君の仇を報じた義舉があつた。しかし綱吉の晩年には世上いよいよ華美となり、士風もゆるみ、人民も遊惰となつた。

●將軍家宣・家繼と

新井白石 綱吉薨じた後、家宣が甲府(山梨)から入つて將軍職をついだ。家宣は儒臣新井白石(君美)を擧げ用ひて顧問とし、前代の弊風を改めるにつとめた。家宣薨じて幼少の家



義士の筆蹟

白石の政治  
皇室尊崇<sup>①</sup>

繼が將軍となつたが白石はよくこれを輔佐して幕府政治の肅正につくした。白石は<sup>①</sup>皇室尊崇の志深く、當時皇子・皇女の佛門に入り給ふの御例を廢し、宮家を御創立せられんことを將軍家宣にすゝめ、

朝鮮使待遇改正<sup>②</sup>



新井白石

將軍はこれを上奏して中御門天皇の御嘉納を蒙つた。また我が<sup>③</sup>國體の威嚴を明らかにするため朝鮮聘禮使の待遇を改めて今までの厚きに過ぎたのを正した。

貿易制限<sup>④</sup>  
貨幣改鑄<sup>⑤</sup>

して我が國の金銀が海外に流出するのを防いだ。<sup>④</sup>國內ではまた貨幣を改鑄して品質の良いものを行ふこととした。

白石の學問

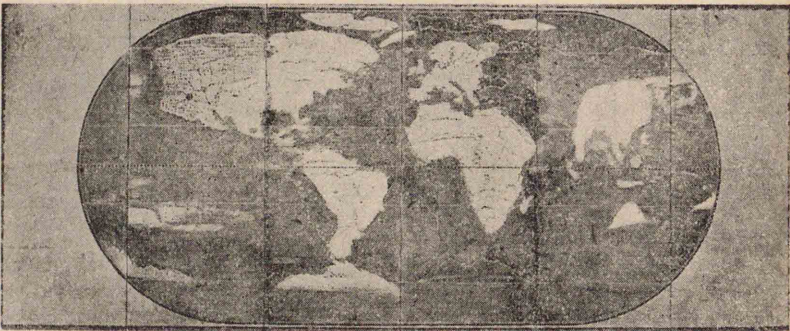
白石は和漢の學に博く通じたのみでなく、西洋の事情にも深く注意し、政治の上にこれを應用し、また多くの著述をのこした。

### 第三十五章 江戸時代前期の文化

國家的自覺  
文化があまりにひろがるにつけて、國民の間にも國家思想は高まり、自覺が強くなつてきた。

●國家思想 今までは朝鮮・支那・印度などの東洋の國々のみを知つてゐたのが、この時代には、遠く西洋に國があることを知り、文化も異つたものを見たのは著しい變化で、日本の國を思ふ精神が一層高まつた。徳川幕府が斷行した鎖國は、日本人の海外に進出することを止めたが、國內の統一・自國文化の保護、及びその進歩の上には効果があつた。

●學問の興隆 文化の興隆と普及とは、徳川時代を通じて、めざましいものであつた。はじめ家康は、多年の兵亂の後を治めるには學



世界圖屏風

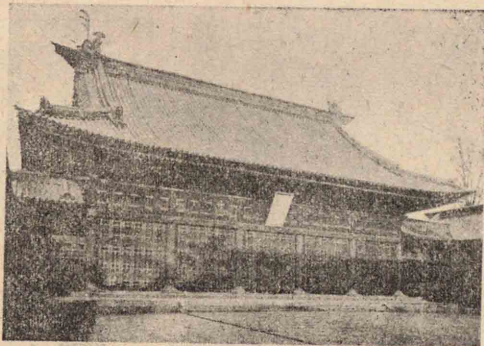
福井市淨得寺所藏の世界圖屏風で、江戸時代の初期からこんな世界圖や日本圖を屏風に畫くことが流行した。これは日本國の自覺が高まつたことを示すものである。



初期の學問  
藤原惺窩  
林羅山

湯島聖堂

元祿時代  
將軍綱吉  
林 鳳岡  
木下順庵  
新井白石  
室 鳩巢  
荻生徂徠  
伊藤仁齋  
伊藤東涯



湯島聖堂・大成殿

東涯と相對し、江戸の文運また榮えた。

幕府の重んずるところは、やがて諸藩の倣ふところとなり、各地に

學校が建てられ、私學も開かれ、地方の學問も興隆した。水戸の徳川

水戸光圀

前田綱紀

儒學  
中江藤樹  
熊澤蕃山



徳川光圀

光圀は、多くの學者を招きよせ、歴史を撰び、加賀の前田綱紀も廣く内外の典籍を集め、學問を奨勵した。學者には、家光の頃、近江に中江藤樹があり、近江聖人といはれ、門下に熊澤蕃山が出て備前(岡山)岡山の池田光政に仕へ

貝原益軒

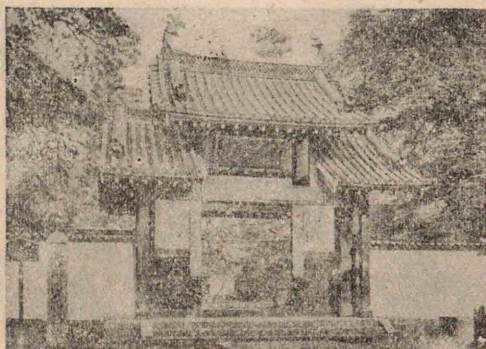
山崎闇齋

山鹿素行

藩の政治に力を盡した。筑前(福岡)には貝原益軒が平易な教を説いた。

なほ山崎闇齋は儒教から神道に入り垂加神道を唱へ、山鹿素行は儒學の外、我が國の歴史を研究し、軍學を教へ、武士道を鼓吹した。

佛 教 徳川家康の時には禪宗の崇傳



黄山驛萬福寺

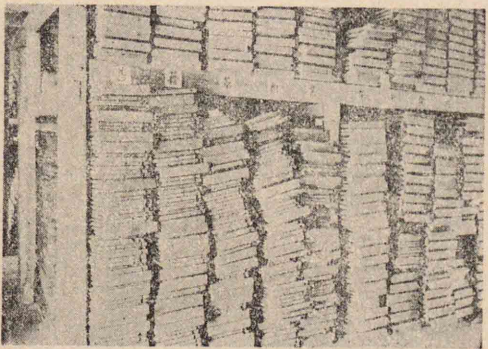
天海

隠元

鐵眼

鐵眼  
板木は今京都の萬福寺に藏せられてゐる。

天台宗の天海が出て、幕府政治の上にも重んぜられてゐた。家綱の時、明から僧隠元が来て黄檗宗を傳へた。また一向宗から黄檗宗に入つた鐵眼は佛教界の覺醒にとめた。幕府は天主教を抑へるため、佛教を保護することあつく、寺院に宗門帳をつくらしめ、人民の信仰を取締つた。かくて僧侶はその保護のもとに活氣を失つた。



鐵眼板一行切經板木

國文

僧獎沖

北村季吟

荷田春滿

松尾芭蕉

近松門左衛門



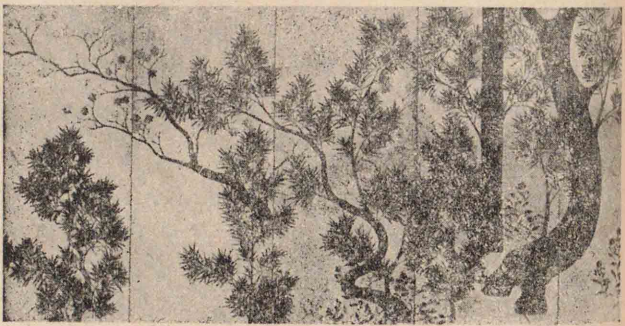
近松門左衛門

國文學 諸種の文學いづれも盛んになつて國文和歌漢文詩賦俳諧淨瑠璃狂歌が各階級の間にひろがつた。中にも國文和歌には僧契沖北村季吟荷田春滿俳諧には松尾芭蕉淨瑠璃作者に近松門左衛門などの勝れた

人々があらはれた。

美術工藝 この時期は繪畫の諸派彫刻工

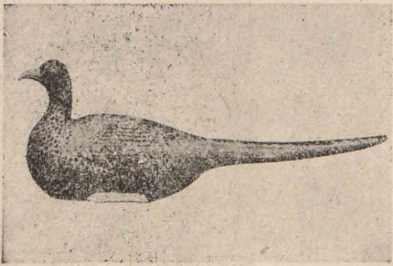
藝等みなそれぞれ特色のあるものが起つた。狩野派には家光の頃狩野法眼探幽があり、元祿の頃には土佐派には土佐光起が出て大和繪を復興し、そのほか尾形光琳・英一蝶も名手であつた。浮世繪は岩佐又兵衛によつてはじめられ、元祿時代に菱川師宣が出て大いに榮えた。



光琳筆風繪

建築彫刻

浮世繪  
岩佐又兵衛  
菱川師宣  
長さ一尺六寸二分で青緑金銀等の色釉で寫實風に造られ仁清傑作の一に數ふべきものである。



仁清の雉香爐

建築では家光のときに出來た日光の東照宮があり、彫刻もその社殿等に附けられた精巧な裝飾彫刻がこの時代をよく代表してゐる。

工藝

高き一寸七分、方七寸三分、黒釉を以て岩に蘭を畫き、周邊には花文様を飾つてある。京都鳴瀧に於ける製作である。



皿の繪の蘭山乾

工藝には甲冑刀劍の裝飾が進み、蒔繪は元祿時代に發達し、陶器に仁清、乾山等の名工が出て、染織には元祿の頃、京都に友禪染が發明せられた。

實學の風と經濟産業

この時期は、時世の進むにつれて學問もしだいに實際的な方面を重んずるやうになつた。また西洋の事情が知られるとともにその學術も傳はり我が國の科學も進歩を見た。關孝和は關流の和算を創め、算術も普及するに至つた。

またこの時代は將軍も諸侯も經濟の方向に意を用ひて政策を立てたことが多い。家康のころから諸方に金銀山の採掘があり、各藩も農業を勧め、新たに産業を興すことに意を用ひた。

關孝和  
和算

經濟

金銀山

享保元年(三五七)  
慶應三年(二五七)

第九篇 近世

二期

江戸時代後期

(吉宗の襲職より  
王政復古まで)

第三十六章 江戸幕府の中興

江戸後期の時代  
區分

享保—吉宗  
寬政—家齊  
(定信)  
文化—家齊  
文政—家慶  
天保—家慶  
(忠邦)

江戸時代後期

江戸幕府は慶長・元和にその基をひらき、寛永に確立し元祿に至つて花のごとくに咲き誇つたが、正徳の頃にはひきしめることを必要とした。これを前期とせば以後は後期と言へる。即ちこの後は、肅正が行はれ、一時は幕府中興の實を見たが、後、内外の事情によつて漸次に衰頹の途をたどつたのである。

享保の幕府肅正

家繼は享保元年に薨じ、吉宗が紀伊(和歌山縣)から入つて將軍職を繼いだ。新井白石は隱退し、吉宗は室鳩巢(直清)を用ひ、銳意革新の策を立て自ら粗服を着し武



德川吉宗

享保元年

皇紀二二七六年

享保の治

室鳩巢

勤儉尙武

第三十六章

江戸幕府の中興

裁判の公正<sup>③</sup>  
學問獎勵<sup>④</sup>  
産業振興<sup>⑤</sup>

右より

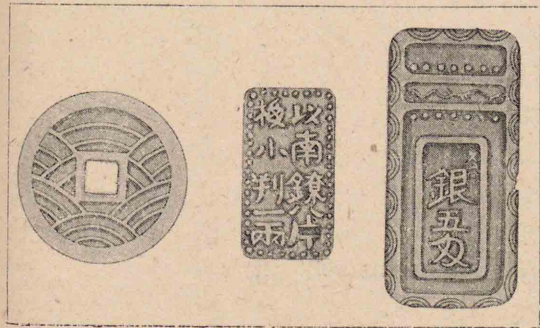
五匁銀  
南鐐二朱判  
この八片を以て  
小判一兩に換へ  
た。  
四匁眞鍮錢  
初めて眞鍮を以  
て鑄錢し質が悪  
くなつた。

を練つて勤儉の範を示し、人材登用の途を開いた。また<sup>③</sup>法制を嚴にし、裁判の公正をはかり、<sup>④</sup>學問を獎勵し、學校を盛んに興すことにつとめ、外國からの書籍の輸入禁止を寛にし、<sup>⑤</sup>經濟のことに心もかけ、良貨を行ひ國內の産業の振興を圖つた。それゆゑ吉宗は幕府中興の英主といはれた。

●田沼の專權

しかるに吉宗の後、家重から家治が將軍となつたころは、幕府の紀綱もゆるみ、人心は險しく、世も穩かてなくなつた。

家重はもとから多病で、側近く使つてゐた田沼意次を重用し、家治はまた意次を遂に老中にまでなし、その子意知も若年寄に進み、父子ともに權を擅にし、私利を貪り、賄賂が盛に行はれた。偶、淺間山が噴火し、諸國に洪水海



田沼時代改鑄錢貨

嘯の災があり、また天明の年には大飢饉が來たので、米價は騰貴し、各地に一揆が起り、世の非難が父子に集つて、意知は遂に將軍の殿中で殺害せられるに至つた。

松平定信

●文化文政時代

家治の後、家齊が將軍となつた。家齊は松平定信(樂翁)を老中とし、治績が大いに揚つた。定信が職を辭した後、家齊は凡



松平定信

そ四十年のながい間、幕府の政務を見たが、この間、文學、演劇、遊藝など榮えて、すべてが爛熟の狀となつた。そのうちには幕府財政の窮乏と貧民の増加の兆とはいよいよあらはとなつた。

天保八年、大阪に大鹽平八郎が窮民を救はうとして亂を起したのは、家齊將軍の最終の年であつた。

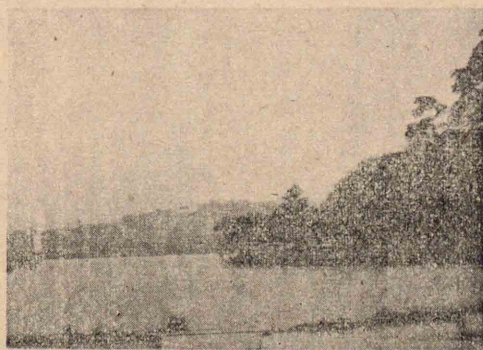
大鹽平八郎の亂

江戸時代には、幕府が大名を地方に封じて各其地方の内治にあたらしめたので多く

明主賢臣が出た。その中でも松平定信は初め東北地方の白河（しらかわ）に封ぜられてをり藩治に見るべきものがあった。今福島縣白河町には南湖（なんこ）といつて、當時用水灌漑に供した大池があり、常に藩士をして、此池で水泳の練習をせしめたと云はれてゐる。池の畔には樹木を植ゑ景色をよくし人民の目を樂ましめた。南湖の畔（ほとり）南湖神社は定信を祀つてある。

水野忠邦

⑤ 天保の改革 家齊は職をその子家慶（十一代）に譲つた。このとき老中水野忠邦は、世のさまを見、大改革の必要を感じ、ひたすら儉約を勤め、士分には武技を練らしめ、西洋砲術の學習などを奨励したが、世態の頹廢が甚しく、しかもその改革はあまりにも峻嚴であつたため、世人の不滿をかひ、忠邦はつひに不評のうちに職をやめなければならなかつた。かくて幕府の勢も世の有様もたゞ衰へ行くばかりであつた。



白河町南湖

第三十七章 江戸幕府の衰耗 對外關係

●幕府衰運の概観

徳川幕府は漸次に衰へを見せて來たが、たゞに内治の上ばかりでなく、①外國に對しての策を誤つたことは殊に大きな失敗であり、②そのほか徳川家の内部にも紛糾があつて、衰兆はいよゝゝあらはになつた。

●京都に對する不敬 幕府は内治の上に

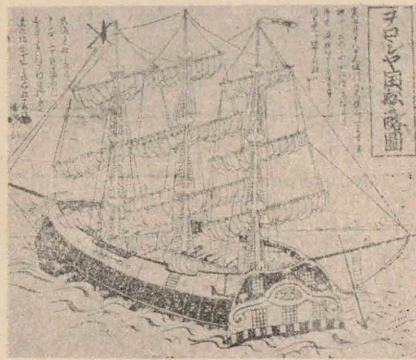
種々の失策を重ねたがさらに光格天皇（百十九代）の御代に、天皇が御生父典仁親王（仁親王）に太上天皇の尊號を奉られんことを思召されたとき、御叡慮にそむき奉つたごとき不敬のことがあつた。このことは、幕府に對して憤（イキドホ）るこゝろを起し、ひいては尊王論が高まる因をなした。



光格天皇宸影

幕末の頃ロシア船が大坂天保山沖に漂着したことがあり、市民の不安混雑を防ぐ爲めに國のごときロシア船の模様を寫して刷らしめた。長さ三十餘間、幅十間餘。

ラツクスマン  
寛政四年  
皇紀二四五二年  
レザノフ  
文化元年  
皇紀二四六四年



シロの船の圖

●外國との關係 永い間の鎖國のうちにも世界の情勢は變つて來て、そのため幕府には外交上の困難な事件が起り、幕府の崩壞する大きな因をなした。その經過は大體下のとほりである。

(1)露國人の來航 露西亞は西比利亞に領土をひろげ、それから我が國の北邊を窺つてゐた。寛政四年、露國の使者ラツクスマンが根室に來り、文化元年にはレザノフが使者となつて長崎に來り、いづれも通商を請



イラコエ・レザノフ

うた。幕府はいつも國禁であることを告げて拒絶したので、露人は我が北海に出没し、附近を荒すことが多くなつた。

林子平

近藤守重  
伊能忠敬  
海防論  
林子平  
蝦夷地探險  
間宮林藏



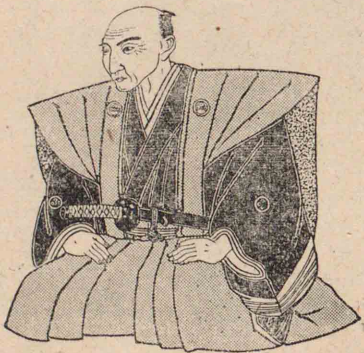
林子平

このころ林子平はやくも防備の必要を説いたが、却つて幕府のため罰せられた。しかし幕府も近藤守重に蝦夷地(北海)を探險せしめ、伊能忠敬に北海の沿岸を實測せしめ、また間宮林藏をして樺太を探險せしめて露西亞に備へた。

英船長崎入港  
文化五年

外國船打攘令  
文化八年  
高島秋帆  
江川垣庵

(2)外船打攘令 英國も印度から南洋方面に領土を占めて我が國と交易する計畫を立て、文化五年には英國船が突然長崎に入港し、その地の蘭人に亂暴した。その後も外國船のみだりに我が近海に來航するものが絶えなかつたので、幕府は斷乎として文政八年に外國船打攘令を出し、の高島秋帆江川垣庵をして西洋砲術の練習兵器



高島秋帆

渡邊崋山  
高野長英



高野長英

の製造をなさせ、外寇に備へた。渡邊崋山・高野長英などは、打攘令が時世に適せざること  
を説いたため獄に投ぜられた。

(3)ペリーの來航 その後間もなく孝明天皇の

ペリー來る  
嘉永六年  
皇紀二五二三年

督ペリーをして軍艦四隻を率ゐ、國書を携へ、浦賀に來航せしめ、通商を聞くことを強く請うた。幕府は驚いて明年返答することを約して去らしめた。

プーチヤチン

(4)露西亞の使節また來る ついで翌七月に、露國の使節プーチヤチン

は軍艦を率ゐて長崎に入り來り、開港及び樺太の境界を定めることを求めたが、幕府はまたこれをも諭して歸らしめた。

ペリー再び來る  
和親條約  
安政元年  
皇紀二五二六年

(5)日米和親條約 その翌年安政元年の正月に、ペリーが約により再び軍艦を率ゐて神奈川沖に入り來り、前年の回答を迫つたので、幕府は

やむなく下田・函館を開き、食糧薪水を供給することを約した。之を和親條約といふ。

(6)通商條約 ついで安政三年、米國總領事

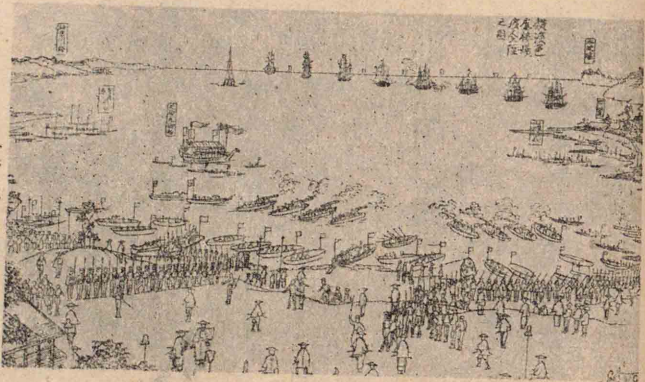
右に横濱邑應接場夷人上陸之圖と記されてある。信州松代の植畑翁輔の書いた鉛筆畫である。

Harris ハリスが下田に着任し來り、日本と亞米利加合衆國との間にさらに通商條約を締結したいと頻りに求めたので、遂に幕府もこれに同意し、新たに神奈川・兵庫・長崎・新潟の四港を開くことを約した。

(7)勅許の奏請 幕府はこの條約の締結に

ついて、調印の勅許を仰ぎ奉つたが、朝廷は

これを許したまはなかつた。この時彦根藩主井伊直弼が大老に擧げられて難局にあたり、内外の形勢の上からやむを得ないとし、遂に勅許を待ち奉らずして假條約に調印した。ついで和蘭露西亞英吉



横濱外人上陸の圖

井伊直弼

安政假條約

安政五年  
皇紀二五二八年

利・佛蘭西も同じやうな條約を締結した。

④ 將軍の後繼問題

徳川家の内部にも、幕府の衰亡を早める事情があつた。將軍家定は虚弱であつて、また子が無かつたため、將軍の後繼者については、水戸家の徳川齊昭の子の慶喜と紀伊家の家茂とがこれに擬せられ對立の形勢となつた。

大老井伊直弼は、衆望のある慶喜を排して家茂を迎へたので、水戸藩をはじめ多くの怨



井伊直弼

家茂

をかつた。

⑤ 安政の大獄

條約の調印についても、將軍の繼嗣の問題についても、世論はいやが上にも沸騰するばかりであつた。直弼はその所信を遂行するため京都に威壓を加へ、安政五年、幕府に反對する公卿の家臣、その他集り來れる志士等五十餘人を捕へ、同六年には水戸藩の

齊昭を蟄居せしめ、江戸に於て志士等を死刑

に處した。それらのうちには吉田松陰、頼三

樹三郎、橋本左内などがあつた。これを安政

の大獄といふ。このため直弼はその翌年の

萬延元年の三月三日、登城の途、櫻田門外に於

て水戸藩の浪士等のため殺害せられた。



吉田松陰

安政の大獄

安政六年

皇紀二五一九年

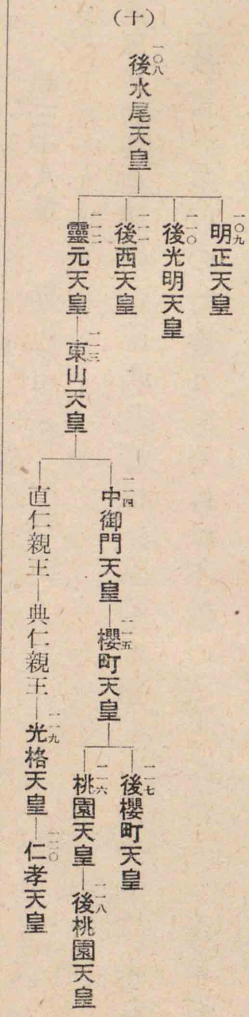
櫻田門外の變

萬延元年

皇紀二五二〇年

かくて幕府の威信は地に墜ち、その上に内外の失策がなほ、この後もつゞき、尊皇論はいよゝ熾んとなつて遂に幕府の運命を決するに至つた。

皇室御系圖





### 第三十八章 勤皇思想の勃興

●勤皇思想勃興の要因 徳川幕府は、○京都の朝廷を固より尊崇し奉つたとは言へ、幕府の行ふところには不敬のこともあり、また幕府實力の衰微によつて、◎内外ともに失敗を重ねたことが勤皇思想の興る因をなしたことはすでに述べたが、なほ、◎學問が興り國體の尊嚴がますます、世に知られるやうになつて勤皇の思想は高まり、かつ擴がつて來た。學問のうちにも江戸時代前期からしだいに、●儒學が士民の間にひろがつたこと、◎國史が研究せられ、●國學神道が興隆したことは特に勤皇思想を盛んにしたものである。

山崎闇齋  
山鹿素行

●儒學と勤皇思想 儒學は人の正しい行ひを教へるのであるから、それによつて大義名分が明らかになり、儒者のうちには、はやくも、わが國體の尊嚴を説いた山崎闇齋、山鹿素行などがあつた。闇齋の弟

淺見綱齋

子淺見綱齋も尊皇の大義を高唱し、報國の思想を大いに鼓吹した。

山崎闇齋



◎國史の研究 我が國の歴史を知ることには國體を自らに明らかにする。それゆゑ水戸の徳川光圀は大日本史の編纂を企て、自ら監修して、皇室尊崇の心を表はし、山鹿素行の中

大日本史

中朝事實

日本外史

朝事實は日本の國の勝れたる歴史を教へ、國體を明らかにし、賴山陽の日本外史は廣く讀まれて、國民の間に勤皇の思想を振ひ興した。

◎國學神道の興隆 我が國の歴史とともに古文を研究することが興つて國民の精神がかへりみられるやうになつた。

元祿の頃大阪に僧契沖が出て萬葉集を註

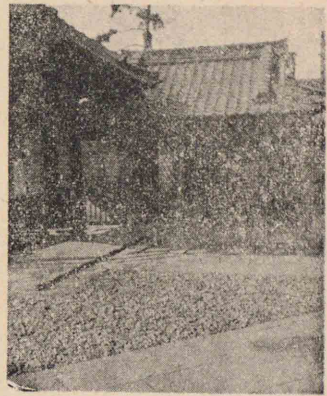


賴山陽

京都寺町丸太町、下御霊神社内にあり、山崎闇齋が生前に自分の霊を祀つてゐたものを移してここに祀つた。

國學

契沖  
荷田春滿  
賀茂眞淵  
本居宣長  
平田篤胤



垂加社  
釋し、つゞいて荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤があとをうけてあらはれた。いづれも我が國の古典を研究したので、古代のありさまがよくわかるやうになり、日本の國柄が明らかにせられた。

神道は山崎闇齋が儒學から神道に入り、垂加流の神道を唱へ平田篤胤は國學者たちの説いた神道を一そう進めて宗教化した。これらから尊皇論が大いに鼓吹せられた。

⑤勤皇思想旺盛 勤皇の思想は、京都や江戸のみでなく諸國にひろがり行き、天下の形勢にやがて大きな變化が來ることとなつた。



本居宣長

京都では實曆の頃、越後の竹内式部が

竹内式部

實曆九年  
皇紀二四一九年

山縣大貳

藤井右門

明和四年  
皇紀二四二七年

高山彦九郎  
蒲生君平

山陵志

公卿の間に尊皇の大義を説き、幕府から忌まれて追放に處せられた。その頃江戸では山縣大貳が書を著はし、王政復古の意をこれに寓し、藤井右門も大貳の説を述べたので、幕府は明和四年大貳、右門を捕へて處刑した。これらを實曆、明和事件といふ。

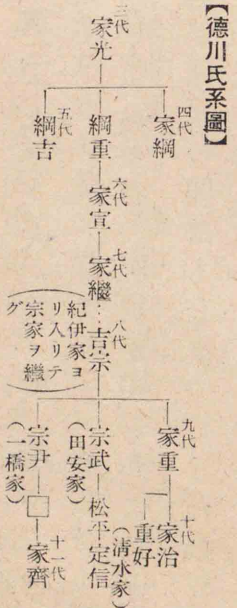


蒲生君平

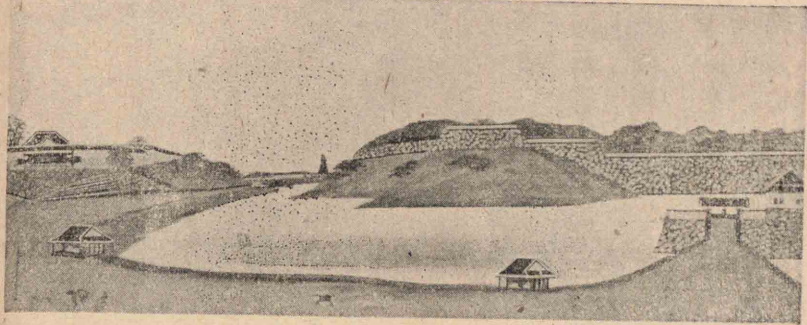
寛政・文化の頃になつて、高山彦九郎、蒲生君平は諸國を巡遊して尊皇の論を世にひろげた。蒲生君平は御歴代の山陵が荒廢したのを慨いて、これを調査して山陵志を作つた。

諸藩にも勤皇の思想が盛んとなり、藩内にあつてこれを唱へ勤皇の士が相結ぶものも多くなつた。

第三十八章 勤皇思想の勃興



この圖は當時江戸市中に賣られた一種の胡粉畫によつたものである。左方の家は井伊家の邸宅、右方の門が櫻田門である。堀端に建つてゐる家は辻番所で事變はその中間で起つたといはれてゐる。



櫻田門

の思想が國民の間にも高まつてきたので、幕府のあることは許されない情勢が生じた。それとともに、開國攘夷の論が盛に唱へられ、勢ひの進むところ、幕府倒伐となり、遂に幕府は政權を還し奉ることとなつたのである。

開國攘夷論 櫻田門外の變の後、老中安藤信正は公武合體の方針を立て、皇妹和宮が將軍家茂に御降嫁あらせられるやう奏請して許されたが、これもまた志士の憤を招き、文久二年信正は坂下門外に要撃せられて傷ついた。この時

安藤信正  
公武合體

坂下門外の變  
文久二年  
皇紀二五二二年

攘夷決行日  
文久三年  
五月十日  
皇紀二五二三年

八月十八日政變

京都大學國史研究  
室所藏

七卿落

元治元年  
皇紀二五二四年



長州兵入京の圖

卿落といふ。

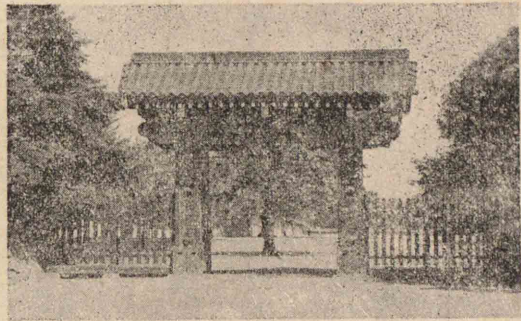
開國攘夷の論が沸騰し、將軍家茂は翌文久三年に勅を拜して攘夷決行の日をその年の五月と定めたので、長州藩は米蘭佛三國の艦船を下關で砲撃し、薩摩藩は英艦を鹿兒島灣で撃退した。この頃京都では薩摩・長門・土佐等の諸藩が警備にあつたが、急激な攘夷決行を唱へた。長州藩は文久三年八月十八日俄かに朝議によつて皇居警衛の任を解かれ、會津・桑名の二藩を以てこれに代らしめられた。そこで攘夷を主張してゐた三條實美等の七卿は長州に走つた。これを七

長州征伐 翌年元治元年長州藩の家老福原越後、國司信濃は兵を率ゐて京都に上り、七卿の冤罪を訴へ、且つ藩主の罪を赦されるやう請うて宮門にまで迫つたが、會津・桑名・薩摩の兵これを防いだので、長

蛤御門の變

長州征伐  
元治元年

高杉晋作



蛤 御 門

州藩の兵は遂に敗れて歸國した。これを蛤御門の變といふ。こゝに於て幕府は朝命を奉じて長州征伐の軍を起した。長州藩主毛利敬親は、老臣等を罰して罪を謝したので、幕府は一旦兵を引上げた。しかるに長州藩の内には幕府に對する不平が高まり、藩士高杉晋作等は兵を擧げた。こゝに於て幕府は慶應元年再び長州征伐の兵を出し、將軍家茂は自ら大阪まで進んで



三 條 實 美

第二回長州征伐  
慶應元年

兵を督した。

④薩長連合 幕府は第二回の長州征伐を起したが、この時には、すでに長州は薩摩と密かに連合してゐたから、幕府に對抗し、又諸藩も

家茂薨去

討幕の議

一橋慶喜

孝明天皇御崩御  
慶應二年  
皇紀二五二六年



徳 川 慶 喜

長州征伐の不可をいふものが多く、幕府の命に従はなかつた。その上慶應二年には家茂が大坂で薨じたため、幕府は兵をかへした。この時にあつて薩摩藩士西郷隆盛、大久保利通、長州藩士木戸孝允等は、京都の岩倉具視、太宰府にをつた三條實美等と連絡して討幕の議を進めてゐた。



岩 倉 具 視

⑤大政奉還 家茂の薨後、一橋慶喜が入つて將軍となつたが、慶應二年十二月孝明天皇崩御あらせられて、翌年正月明治天皇が踐祚し給うた。

させてゐた時、前土佐藩主山内豊信はその臣後藤象二郎等をして大政奉還を慶喜に勧めしめた。こゝに於て慶喜も時勢を察して慶應

大政奉還  
慶應三年  
皇紀二五二七年

三年十月十四日、政權を朝廷に還し奉ることを奏請した。翌日天皇はこれを御許しになつた。かくて徳川幕府は十五代二百六十五年にして滅びるに至つた。



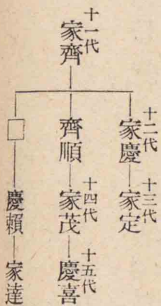
後藤象二郎

皇室御系圖

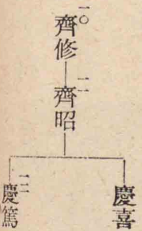
(上)

仁孝天皇<sup>二二〇</sup>  
孝明天皇<sup>二三〇</sup> 明治天皇<sup>二三三</sup> 大正天皇<sup>二三三</sup> 今上天皇<sup>二四〇</sup>  
和宮(親子内親王)

【徳川氏系圖】



【水戸家系圖】



第四十章 江戸時代後期の文化

歐米諸國の世界政策

● 國家思想



孝明天皇

江戸時代前期は我が國についての自覺が進んできたが、後期になつては歐米の諸強國のアジアの方面への進出がさかんとなり、我が國も邊海の防備につとめなければならず、たんに愛國の念は強くなり、國內は學問が進み尊王思想が勃興し國民の間にひろがったから國家思想は鬱然として高まつた。孝明天皇は、國家重大のときにあたらせられ、國事に御宸念あらせられたことはまことにおそれ多い極みである。

● 學問教育の普及

儒學には朱子學や古學、陽明學などの學派があり、武士の間のみでなく、一般國民の間にも學ばれたが、家齊將軍の頃

國家思想

文政・天保の頃 豊後の碩學廣瀬 淡窓は日田(大分縣日田郡日田町)に私塾咸宜園を興し子弟を教育しその門に多くの人材を出した。圖はその址である。

群書類從 百卷

には柴野栗山尾藤二洲古賀精里が出て、寛政の三博士と稱せられた。また心學が石田梅岩によつて唱へられ、町人の間に普及した。國學は、神道・國史の研究とともに大いに尊皇論を鼓吹し、また塙保己一の群書類從などの書籍の大部な類集や出版が行はれた。

かくて幕府各藩で

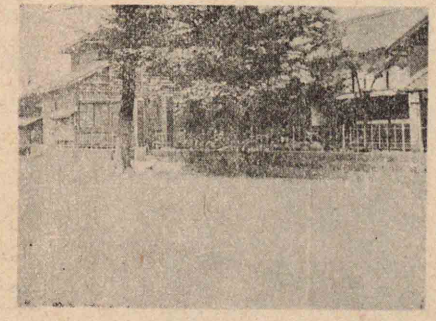
杉田玄白



建てられた學校のみでなく、各地に私塾が興り、寺子屋も民間に廣く普及した。

科學の興隆と西洋學術の傳來 西洋の學術

は將軍吉宗の時には獎勵せられ、青木昆陽は始めて和蘭語と學術とを學び、將軍家治の頃前野良澤、杉田玄白は解體新書を譯し、家齊將軍の頃には大槻玄澤などの蘭學者が出た。こ



學の方地

蘭學

青木昆陽 前野良澤 杉田玄白 大槻玄澤

科學

平賀源内 伊能忠敬

賀茂眞淵 香川景樹 竹田出雲 瀧澤馬琴 與謝蕪村

平賀源内の製作したもので、これによつて電氣を起し世人を驚かせた。



伊能忠敬

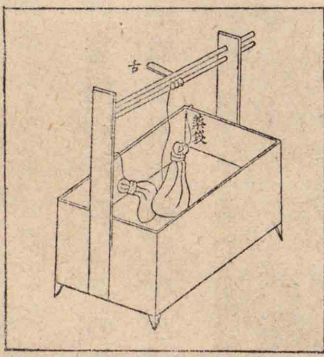
の蘭學によつて、西洋の醫學・物理學等が研究せられ、實際に用ひられた。これとともに我が國の諸科學も進歩を見、平賀源内が電氣を發す機械を製作したこと、間重富や伊能忠敬の測量術など世に知られた。

文學 國文和歌は愈々榮え、賀茂眞淵や、

香川景樹は和歌に長じ、その他、淨瑠璃作者には竹田出雲、小説には瀧澤馬琴等が出て、民衆の間に喜ばれ、俳諧には與謝蕪村等があつた。

美術工藝 繪畫は諸派に多く人を出したが、高雅な文人畫をよくするものには池大雅、

與謝蕪村があり、圓山應舉や伊藤若沖は寫生を尙び、谷文晁は花鳥山水に秀いで、司馬江漢は西洋畫の影響をうけた畫を描いて名高い。



図のキレエ

池大雅  
與謝蕪村  
圓山應舉  
伊藤若冲  
谷文晁  
司馬江漢  
喜多川歌麿  
葛飾北齋  
安藤廣重



澤馬琴

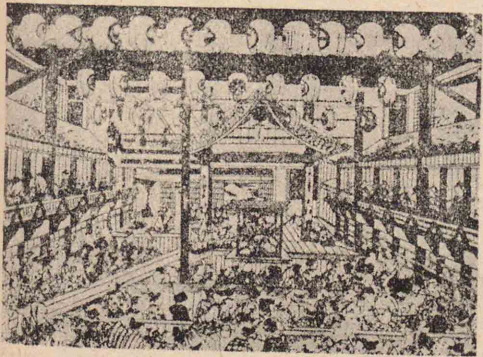
浮世繪には喜多川歌麿、葛飾北齋、安藤廣重などの名手を生んだ。木板色摺の錦繪が出来て民衆に歓迎せられた。

淨瑠璃歌舞伎が全盛を極めたのもこの時代である。工藝には染織、漆器、陶磁器など巧

妙な製作が世に現はれた。

⑥ 經濟産業 幕府も諸藩も經濟産業のことに心を用ひ各方面にわたつて獎勵の策を立てた。京都・江戸・大阪をはじめとし、諸地方には都會が出来、大商人が発生した。金融業の發達があり、海陸交通運漕の業も進んだ。

佐藤信淵は農業その他經濟に關する學問を講じ多くの書を著はした。



芝居の圖

三都  
京都  
江戸  
大阪

佐藤信淵

慶應三年(五七)  
明治五年(三七)

第十篇 近世 第一期 明治時代

(明治天皇御踐祚より御崩御まで)

第四十一章 明治時代

● 王政復古

明治天皇は慶應三年正月九日踐祚し給ひ、十月十四日には將軍徳川慶喜が大政の奉還を請ふに

あたり、これを允し給ひ、ついで十二月九日親王公卿及び在京の諸大名を召して、王政復古の大號令を發せられ、天皇が萬機を親しく御覽せられることを定められ、いままでの攝政・關白・征夷大將軍等を廢して、新たに、總裁・議定・參與の三職を置き、政に與らしめられた。これを明治維新といふ。



明治天皇

王政復古の大號令

明治天皇御踐祚  
慶應三年  
皇紀二五二七年

明治維新

● 五箇條の御誓文と東京奠都

明治天皇は翌年慶應四年三月、群臣を

五箇條の御誓文  
慶應四年  
皇紀二五二八年

率ゐて紫宸殿に出御せられ、天神地祇を祀り給ひ、五事を誓はせられ、またこれをひろく世にお示しになつた。

御東幸のとき  
櫻京橋を通御の  
圖である。

一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ

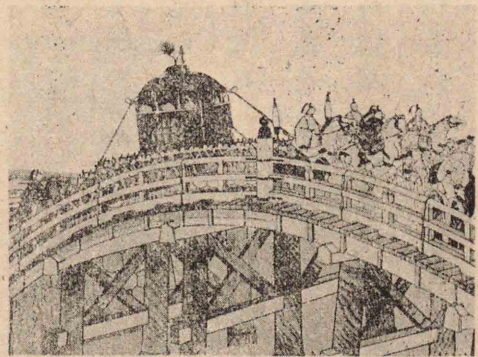
一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ

要ス

一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ

一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ

一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ



圖の幸東駕車

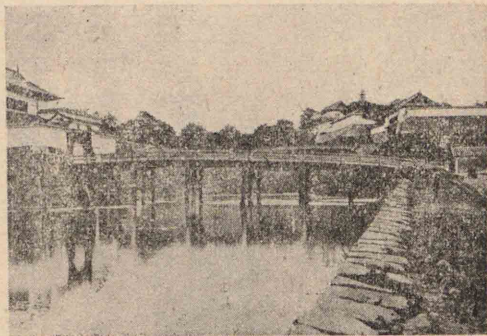
御即位式

明治元年  
皇紀二五二八年

明治初年の二重橋は木橋であつたが、今は立派な石橋になつてゐる。二重橋とは後方に見える。この寫真で見られるやうに橋の上に橋を架した珍しい構造であつたためにこの名稱が出たのである。前方の橋は西丸大手橋といつた。

版籍奉還

明治二年  
皇紀二五二九年



橋重二の年初治明

主に版籍の奉還を勧め、土肥の兩藩もこれに同意して、こゝに明治二年四藩主が進んでその版籍の奉還を奏請して許され、諸藩はまたこれに倣つたので、諸藩主を知藩事とし、舊藩の領地を治めしめたが、明治四年に至り、藩を廢して府縣を



通利保久大



廢藩置縣

明治四年  
皇紀二五三一年

置き、知藩事を廢して、新たに知事を任命した。長い間續いた封建の制はこゝに全く改まり、統一せる中央集權の政治は實現したのである。



木戸孝允

神祇官  
太政官  
六省

④官制改正 版籍奉還の後、明治二年七月新官制が發布せられ、大寶令の制によつて神祇官、太政官を置き、太政官には左右大臣、大納言、參議を置き、刑部、宮内、外務、民部、大藏、兵部の六省を置き、中央政府の官職ほゞ整ふに至つた。

第四十二章 明治時代の内治 (一) 國內統一と諸制度の整備

●王政復古から立憲政治へ 明治維新の精神はすでに明らかになり、新時代の國是が亦定まつたとは言へ、曠古の大革新であつたがため、國內の動搖も幾分まぬかれなかつたが、かゝる間に政治にも社會に

も一新の實が達成せられ立憲政治へと進みつゝあつた。

●王政復古後の動搖 國內平定 王政復古の大號令が發せられた後、幕府の舊臣のうちには大阪に退いてゐた慶喜を擁し、討薩の表を上ら

んとし、明治元年正月、その先鋒の會津桑名、薩長等の兵と鳥羽伏見に戦つて敗れた。

こゝに於て朝廷は征東の軍を出され、江戸に歸つ

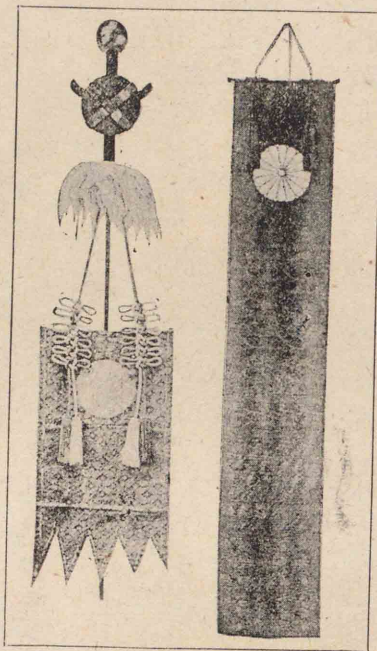
明治元年

皇紀二五二八年

鳥羽伏見の戦①

圖説

征東大總督熾仁親王の御旗と御馬標とで、今東京帝室博物館が所藏してゐる。



征東大總督御旗・馬標

江戸の開城②

彰義隊③

奥羽同盟④

てゐた慶喜は恭順の意を表し、その臣勝安芳をして罪を謝すること、を陳べしめたので、官軍は江戸の城を収めた。その時舊幕臣等が彰義隊と稱して上野寛永寺に集つたが、官軍のために討たれた。地方にあつても、會津藩主松平容保は東北諸藩と奥羽同盟を結び、

五稜郭の戦

明治二年  
皇紀二五二九年



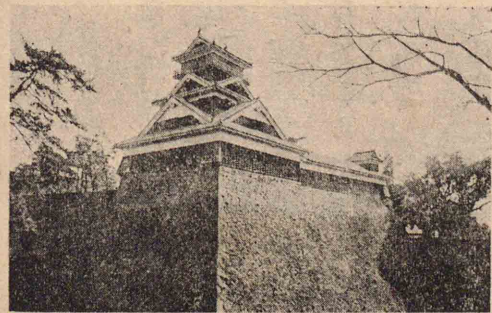
西郷隆盛

榎本武揚タカアキは軍艦を率ゐて函館に到り、五稜郭ゴリョウカクに據つた。然し間もなく容保も降り、明治二年には武揚等も降伏し海内は平靜となつた。

● 新政府とその反対動向西南の役 明治維

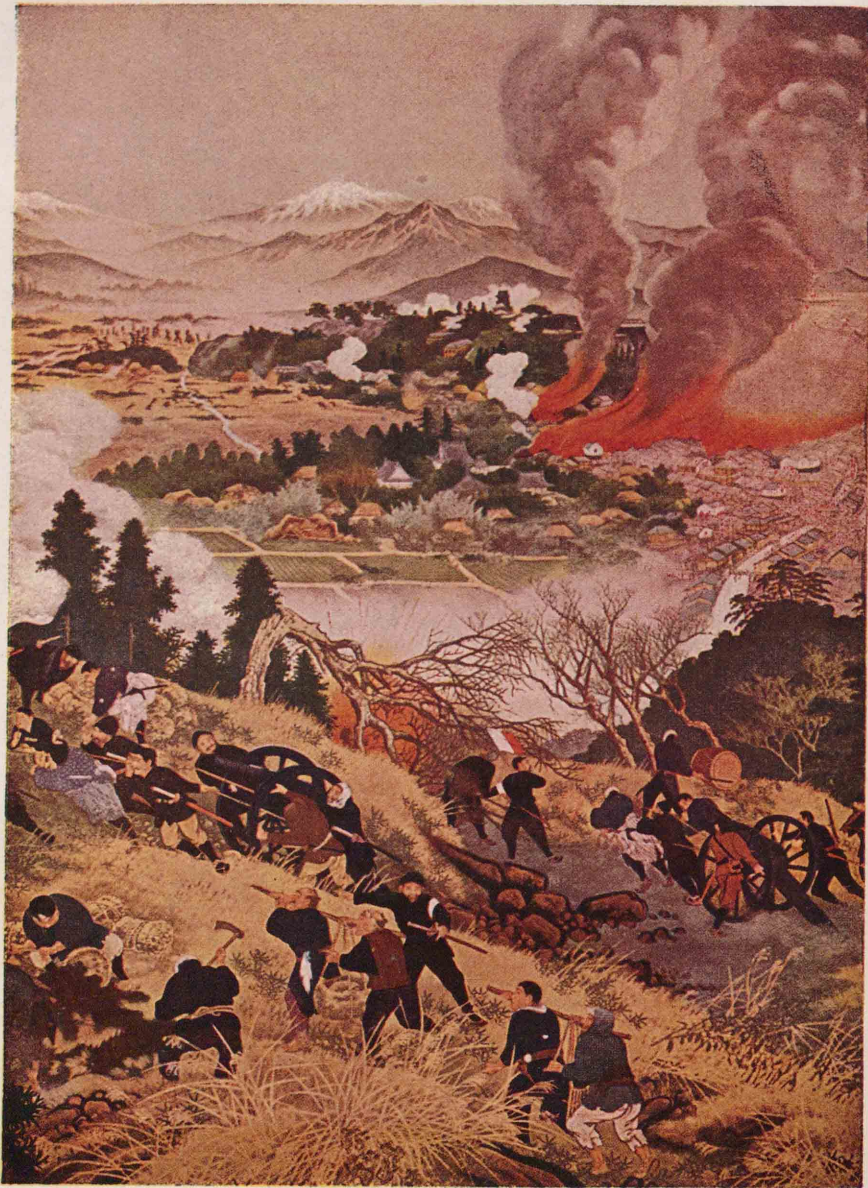
新とともに新たな政

治方針がたてられ、着々實行せられた。維新の後、我國は朝鮮に使を遣はして交を修めようとしたが、朝鮮はこれに應じなかつたので我が國には征韓論が起つた。西郷隆盛、後藤象二郎、板垣退助、江藤新平等はその主唱者であつた。しかるにこの時海外の視察から歸つた岩倉具視等は、今の國內の政治になすべきことが多く、外



熊本城

征韓論  
明治六年  
皇紀二五三三年



西南の役の圖

西南役の圖の一部である。

明治十年二月、西郷方の軍が熊本城を圍み、城の西、花岡山から砲撃中の光景である。

明治神宮聖徳記念繪畫館壁畫

—近藤樵仙氏筆—

佐賀の亂

神風連の亂

秋月の亂

萩の亂

西南の役

明治十年

皇紀二五三七年

民選議院設立の請願

板垣退助

副島種臣

明治七年



板垣退助

に事を構へる時期でないことを説いたので、隆盛等は激論して遂に職を辭するに至つた。この頃新政に平かならぬものも多くて人心は向ふところに迷ふさまで動亂が屢起つた。明治七年の佐賀の亂、同じく九年の熊本神風連の亂、秋月及び萩の亂などがあつた。明治十年西郷隆盛は少壯血氣の門弟に擁せられ、やむなく鹿兒島に兵を擧げ、集るもの多く、進んで熊本城を包圍したが、遂に官軍のたぬ破られ、隆盛は鹿兒島の城山で自刃した。この亂は八ヶ月の長きに亘り、世に西南の役といふ。

◎民選議院設立の請願

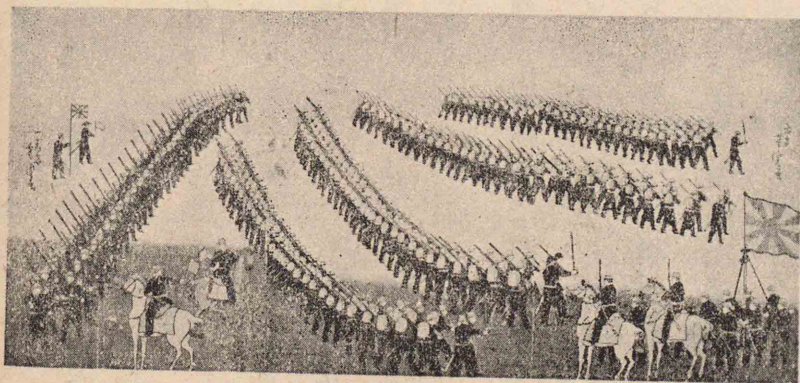
征韓論に關係して

野に下つた人々のうちには、言論を以て大いに民權を主張したものがあつた。明治七年に板垣退助、副島種臣等は民選議院を開かれたいことを請願したが、その後も國民が政治に參與する國會を設け

ることを政府に願ふものが多くなつた。

⑤ 諸制度並に國民生活の更新 國民に關する諸制度には明治六年に徴兵令が發布せられ、國民みな兵役に服する制が定められ、明治十五年には軍人に對する勅諭を賜り、教育の方面では明治四年、文部省が置かれ、翌年學制が頒布せられ、國民教育の重んずべきことを知らしめられ、義務教育の制度の基礎が定まり、十二年に教育令出で、教育普及の實が擧がつた。一方また一般社會では政府の開國進取の方針の下に西洋文物が移入せられ、宗教學術、産業の方面に改進の風が大いにさかんなつた。

軍人に賜はる勅語  
明治十五年  
文部省  
義務教育



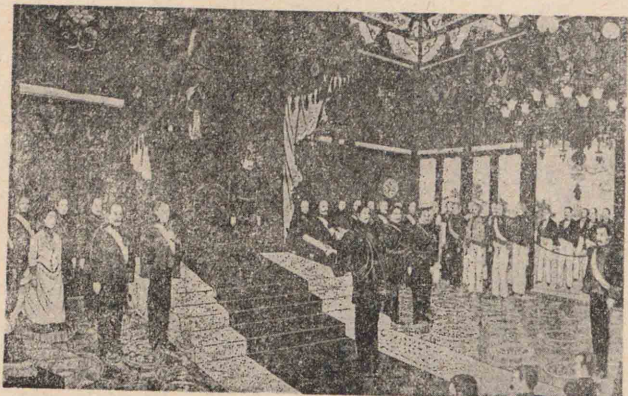
明治初年軍隊訓練の圖

### 第四十三章

明治時代の内治 (二) 憲法制定・教育勅語の渙發

#### ① 立憲政治の確立

明治の新政はいよゝゝ進み、國是もますます明らかとなり、諸制度もしだいに備はつた上に、國民の生活も漸く整ひ來つたのを嚮はして明治天皇は仁慈の大御心をもつて、明治十四年には詔を下され、國會開設の時期を明治二十三年と定め給うた。これにより伊藤博文は歐洲諸國を巡つて各國の制度を調査し、歸朝の後、大命により我が國體に鑑み、我が國の歴史に照し憲法の草案を作り、これを上つた。また十八年には官制を改め、内閣總理



憲法發布の式圖

國會開設の期

伊藤博文

内閣組織  
明治十八年  
樞密院

大臣の下に内務、外務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、逓信の九省の大  
臣が置かれ、内閣組織を以て政治を運行せしむることとなつた。二  
十一年には樞密院が設けられ、最高の諮詢の  
府とせられた。全國に市町村制の公布せら  
れたのもこの年である。



伊藤博文

憲法發布

明治廿二年

帝國議會

明治廿三年

皇紀二五五〇年

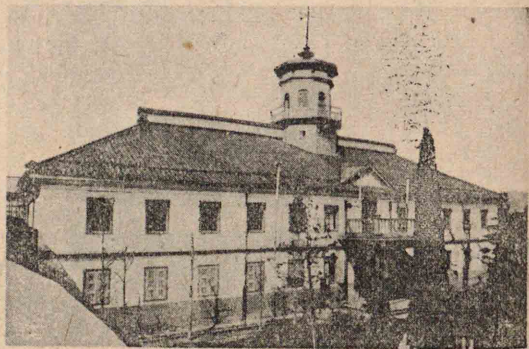
かくの如くにして明治二十二年紀元節の  
佳辰を以て、大日本帝國憲法を發布せられ、並  
に皇室典範を定められた。かくてその翌年憲法に基いて第一回の  
帝國議會が召集せられ、我が國、立憲の政體は全く確立するに至つた。  
●教育勅語の御下賜 明治維新の國是はまた國民精神の發揚とな  
つてあらはれ、文教の上の諸の施設が整へられ、都會にも地方にも各  
種の學校が設けられた。こゝに於て明治天皇は帝國憲法發布の翌  
年明治二十三年十月三十日を以て、教育に關する勅語を下し給ひ、こ

明治初年文教の  
獎勵に伴なつて  
都鄙に學校の建  
てられるもの次  
第に多きを加へ  
た。松本市の開  
智學校は明治九  
年に竣工したも  
ので、様式は東  
京開成學校のも  
のに則り、明治  
時代我が國に出  
來た學校として  
は非常に舊いも  
ので明治十三年  
にはかしこくも  
明治天皇の行幸  
を仰いだもので  
ある。教育が地  
方に普及するよ  
い例である。

刑事訴訟法

金本位制

國體の精華とを御示しになり、また臣民が當  
に服膺すべき道を御諭しになつた。  
こゝに至つて、教育の根本が明らかになり、  
永く國民思想の向ふところが定まつた。  
●法制經濟等の諸施設 維新とともに幕府  
時代の法律を一新して我が國民生活の實情  
に合ふ法律が苦心して工夫せられ、度々改正  
せられた後、明治二十三年には刑事訴訟法な  
どの諸法律が發布せられ、また明治四十一年には新刑法が實施せら  
れることなどがあつた。



長野縣松本市開智學校

經濟の上には明治三十年銀本位制を改めて金本位制が採用せら  
れ、明治三十九年には鐵道國有の制が實施せられた。この外郵便の

制度・新聞の條令・産業の獎勵・金融等百般の施設の改正が次第に成り、維新の精神はいよゝゝ明らかにかつその達成を見るに至り、更に對外の關係・國外への進出にめざましきものあつて國勢はますます隆盛となつた。

### 第四十四章 明治時代の外交 國威の伸張

● 對外政策の確立 明治維新とともに政府は諸外國との和親をはかり、すべては萬國公法に據るべきことを布告した。また五箇條の御誓文によつて、智識を世界に求める我が國是が定められ、對外方針は確立した。かくて明治四年には岩倉具視を特命全權大使とし、木戸孝允・大久保利通・伊藤博文等を副使として歐米諸國に遣はし、國交を修め、文物制度を視察せしめた。

對外方針の確立

清國との外交 ①

新約を結ばしめた。この年琉球の民が臺灣に

漂着し、かの地で殺された事件があつたが、政府は清國に對し交渉したけれども、清國は臺灣の生蕃は化外の民であるとして應じなかつた。我が政府は西郷從道をして臺灣を征伐せしめたところ、清國は抗議を申出た。兩國交渉の後、清國は償金を出し、我が國は臺灣から兵を撤した。

臺灣征伐  
明治七年

露國との外交 ②

千島樺太の問題



西郷從道

● 露西亞に對しては、すでに舊幕時代から千島・樺太に關して種々の問題があつたが、明治八年に至り、我が政府は露西亞と交渉し、千島諸島を我が國に收め、從來境界の明らかになかつた樺太の全部を露國に與へることと



岩倉大使一行

して解決を見た。

東學黨の亂

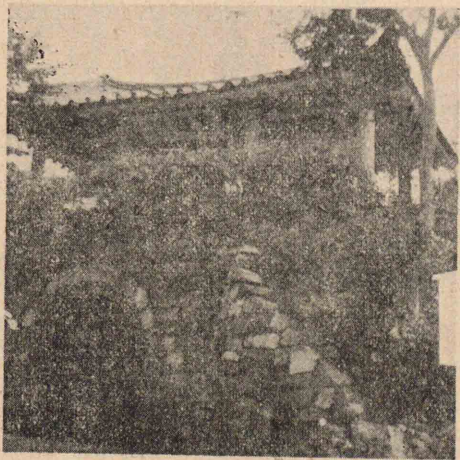
●日清戦役 朝鮮に關しては、征韓論の後も屢、事端の發するのを見たが、明治二十七年朝鮮に東學黨の亂が起つたとき、清國は、朝鮮に兵を出し、屬國の亂を鎮めると稱した。

**國語**  
玄武門は朝鮮平壤にある。日清戦争の古戦場である。

皇紀二五五四年

豊島沖戦

我が國は清國に對して戦を宣するに至つた。我が海軍はまづ豊島沖に勝ち、陸軍はまた成歡で清兵を破り、進んで平壤を陥れ、その後、海軍は黃海に敵艦隊を撃破し、陸軍と協力して旅順口を陥れ、翌年には威海衛營口等を占領し、連戦連勝の勢を以て北京に迫らうとしたので、清國は遂に和を求め、朝鮮の獨立を認め、



玄武門

黃海戦

威海衛

遼東半島臺灣澎湖島を我國に割き、④償金二億兩(約三億圓)を出すべきことを約した。これを下關條約といふ。

下關條約

三國干涉

その後露佛獨の三國は、我が國が遼東半島を領有するのは東洋平和に害あるものと稱して、これを清國に還附するやう勸告したので、天皇は平和のため遼東半島還附の詔を出された。

條約改正

④條約改正 日清戦役後、我が國の國際的地位は高まつたので、長い間我が國に不利であつた歐米諸國との修好通商條約は改正せられるに至つた。これ實に明治四年以來、當局並に國民ともに熱烈に改正を企てたところであつた。

北清事變

⑤北清事變と日英同盟 また明治三十三年、清國に起つた義和團といふ暴徒の事變には、我が國は歐米諸國の軍と聯合してこれを討ち、武威を列國に示し、三十五年には日英同盟が成立するなど、國威がいよ／＼世界に輝いた。



乃木希典大將

たつては兵を滿洲に増派し、後滿洲及び朝鮮半島に對する野心をあ  
 らはにした。我が國は東洋平和のため、露西  
 亞と談判を重ねたが、露西亞は反省するところなく、却つて大兵を南下せしめて我が國を脅かすことをした。かくて我が國は、遂に明

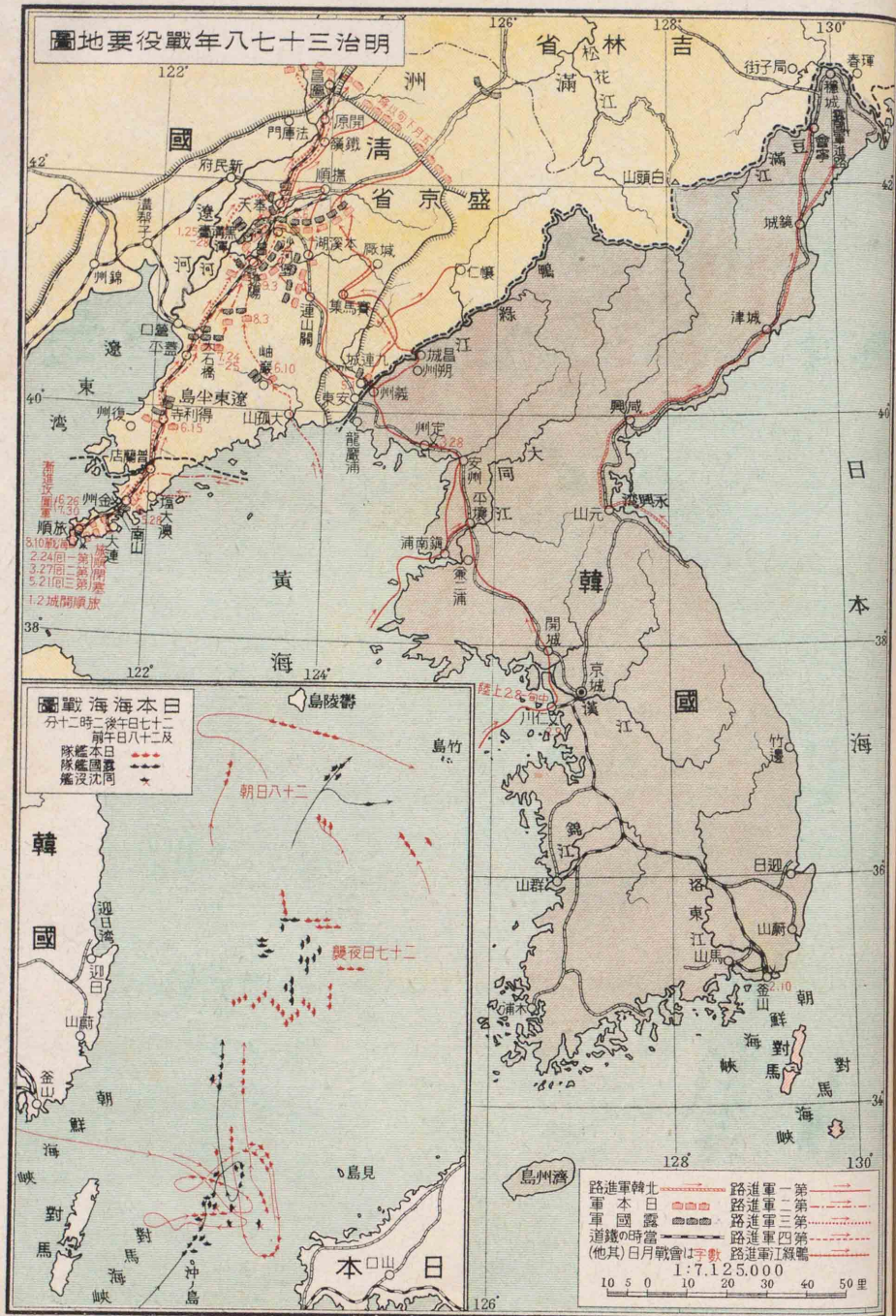
明治三十七年  
皇紀二五六四年

奉天戰

治三十七年一月露國と國交を斷ち、明治天皇は宣戰の大詔を發したまうた。我が陸海軍の將卒よく戦ひ連戦連勝し、翌年一月一日陸軍大將乃木希典の率ゐる第三軍は旅順の要塞を陥れ、三月十日には滿洲軍總司令官大山巖の統率する四十萬の我が軍は、奉天に敵



旅順開城





日本海海戦

の六十萬の大軍と會戦してこれを撃破し、海軍では五月廿七日聯合艦隊司令長官東郷平八郎が、日本海に於て敵のバルチック艦隊を撃

ポーツマス條約



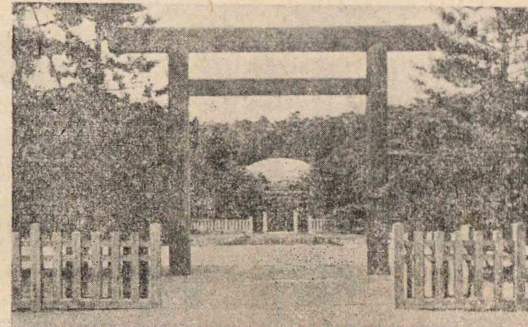
小村 壽太郎

滅した。こゝに於て米國大統領ルーズヴェルトの勧めにより、我が國は小村壽太郎を全權とし米國ポーツマスにて講和條約を結んだ。その結果、韓國に於ける我が國の優越權が認められ、露國の關東州の租借權及び南滿洲に於ける鐵道を讓らせ、樺太南半を割讓させた。

七 韓國併合 その後我が國は韓國に統監府を置いたが、明治四十三年八月韓國を併合し、これを朝鮮と改め、總督を置いてこれを治めることとした。

韓國併合  
明治四十三年

八 明治天皇崩御 かくのごとく國威が日に盛んである時天皇は明治四十五年御病に罹らせられ、國民ひとしく御平癒を祈り奉つたが、



伏見桃山御陵

遂に七月三十日御年六十一歳を以て崩御し給うた。九月御大葬の儀を行はせられ、國民哀悼のうち伏見桃山の御陵に歛め奉つた。天皇は御若くして國事多端の時にあたり、御在位四十餘年に及ばせられ、世界歴史の上にも稀に見る大御代を現出せしめ給うた。後いくばくもなく大正三年四月御婦徳の高かつた昭憲皇太后も崩御ましまし、伏見桃山東陵に葬り奉つた。

### 第四十五章

#### 明治時代の文化

●日本國の世界的躍進 この時代には、長い鎖國の夢から覺めて、躍進また躍進、忽ちにして世界列強のうち伍した日本國の雄々しい



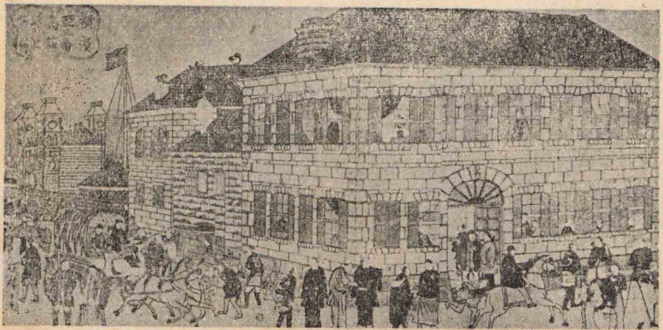
凱旋觀艦式

明治三十八年十月二十三日、凱旋觀艦式を横濱沖に行はせられ、御召艦を諸艦の間に進めて御親閲あらせられる光景である。

明治神宮聖徳記念繪畫館壁畫

—東城鉦太郎氏筆—

洋風の弊害  
横濱亞三番商館  
繁榮の圖を示す。



明治初年の横濱の繁榮

姿が見られる。國威の發揚國力の充實と共に我が國が世界文化を融合醇化し、また日本獨特の文化のあることを世界に認めしめた。

●國家觀念の興盛 維新後、我が國は政治・軍事・法制・教育等著しい進歩を見せ近代國家たる體制を整へたが、しかしいづれにも日本の精神を失ふことはなかつた。西洋の文物が多く移入せられ一時は心酔のさまに見えたが、間もなく洋風模倣の弊害が知られて、我が國の長所を發揮した。明治天皇は軍人に下されし勅諭・帝國憲法・教育に關する勅語にみな國體を明らかに示させられ、國家觀念はますます盛となつた。

●宗教教育學術の發達

明治の新政が整ふにつけ、信教の自由が許

キリスト教

佛教

神道

され、その結果從來禁じられてゐたキリスト教も我が國にあつて布教せられ、佛教は維新の當初、廢佛毀釋の運動があつたが、時代の動搖がやむにつれて、次第に興つて來た。神道は幕末から尊王の思想と結び、維新後は大に振興せられる状態となつた。

教育の普及  
學術の進歩

教育の進歩はまた著しいものであつた。義務教育の制度が立ち、おのゝ家の家には文字を知らぬもののないまでに教化は普及した。その外男女の中等學校、實業學校、高等學校、各種専門の學校から大學に至るまで各地に建設せられ、學術の研究はまた西洋諸國を凌ぎ、獨創の研究が世にあらはれ、世界文化の發達に多く貢獻してゐる。印刷術の進歩はこれまた近世の文化の大きな特色である。

尾崎紅葉  
幸田露伴  
夏目漱石

④文學美術 幕末の騷擾の爲めに文藝は殆んど顧みられなかつたが、後次第に復活して來た。就中小説の發達を來し、尾崎紅葉、幸田露伴、夏目漱石等有名であるが、又西洋文學の翻譯紹介を以て名をなし

森 鷗外  
坪内逍遙  
島崎藤村  
正岡子規



た森鷗外、坪内逍遙の如きもあつた。西洋の詩に倣つた新體詩が行はれ、島崎藤村の如き詩人も出た。正岡子規の如きは和歌、俳句に於ける革新の運動をなし、功績の見るべきものがあつた。又美術に於ては特色ある日本

狩野芳崖  
橋本雅邦

畫の興隆があつて、はやく狩野芳崖、橋本雅邦が出て、その後は各流派その美を競ふさまである。西洋畫の移入はすでに幕府時代にあつたが、明治に入つては純粹な西洋畫が盛んになり、また日本畫にも影響を與へた。繪畫



正岡子規

と並んで彫刻、建築もよく西洋の長所を取り、長足の進歩を見た。

⑤産業交通の發達 維新以後人力車が發明せられて、洋風の馬車と共に大いに流行した。明治五年には東京横濱間に鐵道が開通して

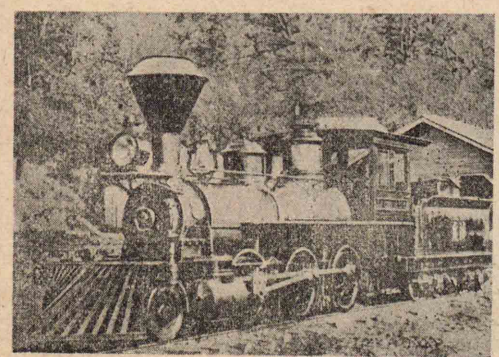
鐵道開通

明治十四年東北御巡幸に際して、北海道にて御召列車を牽引した機關車辨慶號。



明治初年の新橋驛頭

の發達もまた大であつて殊に日露戰爭以後は我が産業界の進歩が急速となり、大都市及びその附近には大工場が續々と設けられ大いに活氣を呈して來た。



明治初年の機關車

から漸次増設せられ、國內の交通が進み、海上には汽船の航行が盛んとなり、その航路は世界の各地に及んでゐる。通信機關は、郵便の制度が採用せられ、電信電話線は四通八達して外國とも自由に通話することができるようになつた。而してこれらの交通通信の發達に伴ひ、商工業

大正元年(一九一二年)

大正天皇御踐祚  
大正元年  
皇紀二五七二年

世界大戰  
大正三年  
皇紀二五七四年

關東大震災  
大正十二年  
皇紀二五八三年

第十一篇 最近世 第二期 大正・昭和時代

第四十六章 大正時代

●大正時代の概観 明治四十五年七月三十日明治天皇崩御あらせ



大正天皇

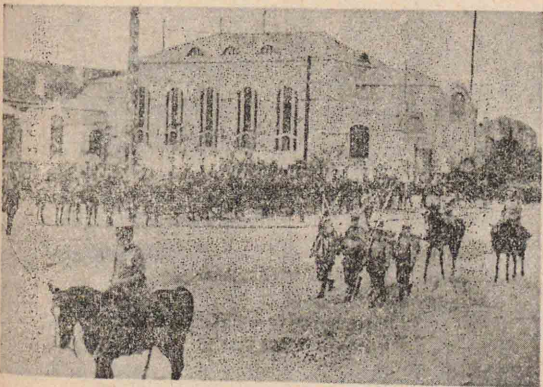
られ、同日大正天皇踐祚したまひ、大正四年十一月には御即位の大禮を挙げさせられた。大正の御代は、明治の大御代の後をうけられて國運いよ／＼伸び、大正三年世界大戰の起るや、我が國の威望は列強の間に高まり、ために東洋の天地は甚しき擾亂を見ることなかつた。偶、十二年九月關東地方に大地震が起り、死傷者十萬餘に及び帝都は殆んど焦土となつた。天皇は畏くも御内帑金を賜はつてこれを救濟せしめられ

普通選挙  
大正十四年

十一月國民精神作興の詔書を下し、民心を勵まし給うた。續いて多年の懸案であつた普通選挙法案が、十四年五月勅令を以て公布せられた。かくて國民はみな政治に參與し、いよゝゝ國運の隆興に盡すべきときとなり、立憲政體は我が國に於てますます健全に發達を遂ぐることとなつた。

世界大戦  
大正三年  
皇紀二五七四年

●世界大戦 日露戦争の後歐羅巴に於ては、英・露・佛の三國が相結び、獨逸の同盟國と對立の形勢にあつたが遂に大正三年八月戦を交へるに至つた。我が國はかねてからの日英同盟の約により、獨逸に對して戦を宣することとなつた。かくて獨逸の據つてゐた膠州灣に兵を送つて陥落せしめ、また南洋方面にも艦隊を派して、獨領南洋



青島入場式

膠州灣攻撃

ヴェルサイユ講和條約  
大正八年

諸島を占領せしめ、更に地中海方面にも活動し、露西亞に革命が起るとまた兵を派してチエツコスロヴァキア軍を援助した。七年獨逸の同盟國側は遂に屈し、翌年ヴェルサイユ講和條約が締結せられ、國際聯盟規約また定められた。我が國は膠州灣に關する一切の權利を讓られ、赤道以北の獨領南洋諸島の委任統治權を得た。戦後我が國は世界の五大強國の一として國際聯盟の中に重きをなすに至つた。その後大正十年皇太子裕仁親王の御渡歐について、北米合衆國の發議によつて、ワシントンに海軍軍縮會議が開かるゝや、我が國も使を派遣して互に世界平和のために議するところがあつた。

●文化の大勢 大正時代にあつては、我が國の内外にかく重大事件の續出したにも拘はらず、上下和協してよく事に當り外交の更新經濟の發達、文教の興隆等國運の伸張國力の充實に於て著しいものがあつた。

皇太子殿下御渡歐  
ワシントン會議

文學藝術は明治時代からつづいて各方面に進展を見、新派・新傾向がおこり、新舊その美を競うた。文部省の催す美術展覽會は美術並に工藝の進歩をたすけ、民間には映畫が發達した。

④大正天皇の崩御 大正十五年十二月、天皇は葉山(神奈川県三浦郡)の御用邸にて崩御遊ばされた。翌年一月、天皇を大正天皇と諡(オキナヒ)し奉り、二月多摩陵(東京都南多摩郡)に葬り奉つた。

大正十五年  
皇紀二五八六年

### 第四十七章 現代の情勢

●今上天皇の御即位 大正十五年十二月二十五日、大正天皇は崩御あらせられ、さきに攝政とならせ給うた今上天皇は直ちに踐祚し給ひ、昭和の新元號を立てられ、次いで昭和三年十一月、京都に於て即位の大典を擧げさせ



今上陛下

大正天皇御崩御

今上天皇御即位

られた。

●ゼネヴァ會議とロンドン會議 さきに大正十年ワシントン會議があつて、日・英・米・佛・伊の五ヶ國は、主力艦の制限を約したが、米國は更に補助艦の制限を行はうとして、昭和二年日・英・米の三國は瑞西のゼネヴァ(Geneva)に於て會議し、我が國よりは齋藤實が全權としてこれに列したが、英・米各とるところを固く持して會議は遂に纏ることなく終つた。翌年、パリ(Paris)にて不戰條約が締結せられ、さらに昭和五年には、日・英・米・佛・伊の五國ロンドンに會して海軍の縮小を約した。我が國は若槻禮次郎を全權として派遣し、各國は海軍の勢力を制限することを約した。その後同九年、我が國はさきに締結したワシントン(London)條約を廢止する旨を通告し、また十年にはロンドンに於て再び軍縮會議が開かれて、我が國代表もこれに出席したが、我が國の提出した比率主義の廢棄、各國公平妥當なる軍備の縮小等の主張が關係國の議と合は

ゼネヴァ會議

ロンドン會議  
昭和五年  
皇紀二五九〇年

ず、我が國は翌年一月この會議をやむなく脱退するに至つた。

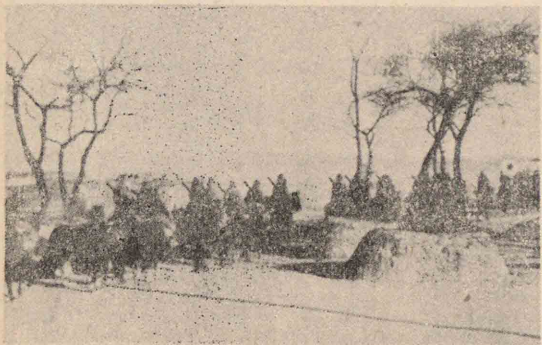
●滿洲事變と滿洲國の獨立 中華民國は成立以來動亂の絶間なく、

そのため我が居留民の慘害を蒙るものが少くなかつた。後、南京に國民政府が組織せられ、中央政府として列國の承認を得たが、我が國

張學良

〔圖説〕

我が軍が滿洲各地を平定し、長驅してチ、ハル城に入る状況である。



チ、ハル、ル、入、城

に對しては極端なる排斥的態度を執り、就中、滿洲の實權を握る張學良は、我が國が滿洲にて有する既得權を侵害し、昭和六年九月我が南滿洲鐵道を破壊するに至つた。こゝに於て我が國はやむなく軍を動かし、張學良の軍を伐つた。

この機に乗じて滿洲人は獨立を謀り、奉天、吉林、熱河、黑龍江の四省及び内蒙古の一部を併せて滿洲國となし、昭和七年三月獨

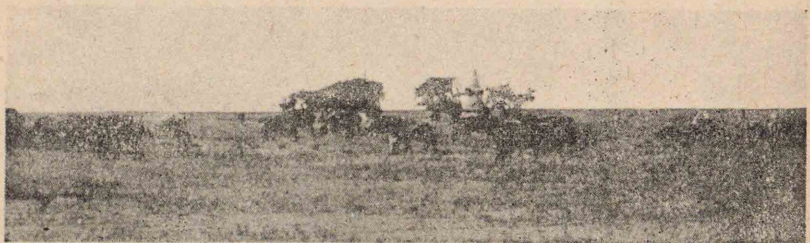
立を宣言し、同年九月我が國もこれを承認した。

その後執政溥儀を皇帝に推戴し帝政を布かうとする運動が起り、遂に九年三月滿洲帝國となし、年號を康德と改めた。これよりまへ日支兩國の紛争に關して、國際聯盟は正當なる我が主張を承認しなかつたので、八年三月やむなくこれを脱退するに至つた。その後滿洲國は我が友邦として日々進運に向ひ、十年には皇帝親ら我が皇室を訪問せられ、兩國の親善いよ／＼深きものがある。

昭和十三年には伊太利獨逸等の諸國は滿洲帝國を承認するに至り、滿洲帝國の國際的地位は高まり、日滿兩國の提携は東洋平和のためいよ／＼強固となつて來た。

聯盟脱退

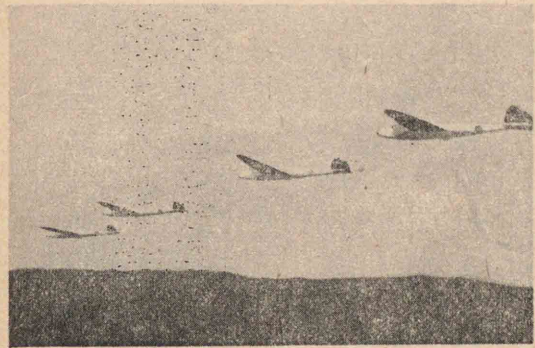
昭和八年  
皇紀二五九三年



滿洲の平野

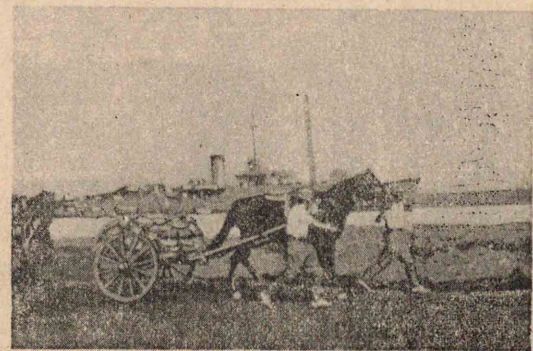


國語 事變のはじまりに於て我が軍艦が飛行機と共同して防備にあたる状況。



我が荒鷲部隊(檢閱濟)

支那事變 かやうな形勢にあつて、支那ではその時の國民政府は、まへから抗日の運動をつゞけ、支那の民衆を煽動するがときき舉に出で、我が國が東洋平和のため日支親善を

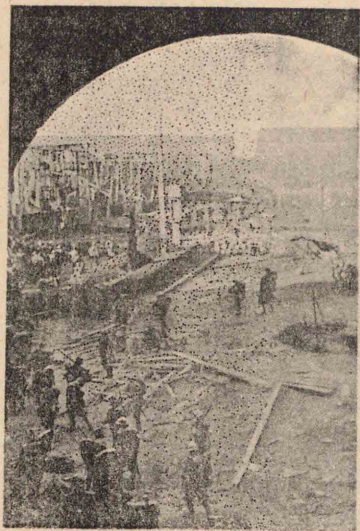


海上に於ける陸海軍共同進出(檢閱濟)

保ち東亞民族の福祉の増進をひたすら圖つてゐる意を解することなく、却つて屢々事端を起しては挑戰的態度を以て我が國に對立するさまであつた。かゝるうちに昭和十二年七月北京の郊外の蘆溝橋にあつて演習中の我が軍隊に對し

不法にも支那側から發砲するに至つた。我が國はこれに對して事件の擴大せざるやう努力したにもかゝらず、蔣介石は忽ちに大軍を北支那及び上海に動かし、戰鬥を開始するに至つた。

國語 南京陥落し、皇軍城内に殺到する様。



南京陥落(檢閱濟)

ここに於て我が國は支那全土にある我が居留民を保護し、軍を北支、中支、南支に送り、北は北京を收め、進んで綏遠に入り、中央部に於ては上海より南京を攻略し、さらに武漢三鎮を陥れて西は太原を保ち、南方にては廣東に入城し、海南島を占據するに至つた。しかもなほ蔣介石援助の途をふさぐため佛領印度支那に進駐した。かくて皇軍は到るところに捷ち、着々戰果を收めつゝあるが、またそれとともにその地にあつて東洋文化の健全なる發育のために力

を盡してゐる。また重慶に逃げ入つた蔣介石政權は奥地にあつて徒らに紛亂を續けんとしてゐるが昭和十五年三月、南京には新たに國民政府が成立したので、我が國はこれを助けて今や共に東亞新秩序の建設に邁進してゐる。

④國民の覺悟 以上述べたごとく我が國は肇國このかた上には一系無窮の寶祚を傳へ給ふ天皇を戴き奉り、仁恕の御徳化は洽く下に及び、臣民はみな共に克く忠、克く孝にして、勇武醇厚の風あつて、上下和合し、君民一心、國體の精華はまことに天地と共に存するところである。我が國史の成跡は即ちこの國體の精華の發露に外ならぬ。

目を轉じて世界諸外國の形勢を観るに、歐羅巴は今や戰雲黒くうづまき、獨逸は英佛と戰ひ、佛を挫ぎ、ポーランドの地を併せ、また丁抹・諾威・和蘭・白耳義に進入し、伊太利は獨逸と協力して、バルカン半島に戰ひ、またアフリカ北岸に激戰を繰り返してゐる。しかも昭和十六

年六月には獨逸はさらにソヴィエト聯邦に宣戰を布告し、忽ちにして東歐の地は戰火の燃えさかる地となつた。

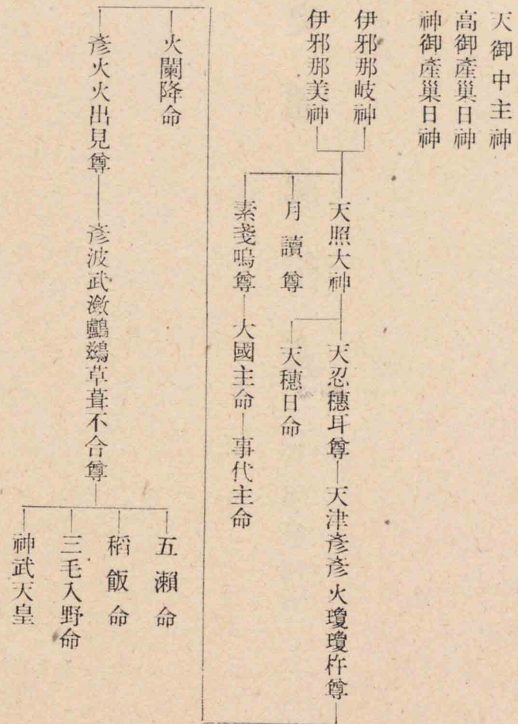
我が國はさきに獨逸・伊太利と三國同盟を結び、ソヴィエト聯邦とは中立條約を締結し、この世界の大波瀾のうちに敢然たつて建闘をつゞけつゝある。これまさに國民總べての精神を動員し、堅忍不拔の信念を以て國家の事に當るべき秋である。我等國民は日夜思ひをここに致して、上は則ち肇國の大御心と御歴代天皇の御聖旨を仰ぎ奉り、下は國民つねに心を協せ、私を忘れ公に奉じ、以て國家永遠の道を體得し、いよいよ國運の隆昌に貢獻せんことを努めねばならぬ。

附  
錄

國史通記年表  
(初年級用)

時代	天皇	紀元	年	重	要	事	項	西紀	外國史對照
一	神武天皇	一	元年	天皇	橿原宮に即位し給ふ	○媛蹈鞺五十鈴媛命を立て、皇后とす	前六〇	此頃アツシリヤ極盛	
二		二	二年	國造・縣主を置く					
三		三	三年	靈時を鳥見山中に作りて皇祖天神を親祭し給ふ					
四		四	四年	天皇諸國を巡幸して民情を察し又高丘に登りて國を見給ふ					
一六	懿德天皇	一六	二六六年				四八五	此頃釋迦死す	
一八		一八	三一年				四八〇	サラミス海戰	
二二		二二	三二年				四七九	孔子死す	
三三	孝昭天皇	三三	六三年				三三	アレキサンダー大王ベルシヤ征服	
三六	孝安天皇	三六	七〇年				三三	秦始皇帝支那を統一す	
三七	孝靈天皇	三七	一三年				三三	漢劉邦帝位に即く	
三八	孝元天皇	三八	五〇年				二〇	漢武帝朝鮮を滅す	
三九	開化天皇	三九	一〇年	神鏡・靈劍を倭笠縫邑に奉遷す					
四〇	崇神天皇	四〇	一〇年	四道將軍を派遣す					
四一		四一	十一年	四道將軍戎夷の平ぎたるを復奏す					

神代御略系



時代	天皇	紀元	年號	重要事項	西紀	外國史對照
	崇神天皇	五五 五八〇 六〇四 六一	一二年 一七年 四一年 四八年 六一年 六二年 六五年	始めて人民を校へ、調役を課す 諸國に詔して船舶を造らしむ 豐城入彦命をして東國を治めしむ 農事を勧め池溝を掘らしむ 任那始めて朝貢す	毛 新羅建國 毛 高句麗建國	
	垂仁天皇	六三 六六 六八 六九 七〇 七一 七二	一二年 二五年 二八年 三二年 三五年 四〇年 四一年 五四年 九〇年	倭姫命をして天照大神を伊勢渡會宮に鎮座せしむ 詔して殉死を止む 土偶を以て殉死に代ふ 諸國に池溝を開くこと八百餘 田道間守を常世國に遣はす 田道間守常世國より歸る 熊襲を親征し給ふ 天皇日向より還幸 武内宿禰をして北陸及東方諸國を巡察せしむ 日本武尊熊襲を征す 日本武尊蝦夷を征す 蝦夷の捕虜を畿外に置く 東山・東海諸州に巡幸	一八 百濟建國 五 翌年キリスト生る 後三 三 光武帝漢を再起す	
	景行天皇	七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九	元年 一二年 一九年 二五年 二七年 四〇年 五一年 五三年	國郡に長を立て、縣邑に首を置く 山河を界として國縣を分つ 天皇熊襲を親征し給ふ 崩御、秘して喪を發せず○神功皇后新羅を征し給ふ 皇后凱旋して天皇を葬る	一六 漢、羅馬と交通す	
	成務天皇	七四 七五 七六	四年 五年 六年			
	仲哀天皇	八〇 八一	二年 九年	神功皇后攝政 弓月君歸化す○百濟縫衣の工女を買す 百濟より阿直岐來る 百濟の王仁、治工・釀酒人・呉服師を率ゐて來朝し また論語十卷・千字文一卷を上る 阿知使主十七縣の人々を率ゐて歸化す 阿知使主を吳に遣す 阿知使主工女を伴ひて歸る	二六〇 西晉の統一	
	應神天皇	八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇	元年 八〇年 八三年 八四年 八五年 八九年 一〇六年 一一〇年	難波遷都 三年間百姓の課役を免し給ふ 難波の堀江を穿つ 始めて藏職を置き藏部を定む	三六 西晉滅び東晉起る 三五 羅馬東西兩帝國に分る	
	履中天皇	一〇五	六年			
	反正天皇					
	允恭天皇	一〇七	四年	盟神探湯を行ひて姓氏を正す		

時代	天皇	紀元	年號	重要事項	西紀	外國史對照
	崇神天皇	五五 五八〇 六〇四 六一	一二年 一七年 四一年 四八年 六一年 六二年 六五年	始めて人民を校へ、調役を課す 諸國に詔して船舶を造らしむ 豐城入彦命をして東國を治めしむ 農事を勧め池溝を掘らしむ 任那始めて朝貢す	毛 新羅建國 毛 高句麗建國	
	垂仁天皇	六三 六六 六八 六九 七〇 七一 七二	一二年 二五年 二八年 三二年 三五年 四〇年 四一年 五四年 九〇年	倭姫命をして天照大神を伊勢渡會宮に鎮座せしむ 詔して殉死を止む 土偶を以て殉死に代ふ 諸國に池溝を開くこと八百餘 田道間守を常世國に遣はす 田道間守常世國より歸る 熊襲を親征し給ふ 天皇日向より還幸 武内宿禰をして北陸及東方諸國を巡察せしむ 日本武尊熊襲を征す 日本武尊蝦夷を征す 蝦夷の捕虜を畿外に置く 東山・東海諸州に巡幸	一八 百濟建國 五 翌年キリスト生る 後三 三 光武帝漢を再起す	
	景行天皇	七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九	元年 一二年 一九年 二五年 二七年 四〇年 五一年 五三年	國郡に長を立て、縣邑に首を置く 山河を界として國縣を分つ 天皇熊襲を親征し給ふ 崩御、秘して喪を發せず○神功皇后新羅を征し給ふ 皇后凱旋して天皇を葬る	一六 漢、羅馬と交通す	
	成務天皇	七四 七五 七六	四年 五年 六年			
	仲哀天皇	八〇 八一	二年 九年	神功皇后攝政 弓月君歸化す○百濟縫衣の工女を買す 百濟より阿直岐來る 百濟の王仁、治工・釀酒人・呉服師を率ゐて來朝し また論語十卷・千字文一卷を上る 阿知使主十七縣の人々を率ゐて歸化す 阿知使主を吳に遣す 阿知使主工女を伴ひて歸る	二六〇 西晉の統一	
	應神天皇	八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇	元年 八〇年 八三年 八四年 八五年 八九年 一〇六年 一一〇年	難波遷都 三年間百姓の課役を免し給ふ 難波の堀江を穿つ 始めて藏職を置き藏部を定む	三六 西晉滅び東晉起る 三五 羅馬東西兩帝國に分る	
	履中天皇	一〇五	六年			
	反正天皇					
	允恭天皇	一〇七	四年	盟神探湯を行ひて姓氏を正す		



時代	天皇	紀元	年	號	重	要	事	項	西紀	外國史對照
代	推古天皇	二七九	二八〇	二八〇	聖德太子、馬子と議して天皇記・國記・臣・連・伴造・國造百八十部并公民等の本記を録す	六八	隋滅び唐起る	六八	六八	隋滅び唐起る
	舒明天皇	二九〇	二九〇	二九〇	聖德太子薨す（紀には前年とあり）	六三	ムハメッド教紀元元年	六三	六三	ムハメッド教紀元元年
	皇極天皇	二九五	二九五	二九五	鳥佛師をして釋迦三尊像を造らしむ					
	孝德天皇	二九六	二九六	二九六	寺及僧尼を校へ録す、時に寺四十六、僧八百十六人、尼五百六十九人					
	天智天皇	二九七	二九七	二九七	高麗僧慧灌來朝す					
江(近)	天智天皇	二九七	二九七	二九七	犬上御田鍬を唐に遣す	六五	唐太宗貞觀四年	六五	六五	唐太宗貞觀四年
	天智天皇	二九七	二九七	二九七	上毛野形名を遣はし、蝦夷を討平す					
	天智天皇	二九七	二九七	二九七	六月十二日蘇我蝦夷・入鹿誅に伏す					
	天智天皇	二九七	二九七	二九七	六月十九日年號を立て、大化とす					
	天智天皇	二九七	二九七	二九七	改新の詔を宣し給ふ					
	天智天皇	二九七	二九七	二九七	八省百官を置く					
	天智天皇	二九七	二九七	二九七	西海使百濟より還り駱駝・驢を獻す					
	天智天皇	二九七	二九七	二九七	阿倍比羅夫蝦夷を討ち、肅慎人と戦ふ					
	天智天皇	二九七	二九七	二九七	比羅夫郡領を後方羊蹄に置く					
	天智天皇	二九七	二九七	二九七	比羅夫復肅慎を討つ○皇太子始めて漏刻を造る					
	天智天皇	二九七	二九七	二九七	天皇西征の軍を發し給ふ					
	天智天皇	二九七	二九七	二九七	冠位二十六階を制す○筑紫に大堤をつくる、水城といふ	六四	前年新羅百濟を滅す	六四	六四	前年新羅百濟を滅す

時代	天皇	紀元	年	號	重	要	事	項	西紀	外國史對照
藤原(代)	天智天皇	二九七	二九七	二九七	都を近江大津宮に遷す	六六	唐高麗を滅す	六六	六六	唐高麗を滅す
藤原(代)	天智天皇	二九七	二九七	二九七	近江令成る					
藤原(代)	天智天皇	二九七	二九七	二九七	戸籍を造る、これを庚午年籍といふ○法隆寺に火あり					
藤原(代)	天智天皇	二九七	二九七	二九七	始めて漏刻を新臺に置き、鐘鼓を撃ちて時を警む					
藤原(代)	天智天皇	二九七	二九七	二九七	帝紀及び上古の事を撰せしむ○多禰嶋に遣せる使其國の圖を上る					
藤原(代)	天智天皇	二九七	二九七	二九七	天下萬姓を混じて八姓とす					
藤原(代)	天智天皇	二九七	二九七	二九七	爵位を改め、併せて四十八階とす					
藤原(代)	天智天皇	二九七	二九七	二九七	忍壁親王・藤原不比等々に勅して律令を撰せしむ					
藤原(代)	天智天皇	二九七	二九七	二九七	律令成る					
藤原(代)	天智天皇	二九七	二九七	二九七	武藏國秩父郡和銅を獻す○正月十一日和銅と改元、始めて銀錢・銅錢を行ふ					
藤原(代)	天智天皇	二九七	二九七	二九七	都を平城京に遷す					
藤原(代)	天智天皇	二九七	二九七	二九七	太安麻呂古事記を上る○始めて出羽國を置く					
藤原(代)	天智天皇	二九七	二九七	二九七	諸國風土記を上らしむ	七三	唐玄宗即位	七三	七三	唐玄宗即位
藤原(代)	天智天皇	二九七	二九七	二九七	藤原不比等に律令を刊修せしむ					
藤原(代)	天智天皇	二九七	二九七	二九七	天下百姓をして襟を右にせしむ					
藤原(代)	天智天皇	二九七	二九七	二九七	舍人親王日本書紀三十卷を上る					
藤原(代)	天智天皇	二九七	二九七	二九七	始めて日本書紀を講す					

時代	天皇	紀元	年號	重要事項	西紀	外國史對照
長	聖武天皇	一三八四	神龜元年	多賀城成る 渤海始て朝貢す○國家平安の爲め金光明經六十四 帙六百四十卷を諸國に頒つ 大隅隼人等貢調 施藥院を設く		
時	孝謙天皇	一四二	天寶四年	大佛開眼供養の式を舉ぐ 唐僧鑑眞・法進等來朝す		
代	淳仁天皇	一四二	天寶五年	秋田城成る		
平	桓武天皇	一四〇	寶龜元年	道鏡を貶す 造長岡宮使を任じ、都城宮殿を經營す 最澄延曆寺を建つ 都を平安京に奠む 續日本紀成る 征夷大將軍坂上田村麻呂蝦夷を平定す 膽澤城を築く 志波城を築く 遣唐大使藤原葛野麻呂等發す、最澄・空海之れに 隨つて入唐す	八〇六	唐の憲宗の世
	稱徳天皇	一四九	景雲三年	和氣清麻呂道鏡の非望を挫く		
	光仁天皇	一四〇	寶龜元年	道鏡を貶す		

時代	天皇	紀元	年號	重要事項	西紀	外國史對照
安	桓武天皇	一四六	大同元年	空海唐より歸朝して眞言宗を傳ふ 齋部廣成古語拾遺を上る	八〇六	唐の憲宗の世
時	嵯峨天皇	一四七	大同二年	藏人所を置く○藥子の變 空海金剛峰寺を建つ		
代	淳和天皇	一四八	天長五年	空海綜藝種智院を起す		
	仁明天皇	一五〇	承和八年	藤原緒嗣等日本後紀を上る		
	文德天皇	一五七	天安元年	藤原良房太政大臣に任ぜらる		
	清和天皇	一五八	天安二年	良房攝政となる		
	陽成天皇	一五九	貞觀十年	貞觀格を撰す○續日本後紀成る 貞觀式を撰す		
	光孝天皇	一五九	同一年	藤原保則をして坂夷を討たしむ、また小野春風等 をして出羽の賊を伐たしむ 文德實錄成る		
	宇多天皇	一五七	同三年	在原氏奨學院を起す		
	醍醐天皇	一五九	昌泰二年	藤原基經關白となる 遣唐使の派遣を停む 藤原時平を左大臣に、菅原道眞を右大臣に任ず		



時代	天皇	紀元	年	號	重	要	事	項	西紀	外國史	對照
平	醍醐天皇	一五一	延喜元年		菅原道真左遷せらるる○三代實錄五十卷成る○延喜格十卷を上る				六一	英國のアルフレッド大王死す	
安	朱雀天皇	一五五	同 五年		諸國に命じて風土記を上らしむ				六七	唐滅ぶ	
時	村上 天皇	一五七	同 五年		延喜式五十卷を上る				六七	前年渤海滅ぶ	
代	後一條天皇	一六〇	承平五年		平將門伯父常陸大掾平國香を殺す				六八	新羅滅ぶ	
時	冷泉 天皇	一六〇	天慶三年		平將門誅せらる				六八	宋起る	
安	圓融 天皇	一六一	同 四年		藤原純友誅せらる				六九	オットー大帝神聖羅馬皇帝になる	
時	花山 天皇	一六四	天元四年		源高明左遷さる				六九	宋起る	
代	一條 天皇	一六四	寛和元年		源信往生要集を撰す				七〇	宋の眞宗、遼の聖宗の世	
時	三條 天皇	一六八	永延二年		賊首袴垂保輔を追捕す				七〇		
代	後一條天皇	一七三	天喜元年		道長の上東門第に行幸し競馬騎射等を天覽す				七三		
時	後冷泉天皇	一七七	同 五年		平等院鳳凰堂成る				七三		
安	後三條天皇	一七三	同 四年		安倍頼時誅せらる				七三		
時	堀河 天皇	一七四	應徳三年		寛徳二年以後新置の莊園を停む○記録所を設く				七三		
代	鳥羽 天皇	一七三	永久元年		量衡の制を定む				七三		
時	崇徳 天皇	一七六	大治元年		延暦寺僧徒祇園感神院に入りて嗽訴す				七三		
安	近衛 天皇	一七九	同 四年		藤原清衡中尊寺を建つ				七三		
時	後白河天皇	一八三	仁平二年		鳥羽上皇院政を執る○平忠盛南海の賊を捕ふ				七三	南宋の高宗の世	
代	二條 天皇	一八六	保元元年		平清盛、嚴島神社の社殿を造營す				七三		
時	六條 天皇	一八七	仁安二年		保元の亂				七三		
代	高倉 天皇	一八七	安元元年		平清盛太政大臣に任ぜらる				七三		
時	高倉 天皇	一八七	治承元年		平清盛、成親等を捕ふ				七三		

時代	天皇	紀元	年	號	重	要	事	項	西紀	外國史	對照
平	後一條天皇	一六九	長元四年		源頼信、平忠常を降す				一〇二	西サラセン帝國分裂す	
時	後冷泉天皇	一七三	天喜元年		平等院鳳凰堂成る				七三		
安	後三條天皇	一七三	同 四年		安倍頼時誅せらる				七三		
時	堀河 天皇	一七四	應徳三年		寛徳二年以後新置の莊園を停む○記録所を設く				七三		
代	鳥羽 天皇	一七三	永久元年		量衡の制を定む				七三		
時	崇徳 天皇	一七六	大治元年		延暦寺僧徒祇園感神院に入りて嗽訴す				七三		
安	近衛 天皇	一七九	同 四年		藤原清衡中尊寺を建つ				七三		
時	後白河天皇	一八三	仁平二年		鳥羽上皇院政を執る○平忠盛南海の賊を捕ふ				七三	南宋の高宗の世	
代	二條 天皇	一八六	保元元年		平清盛、嚴島神社の社殿を造營す				七三		
時	六條 天皇	一八七	仁安二年		保元の亂				七三		
代	高倉 天皇	一八七	安元元年		平清盛太政大臣に任ぜらる				七三		
時	高倉 天皇	一八七	治承元年		平清盛、成親等を捕ふ				七三		



時代	天皇	紀元	年號	重要事項	西紀	外國史對照
吉野	後醍醐天皇	一九九二 一九九三 一九九四 一九九六 一九九八	同二年 同三年 建武元年 延元元年 同三年	隱岐遷幸○正成千早城に據る 北條氏滅ぶ○天皇還幸 侍所・雜訴決斷所を置かる 湊川の戦○吉野遷幸 北畠顯家・新田義貞戦死す		
野	後村上天皇	一九九八 二〇〇一 二〇〇八 二〇一四	同四年 興國二年 正平三年 同九年	北畠親房神皇正統記を著はす 足利氏天龍寺船を元に遣はす 正行戦死○天皇賀名生遷幸 親房薨す	一三九〇	英佛百年戦争起る
時	長慶天皇	二〇〇八 二〇一六	同二三年 天授四年	足利義滿征夷大將軍に任ぜらる 足利義滿花の御所を營む	一三六八	元滅び明起る
代	後龜山天皇	二〇一五	元中九年	天皇京都に還幸し給ふ	一三三三	李成桂朝鮮國を建つ
室	後小松天皇	二〇一五 二〇一六 二〇一七 二〇一八 二〇一九 二〇二〇 二〇二一 二〇二二 二〇二三 二〇二四	應永元年 同四年 同六年 同八年 同一年 同二年 同三年 同四年 同五年 同六年 同七年	義滿將軍職を辭し太政大臣に任ぜらる 義滿金閣を建つ 應永の亂、義滿大内義弘を滅す 義滿好を明に通す 明船永樂錢をのせて相模に漂着す○義滿高麗人を北山第に引見す 義滿明使を北山第に引見す		
町	稱光天皇	二〇二七	同二六年	將軍義持明との交通を謝絶す	一四一九	明の成祖の世

代	時	町	室
後柏原天皇	後土御門天皇	後花園天皇	後醍醐天皇
二七〇	二五八 二五九 二六〇 二六一 二六二 二六三 二六四 二六五 二六六 二六七	二二七 二二八 二二九 二三〇 二三一 二三二 二三三 二三四 二三五 二三六 二三七	二〇八 二〇九 二一〇 二一一 二一二 二一三 二一四 二一五 二一六 二一七 二一八
永正七年	同七年	同七年	同七年
應仁元年	文明五年	同九年	同二年
同二年	同一年	同一年	同一年
明應元年	延徳三年	同二年	同二年
同二年	同一年	同一年	同一年
同四年	同一年	同一年	同一年
同七年	同一年	同一年	同一年
義植出奔、翌年政知の子義澄將軍となる	早雲小田原を取る	北條早雲堀越公方家を滅す	義政明に遣はして一五年銅錢を求む
一條兼良樵談治要を著はす	應仁の亂終る	山名宗全・細川勝元卒す○義政退隱し子義尙將軍となる	應仁の亂起る○足利學校移建○雪舟等明使に従つて留學す
義政、成氏を討たしむ、成氏古河に走る(古河公方)	○建仁寺勸進船を朝鮮に遣はす	太田道灌江戸城を築く○足利政知堀越に移る	嘉吉の亂、赤松滿祐、義教を害す○幕府令して徳政を行ふ
義政家督をつぐ○宗氏朝鮮と條約を結ぶ○我邊民明疆を侵す	永享の亂起る(翌年足利持氏自殺)	義吉の亂、赤松滿祐、義教を害す○幕府令して徳政を行ふ	義政、成氏を討たしむ、成氏古河に走る(古河公方)
東羅馬帝國滅亡	英の薔薇戦争始まる	後二年、西班牙王國成る	ジャンヌダルク英軍を破る
一四五三	一四五五	一四五七	一四五九
一四六六	一四六八	一四七〇	一四七二
コロンブス亞米利加發見	ヴァスコ・ダ・ガマ始めて印度に達す	葡萄牙人臥亞を占領す	葡の成祖の世

時代	天皇	紀元	年號	重	要	事	項	西紀	外國史對照
室町時代	後柏原天皇 後奈良天皇	二八〇	同一七年	天皇即位の禮を行ひ給ふ（踐祚後二十五年） 武田信虎上杉氏と戦ふ	北條氏綱河越城を取る 葡萄牙人種子島に漂着鐵砲を傳ふ 義輝將軍となる○氏康兩上杉氏等の軍を河越に破る 宣教師フランシスコ・ザビエル鹿児島に來る 大内義隆其臣陶晴賢に害せらる 川中島の戦（前役）○嚴島の戦	桶狭間の戦 川中島の戦（後役） 信長義昭を奉じて入京す 信長皇居を修理す○姉川の戦 三方原の戦 義昭逐はれて足利將軍家亡ぶ○武田信玄死す 長篠の戦 信長安土城に移る 上杉謙信卒す	一五七 一五〇 一五三	葡萄牙人澳門を取る 西班牙船始めて太平洋に出づ マゼラン、フィリッピン群島に着す	
		二八四	同四年						
安土桃山	正親町天皇	二四三	天正十年	賤ヶ嶽の戦○秀吉大阪城修築 小牧・長久手の戦 秀吉四國平定○秀吉關白となる○北陸平定○五奉行の制	永祿三年 同四年 同七年 同八年 同九年 同十年 同十一年 同十二年 同十三年 同十四年 同十五年	元龜元年 同三年 天正元年 同三年 同四年 同六年 同七年 同八年 同九年 同十年	一五六 一五二	前年、和蘭獨立を宣言す	
		二四四	同一二年						
		二四五	同一三年						
		二四六	同一四年						
		二四七	同一五年						
		二四八	同一六年						
		二四九	同一七年						
		二五〇	同一八年						
		二五一	文祿元年						
		二五二	慶長元年						

時代	天皇	紀元	年號	重	要	事	項	西紀	外國史對照
江戸時代	後陽成天皇	二五三	同二年	聚樂第成る、秀吉太政大臣に任じ豊臣の姓を賜ふ、方廣寺を東山に建つ 秀吉九州を平ぐ、天主教を禁ず 聚樂第行幸 秀吉檢地を始む 小田原征伐○家康江戸城に入る○大内裏造營成る 文祿の役起る○聚樂第行幸○秀吉大阪より名護屋に赴く 小西行長明人沈惟敬と和を議す○秀吉原田孫七郎をして高山國に遣はして入貢を促す 秀吉明使を大阪城に引見、媾和破る 朝鮮に再び出兵○蔚山の戦 秀吉薨去○泗川の戦 關ヶ原の戦○蘭船豊後に漂着す	同二年 同三年 同四年 同五年 同六年 同七年 同八年 同九年 同十年 同十一年 同十二年	同二年 同三年 同四年 同五年 同六年 同七年 同八年 同九年 同十年 同十一年 同十二年	一五六 一五七 一五八 一五九 一六〇 一六一 一六二 一六三 一六四	英國東印度會社起る 和蘭東印度會社起る、 英國ゼームス一世即位 佛國東印度會社起る	
		二五五	慶長元年						
室町時代	後水尾天皇	二七三	同一八年	幕府英人の通商を許す○伊達政宗使を羅馬に遣す 京都の耶穌教會堂を毀つ○秀頼方康寺の鐘を鐺る	同八年 同九年 同一〇年 同一一年 同一二年 同一三年 同一四年 同一五年 同一六年 同一七年 同一八年 同一九年 同一十年	同八年 同九年 同一〇年 同一一年 同一二年 同一三年 同一四年 同一五年 同一六年 同一七年 同一八年 同一九年 同一十年	一六三 一六四	露國ロマノフ王朝始まる	
		二七四	同一九年						
		二七五	同一〇年						
		二七六	同一一年						
		二七七	同一二年						
		二七八	同一三年						
		二七九	同一四年						
		二八〇	同一五年						
		二八一	同一六年						
		二八二	同一七年						

時代	天皇	紀元	年號	重要事項	西紀	外國史對照
江	後水尾天皇 ○ハコノミツノ	三三五 三三六 三三七 三三八 三三九 三四〇 三四一	元和元年 同二年 同三年 同四年 同六年 同九年	○大阪冬の陣 大坂夏の陣○豊臣氏滅亡 家康薨す○耶蘇教を禁す○外船の來航を平戸・長崎の二港に限る 幕府諸寺の法度を頒つ 長崎・平戸を英吉利貿易港となし耶蘇教を禁す 秀忠の女和子入内○支倉常長歸朝 秀忠退隠し家光將軍となる		
戶	明正天皇 ○メイシキ	三九五 三九六 三九七 三九八 三九九 四〇〇 四〇一	寛永十年 同十三年 同十四年 同十五年 同十六年 同十七年 同十八年	參勤交代の制定まる○始めて寺社奉行を置く 邦人の海外渡航の禁○長崎に出島を築く 島原の亂起る 島原の亂平ぎ、切支丹宗の禁を嚴にす 和蘭の外西洋諸國との貿易を禁す 葡萄牙人六十一人を長崎に斬る 平戸在留の蘭人を出島に移す	一三六 一三七	滿洲國號を大清と改む 朝鮮清に降る
時	後光明天皇 ○ゴウメイ	三三一	慶安四年	家光薨去、家綱將軍となる○由井正雪の變		
代	後西天皇 ○ゴサイ	三三五 三三七 三三九 三四〇 三四一	明曆元年 同三年 萬治二年 寛文元年	保科正之社會法を領内に行ふ 江戸大火○徳川光圀大日本史編纂の業を起す 隠元萬福寺を創む	一六一	明滅び清支那を統一す○鄭成功臺灣に據る
江	靈元天皇 ○レイゲン	三三〇	延寶八年	家綱薨去、綱吉將軍となる		

時代	天皇	紀元	年號	重要事項	西紀	外國史對照
江	東山天皇 ○ヒサカミ	三三〇 三三二 三三三 三三六 三三七 三三九 三四〇	元祿三年 同一年 同三年 寶永六年	綱吉聖堂を湯島に興す○綱吉自ら四書を講ず 光圀薨す 赤穂義士の復讐 綱吉薨去、家宣將軍となる	一七〇	翌年、露國ベートルブルグに都す
戶	中御門天皇 ○ナカミカド	三三三 三三六 三三七 三三九 三四〇 三四一	同七年 正徳二年 同三年 享保元年 同五年 同八年	金銀貨の改鑄○勘定奉行萩原重秀を貶く 家宣薨去 金貨の改鑄○家綱將軍となる 家綱薨去、吉宗將軍となる 洋書舶來の禁を弛む 足高の制を定む		
時	櫻町天皇 ○オウ	二四〇 二四五	元文五年 延享二年	一橋家起る 吉宗退隠、家重將軍となる	一七四	普、フレデリック大王即位
代	桃園天皇 ○ウツノ	二四九 二五〇	寶曆九年 同一〇年	竹内式部追放 家重退隠、家治將軍となる		
江	後櫻町天皇 ○ゴウオウ	二四七	明和四年	山縣大貳・藤井右門等罪せらる		
戶	後桃園天皇 ○ゴウウツノ	二四三	天明三年	諸國饑饉○淺間山噴火	一七三	北米合衆國獨立承認せらる
時	光格天皇 ○ミツカ	二四三	天明三年			





時代	時	和	昭	西紀	外國史對照
天	皇	紀元	年	號	重
大正	天皇	二五八	同	一〇年	〔三月〕皇太子海外御巡遊〔十一月〕皇太子攝政御就任○ワシントン會議開かる
二五九	同	二五九	同	一〇年	〔四月〕英國皇太子來朝〔六月〕加藤友三郎内閣成る〔十一月〕膠州灣還附調印
二六〇	同	二六〇	同	一〇年	〔九月〕關東大震災火災〔十一月〕國民精神作興に關する詔勅下る
二六一	同	二六一	同	一〇年	〔一月〕清浦内閣成る○皇太子殿下御成婚式〔六月〕加藤高明内閣成る
二六二	同	二六二	同	一〇年	〔十二月〕天皇崩御
二六三	同	二六三	同	一〇年	〔十二月〕天皇御踐祚
二六四	同	二六四	同	一〇年	〔二月〕大正天皇御大喪〔六月〕支那山東省へ出兵○ジュネーブ軍縮會議開かる〔六月―八月〕
二六五	同	二六五	同	一〇年	〔十一月〕今上天皇即位大禮
二六六	同	二六六	同	一〇年	〔十月〕伊勢神宮の遷宮式擧げらる
二六七	同	二六七	同	一〇年	〔一月〕ロンドン軍縮會議開かる〔一月―四月〕
二六八	同	二六八	同	一〇年	〔四月〕若槻内閣成る
二六九	同	二六九	同	一〇年	〔九月〕滿洲國承認
二七〇	同	二七〇	同	一〇年	〔三月〕國際聯盟退〔六月〕ロンドン世界經濟會議〔六月―七月〕皇太子殿下御誕生
二七一	同	二七一	同	一〇年	〔一月〕ロンドン條約廢止通告〔七月〕岡田内閣成る
二七二	同	二七二	同	一〇年	〔四月〕滿洲國皇帝御來訪〔十二月〕ロンドン軍縮會議開かる
二七三	同	二七三	同	一〇年	〔二月〕ロンドン軍縮會議廢止〔二月〕東京事變
二七四	同	二七四	同	一〇年	〔二月〕ロンドン軍縮會議廢止
二七五	同	二七五	同	一〇年	〔二月〕ロンドン軍縮會議廢止
二七六	同	二七六	同	一〇年	〔二月〕ロンドン軍縮會議廢止

時代	時	和	昭	西紀	外國史對照
天	皇	紀元	年	號	重
今上	天皇	二五七	同	一二年	〔七月〕支那事變起る〔八月〕北京入城
二五八	同	二五八	同	一二年	〔三月〕國家總動員法成立〔六月〕開封占領〔七月〕張鼓峯事件勃發、翌月解決〔十月〕廣東入城、武漢三鎮完全攻略
二五九	同	二五九	同	一二年	〔五月〕外蒙軍ノモンハン方面不法越境○青少年學生に勅語を賜はる〔九月〕ノモンハン事件停戦協定成立
二六〇	同	二六〇	同	一五年	〔八月〕新體制確立運動發足〔九月〕日・獨・伊三國同盟成立〔十月〕大政翼賛會發會式舉行〔十一月〕紀元二千六百年式典舉行
二六一	同	二六一	同	一五年	〔三月〕泰・佛印紛争調停〔四月〕日ソ中立條約
二六二	同	二六二	同	一五年	〔五月〕日・佛印經濟協定調印〔六月〕ブルガリア國滿洲國を承認○日ソ通商貿易協定○中央協力會門トネル開通○日ソ通商貿易協定○中央協力會議開催○對蘭印交渉切り〔七月〕十八日第三次英米兩國日本資産を凍結す〔八月〕泰國滿洲國を承認○日泰間大使交換決定〔九月〕防衛司令部創設〔十月〕滿蒙國境確定○近衛内閣總辭職
二六三	同	二六三	同	一五年	〔十一月〕日米第一次會談○防共協定
二六四	同	二六四	同	一五年	〔十二月〕日米第二次會談○防共協定
二六五	同	二六五	同	一五年	〔一月〕日・佛印經濟協定調印〔二月〕日米英對日・獨・伊三國新協定の調印なる○獨伊兩國對米宣戰○日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二六六	同	二六六	同	一五年	〔二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二六七	同	二六七	同	一五年	〔三月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二六八	同	二六八	同	一五年	〔四月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二六九	同	二六九	同	一五年	〔五月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二七〇	同	二七〇	同	一五年	〔六月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二七一	同	二七一	同	一五年	〔七月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二七二	同	二七二	同	一五年	〔八月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二七三	同	二七三	同	一五年	〔九月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二七四	同	二七四	同	一五年	〔十月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二七五	同	二七五	同	一五年	〔十一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二七六	同	二七六	同	一五年	〔十二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二七七	同	二七七	同	一五年	〔一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二七八	同	二七八	同	一五年	〔二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二七九	同	二七九	同	一五年	〔三月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二八〇	同	二八〇	同	一五年	〔四月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二八一	同	二八一	同	一五年	〔五月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二八二	同	二八二	同	一五年	〔六月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二八三	同	二八三	同	一五年	〔七月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二八四	同	二八四	同	一五年	〔八月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二八五	同	二八五	同	一五年	〔九月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二八六	同	二八六	同	一五年	〔十月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二八七	同	二八七	同	一五年	〔十一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二八八	同	二八八	同	一五年	〔十二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二八九	同	二八九	同	一五年	〔一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二九〇	同	二九〇	同	一五年	〔二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二九一	同	二九一	同	一五年	〔三月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二九二	同	二九二	同	一五年	〔四月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二九三	同	二九三	同	一五年	〔五月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二九四	同	二九四	同	一五年	〔六月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二九五	同	二九五	同	一五年	〔七月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二九六	同	二九六	同	一五年	〔八月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二九七	同	二九七	同	一五年	〔九月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二九八	同	二九八	同	一五年	〔十月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
二九九	同	二九九	同	一五年	〔十一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三〇〇	同	三〇〇	同	一五年	〔十二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三〇一	同	三〇一	同	一五年	〔一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三〇二	同	三〇二	同	一五年	〔二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三〇三	同	三〇三	同	一五年	〔三月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三〇四	同	三〇四	同	一五年	〔四月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三〇五	同	三〇五	同	一五年	〔五月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三〇六	同	三〇六	同	一五年	〔六月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三〇七	同	三〇七	同	一五年	〔七月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三〇八	同	三〇八	同	一五年	〔八月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三〇九	同	三〇九	同	一五年	〔九月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三一〇	同	三一〇	同	一五年	〔十月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三一一	同	三一一	同	一五年	〔十一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三一二	同	三一二	同	一五年	〔十二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三一三	同	三一三	同	一五年	〔一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三一四	同	三一四	同	一五年	〔二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三一五	同	三一五	同	一五年	〔三月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三一六	同	三一六	同	一五年	〔四月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三一七	同	三一七	同	一五年	〔五月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三一八	同	三一八	同	一五年	〔六月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三一九	同	三一九	同	一五年	〔七月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三二〇	同	三二〇	同	一五年	〔八月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三二一	同	三二一	同	一五年	〔九月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三二二	同	三二二	同	一五年	〔十月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三二三	同	三二三	同	一五年	〔十一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三二四	同	三二四	同	一五年	〔十二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三二五	同	三二五	同	一五年	〔一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三二六	同	三二六	同	一五年	〔二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三二七	同	三二七	同	一五年	〔三月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三二八	同	三二八	同	一五年	〔四月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三二九	同	三二九	同	一五年	〔五月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三三〇	同	三三〇	同	一五年	〔六月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三三一	同	三三一	同	一五年	〔七月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三三二	同	三三二	同	一五年	〔八月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三三三	同	三三三	同	一五年	〔九月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三三四	同	三三四	同	一五年	〔十月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三三五	同	三三五	同	一五年	〔十一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三三六	同	三三六	同	一五年	〔十二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三三七	同	三三七	同	一五年	〔一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三三八	同	三三八	同	一五年	〔二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三三九	同	三三九	同	一五年	〔三月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三四〇	同	三四〇	同	一五年	〔四月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三四一	同	三四一	同	一五年	〔五月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三四二	同	三四二	同	一五年	〔六月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三四三	同	三四三	同	一五年	〔七月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三四四	同	三四四	同	一五年	〔八月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三四五	同	三四五	同	一五年	〔九月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三四六	同	三四六	同	一五年	〔十月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三四七	同	三四七	同	一五年	〔十一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三四八	同	三四八	同	一五年	〔十二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三四九	同	三四九	同	一五年	〔一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三五〇	同	三五〇	同	一五年	〔二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三五二	同	三五二	同	一五年	〔三月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三五三	同	三五三	同	一五年	〔四月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三五四	同	三五四	同	一五年	〔五月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三五五	同	三五五	同	一五年	〔六月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三五六	同	三五六	同	一五年	〔七月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三五七	同	三五七	同	一五年	〔八月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三五八	同	三五八	同	一五年	〔九月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三五九	同	三五九	同	一五年	〔十月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三六〇	同	三六〇	同	一五年	〔十一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三六一	同	三六一	同	一五年	〔十二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三六二	同	三六二	同	一五年	〔一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三六三	同	三六三	同	一五年	〔二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三六四	同	三六四	同	一五年	〔三月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三六五	同	三六五	同	一五年	〔四月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三六六	同	三六六	同	一五年	〔五月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三六七	同	三六七	同	一五年	〔六月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三六八	同	三六八	同	一五年	〔七月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三六九	同	三六九	同	一五年	〔八月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三七〇	同	三七〇	同	一五年	〔九月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三七二	同	三七二	同	一五年	〔十月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三七三	同	三七三	同	一五年	〔十一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三七四	同	三七四	同	一五年	〔十二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三七五	同	三七五	同	一五年	〔一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三七六	同	三七六	同	一五年	〔二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三七七	同	三七七	同	一五年	〔三月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三七八	同	三七八	同	一五年	〔四月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三七九	同	三七九	同	一五年	〔五月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三八〇	同	三八〇	同	一五年	〔六月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三八二	同	三八二	同	一五年	〔七月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三八三	同	三八三	同	一五年	〔八月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三八四	同	三八四	同	一五年	〔九月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三八五	同	三八五	同	一五年	〔十月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三八六	同	三八六	同	一五年	〔十一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三八七	同	三八七	同	一五年	〔十二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三八八	同	三八八	同	一五年	〔一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三八九	同	三八九	同	一五年	〔二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三九〇	同	三九〇	同	一五年	〔三月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三九二	同	三九二	同	一五年	〔四月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三九三	同	三九三	同	一五年	〔五月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三九四	同	三九四	同	一五年	〔六月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三九五	同	三九五	同	一五年	〔七月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三九六	同	三九六	同	一五年	〔八月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三九七	同	三九七	同	一五年	〔九月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三九八	同	三九八	同	一五年	〔十月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
三九九	同	三九九	同	一五年	〔十一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
四〇〇	同	四〇〇	同	一五年	〔十二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
四〇二	同	四〇二	同	一五年	〔一月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
四〇三	同	四〇三	同	一五年	〔二月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
四〇四	同	四〇四	同	一五年	〔三月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
四〇五	同	四〇五	同	一五年	〔四月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
四〇六	同	四〇六	同	一五年	〔五月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
四〇七	同	四〇七	同	一五年	〔六月〕日泰同盟條約締結○ウエ1キ島占領
四〇八	同	四〇八	同	一五年	〔七月〕日



昭 和 時 代

今上 天皇

中華民國國民政府正式承認○泰・佛印國境劃定調  
成る(八月)第一次ソロモン海戰(十月)南太平洋  
海戰(九月)第二次ソロモン海戰(十一月)大  
東亞新設○ダカカルカナル島作戦

(略名) 積善西田國史初



昭和二十二年三月十一日發行  
昭和二十三年三月十一日發行  
昭和二十四年三月十一日發行  
昭和二十五年三月十一日發行  
昭和二十六年三月十一日發行  
昭和二十七年三月十一日發行

中國史通記 初年級用  
定價 金壹圓貳拾錢

著 者 西 田 直 二 郎

發 行 者 中 等 學 校 教 科 書 株 式 會 社

代 表 者 山 本 慶 治

大 阪 市 西 區 阿 波 座 中 通 三 丁 目 四 番 地

印 刷 所 井 下 精 一 郎

(西大三五號)

發 行 所

東 京 市 麹 町 區 飯 田 町 二 丁 目 二 十 番 地

中 等 學 校 教 科 書 株 式 會 社

日 本 出 版 文 化 協 會 會 員 番 號 一 一 七 五 三 二

配 給 元 日 本 出 版 配 給 株 式 會 社  
東 京 市 神 田 區 淡 路 町 二 九

岩野拓巳

廣陵中學校  
丁二 45 岩野拓巳

広島大学図書

2000089904

